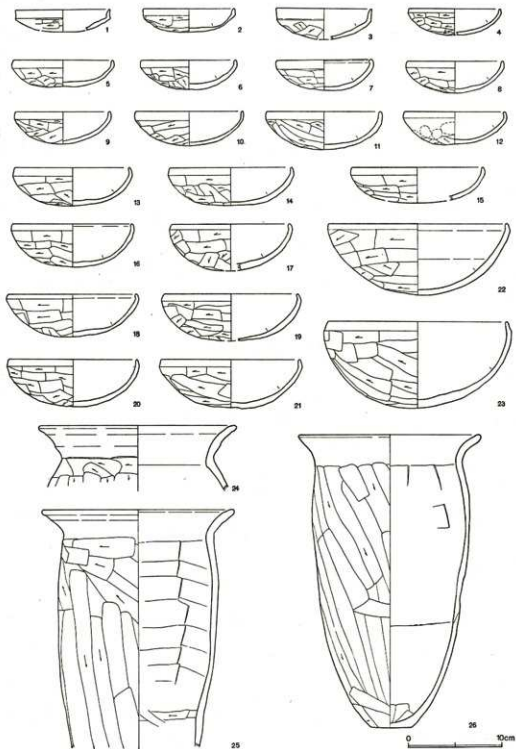


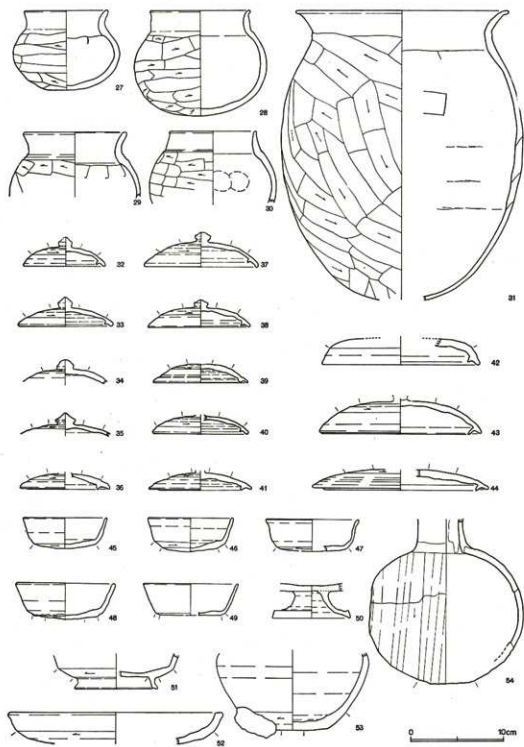
第77図 5号住居跡出土遺物分布図

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	17	12.5		5.0	BDEF	茶褐色 1	口縁部横ナゲ。体部外面寛削り。内面はナゲ。	カマドNo.4。口縁部 ^{1/10}
環	18	13.7		4.6	BCDF	茶褐色 1	口縁部横ナゲ。体部外面寛削り。内面はナゲ。	カマドNo.1。ほぼ完。
環	19	(14.3)		5.1	BCDEF	橙褐色 1	口縁部横ナゲ。体部外面寛削り。上位一部削り残し有り。	No.57。 ^{1/10}
環	20	13.7		5.0	BCDEF	橙褐色 3	口縁部横ナゲ。体部外面寛削り。内面ナゲ。磨減により不明瞭。	No.88, 90。ほぼ完。
環	21	(14.8)		5.2	BCDF	橙褐色 1	口縁部横ナゲ。体部外面寛削り。内面ナゲ。	No.9。 ^{1/10}
甕	22	19.2		7.6	ABCDE	橙褐色 3	口縁部横ナゲ。体部外面寛削り。内面ナゲ。	No.120。ほぼ完。
甕	23	19.1		9.3	ABCDE	橙褐色 1	口縁部横ナゲ。体部外面寛削り。内面ナゲ。	No.6。完存。
甕	24	(20.7)		(7.0)	ABCE。砂粒多し。	褐色 1	口縁部横ナゲ。胴部外面寛削り。内面は寛ナゲ。	No.103。 ^{1/10}
甕	25	(20.3)		(25.4)	ABCDE。砂粒多し。	茶褐色 1	口縁部横ナゲ。胴部外面寛削り。内面は寛ナゲ。	カマドNo.7。 ^{1/10}



第78図 5号住居跡出土遺物 (1)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師甕	26	19.1		31.2	ABCDEF	茶褐色 3	口縁部横ナゲ。胴部外面寛削り。胴部、底部内面寛ナゲ及びビナゲ。	№77. カマF №8. 1/60
小壺	27	8.9		8.5	ABCDE. 砂粒多し。	橙褐色 3	口縁部横ナゲ。胴部外面寛削り。内面寛ナゲ及びビナゲ。	№7. ほぼ完。
小壺	28	10.5		11.3	ABCDE. 砂粒多し。	淡橙褐色・4	口縁部横ナゲ。胴部外面寛削り。内面丁寧なナゲ。	№5. ほぼ完。
小壺	29 (10.8)			(7.1)	BDF. 砂粒多し。	褐色 3	口縁部横ナゲ。胴部との境に深い槽状工具による沈跡。内面木口状工具ナゲ。	№80. 口縁部 1/60
小壺	30	9.2		(7.7)	BDEF	橙褐色 2	口縁部横ナゲ。胴部外面寛削り。内面は指押えの後ナゲ。	№79. 140. 口縁部 2/60
甕	31	22.6		(31.1)	ABCDE	茶褐色 2	口縁部横ナゲ。胴部外面寛削り。内面寛ナゲ及びビナゲ。	№31. 口縁部 4/60 胴部 2/60
須恵蓋	32	8.6		3.2	DE	青灰色 1	ロクロナゲ。天井部回転削り。内面かえり部との境に深い凹みがめぐる。	№2. 完存。
蓋	33 (9.8)			3.1	DE	灰色 1	ロクロナゲ。天井部回転削り。	№143. 口縁部 1/60
蓋	34			(2.6)	ABCEF	橙褐色 1	ロクロナゲ。天井部回転削り。	№35. 体部 1/60 焼成は酸化焙。
蓋	35			(2.5)	白色砂粒(多). DE	青灰色 1	ロクロナゲ。天井部回転削り。	№83. 1/60
蓋	36 (9.3)			(1.8)	DE. 砂粒多し。	青灰色	ロクロナゲ。天井部回転削り。全体をつくりは、やや雑である。	№14. 1/60 接地面はかえり部。つまみ欠失。
蓋	37	11.9		3.7	DE	青灰色 1	ロクロナゲ。天井部回転削り。接地面はかえり部。	№11. 37, 49, 73, 76. 2/60 つまみ欠失。
蓋	38 (10.8)			2.9	DE・黒色粒子	淡灰色 1	ロクロナゲ。天井部回転削り。	№149. 1/60
蓋	39 (10.0)			(2.0)	ADEF	黄灰色 4	ロクロナゲ。天井部回転削り。接地面はかえり部。	№41. 口縁部 2/60 つまみ欠失。
蓋	40 (10.0)			(2.0)	白色砂粒子(多). DE	青灰色 1	ロクロナゲ。天井部回転削り。	№98. 口縁部 1/60 つまみ欠失。
蓋	41 (10.8)			(1.9)	D・黒色粒子, 比較的細かい。	明灰色 1	ロクロナゲ。天井部回転削り。	№81. 口縁部 1/60 接地面かえり部。つまみ欠失。
蓋	42 (16.6)			(2.8)	白色砂粒(多). DE	青灰色 1	ロクロナゲ。天井部カキ目。	№59. 1/60
蓋	43	17.0		(3.8)	DE	黒灰色 1	ロクロナゲ。天井部回転削り。	№4. ほぼ完。つまみ欠失。接地面はかえり部。
蓋	44 (18.6)			(2.2)	DE. 小礫・砂粒多し。	黒灰色 2	ロクロナゲ。天井部回転削り。接地面はかえり部と思われる。	№35. 口縁部 1/60 つまみ欠失。
坏	45 (8.9)	6.3		3.3	DE	黒灰色 2	ロクロナゲ。底部内面中央ナゲ、外面手持ち削り。	№70. 口縁部 1/60 底部外面は器面が荒れている。
坏	46	9.0	6.0	3.6	DE	灰色 1	体部下端回転削り。底部内面ナゲ、外面回転削り。その後、ナゲ。	№3. 4/60 底部外面線装痕状剥離する。
坏	47 (9.8)	7.0		3.5	小石(多). DE	灰色 2	ロクロナゲ。底部外面回転削りと思われる。磨滅著しい。	№42. 覆土。口縁部 2/60
坏	48 (10.8)	7.2		3.9	BCDE	橙褐色 1	ロクロナゲ。底部内面ナゲ。底部外面回転削り。その後、周辺回転削り。	覆土。2/60
坏	49 (10.0)	(6.6)		3.4	DE	黒灰色 1	ロクロナゲ。底部外面一定方向の手持ち削り。	№47. 覆土。1/60
高台盤	50		(8.1)	(3.5)	黒色粒子(多). DE	黒灰色 1	ロクロナゲ。	№45. 高台部 2/60
高台埴	51		(8.8)	(3.9)	黒色粒子(多). DE. 砂粒多し。	黒灰色 1	ロクロナゲ。底部内面中央ナゲ。体部外面下位、底部回転削り。高台貼付。	№23. 底部 1/60
盤	52 (22.6)		(3.4)	DE. 砂粒多し。	灰色 1	ロクロナゲ。体部外面下位～底部回転削り。内面はナゲ。	№44. 口縁部 1/60	



第79图 5号住居跡出土遺物(2)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
須恵瓶	53		(7.6)	(8.2)	黒色粒(少)白色 微粒子・砂粒	灰色 1	ロクロナデ。胴部外面下位、底部外面 周辺回転削り。底部外面中央指押え。	N.72, 130, 覆土。底部 $1/10$ 胴部 $1/10$ 痕量熔着。
アラス コ型薬	54		(17.9)		黒色微粒子(多) 白色粒・砂粒	灰色 1	ロクロナデ。胴部片削、回転削り。 胴部外面上半に緑褐色の自然釉。	N.1。口縁部 $1/10$ 。胴部完 熔着物で一部器底欠れる。

1号掘立柱建物跡 (第80図)

調査区ほぼ中央の9・10区に位置し、2号掘立柱建物跡と重複関係にある。土層観察によれば、2号建物跡に切られている。規模は2×4間の東西棟の建物跡で、主軸方位はN-72°-Eを指す。

各柱穴の掘り方は、円形というよりも不整ではあるが方形を基調とする。径0.5~1m、深さ35~85cmを測る比較的規模の大きいものである。隅柱間の距離は桁行7.6m、各柱間寸法は1.9m前後となる。一方梁行は全長5m、柱間寸法は約2.5mを測る。

各柱穴は、ロームブロックと(黒)褐色土とが混在する土で埋められ、非常に堅くしまっている。P₂で確認された柱痕は、柱穴の隅に偏した位置にあり、底面まで達していない。出土遺物には、土師器杯・甕の口縁部小片がある。時期は不明確だが、奈良~平安時代と考えてよからう。

2号掘立柱建物跡 (第81・82図)

調査区の中央附近にあり、1号・3号の各掘立柱建物跡と切り合いが、2号建物跡の方がより新しく位置づけられる。調査区域外にかかるため、全体の規模は不明であるが、梁行3間、桁行5間または、それを越える大型の東西棟建物である。1・3号建物跡とは軸を大きく違い、主軸方位E-1°-Sを示す。

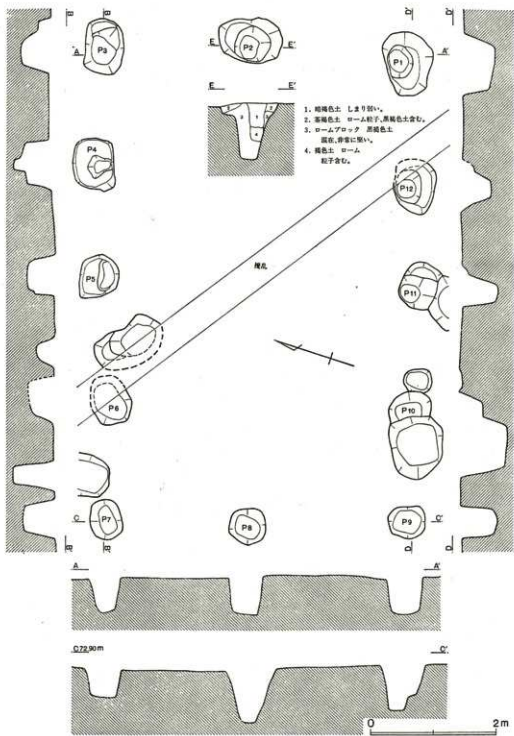
桁行の長さはP₄~P₉間で11.5m、各柱間の寸法はほぼ2.3mを測る。梁行の長さは4.8~5m、各柱間寸法は1.6~1.65mとなる。

柱穴掘り方は、方形プランを基本とする大きなもので、径0.7~1.2m、深さ65~90cmを測る。柱穴覆土はロームブロック混りの土で充填され、堅く突き固められた様な状況が認められた。

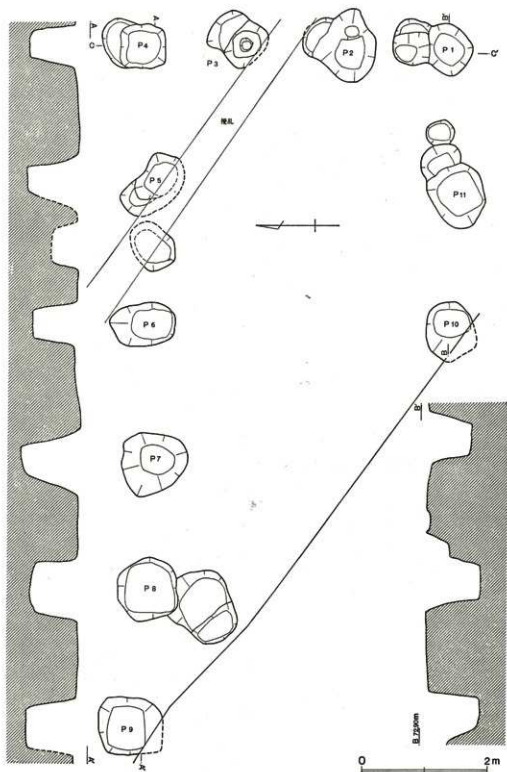
出土遺物は少ない。土師器杯の口縁部小片がP₁、P₂、P₁₁より出土した他、ほぼ完形の須恵器高台付皿がP₉掘り方から検出されたが、今回の報告時には所在不明のため図示できなかった。

3号掘立柱建物跡 (第83図)

12E・12F区を中心に位置する。2号建物跡と柱穴が一部重複し、3号建物跡の方が古い。この建物も調査区域外にかかり、規模は不明とせざるを得ない。南北2間(4.8m前後)、東西に2間分(3.8m前後)のみ検出されたが、東西列の方が柱穴間の距離が短いことが指摘できる。建物自体の向きも不明であるが、仮に東西棟と考えると主軸方位はN-71°-Eを示し、1号掘立柱建物跡と軸を揃える。柱穴掘り方は、不整形または楕円形を呈し、径0.5~1.2m、水糸レベルからの深さは65~80cmを測る。またP₉は「溝もち」柱穴の可能性があり、柱穴とつながる浅い溝が調査区の外へ延びている。出土遺物は少なく、土師器杯と須恵器杯のいづれも小片が検出された。



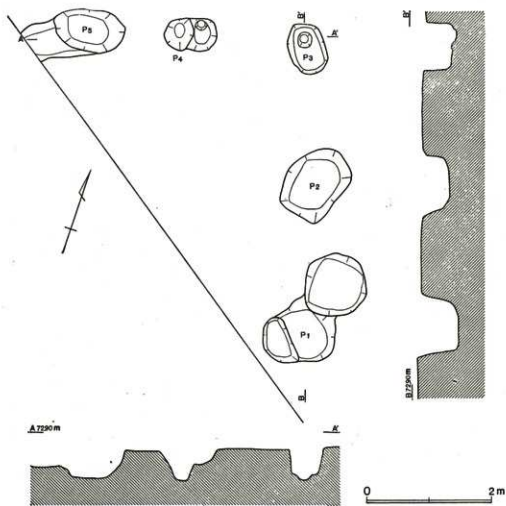
第80図 1号掘立柱建物跡



第81図 2号掘立柱建物跡 (1)



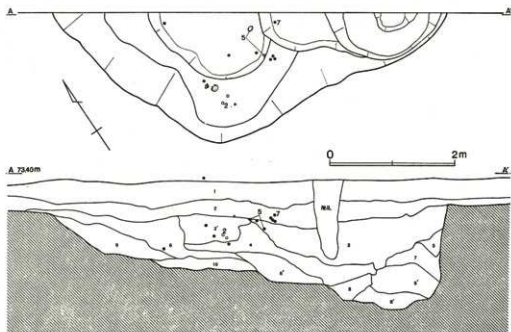
第82図 2号掘立柱建物跡



第83図 3号掘立柱建物跡

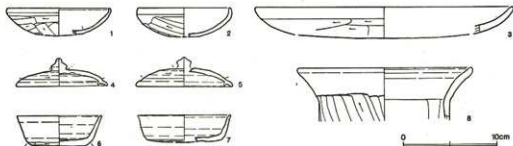
1号粘土探掘壕 (第84図)

4 H~5 G区にかけて位置するが、調査区域外に大半がかかるため、部分的な検出に留まった。残存部の全長7.4m、幅2.1mを測る。平面形態は不整円形を呈すものと考えられる。底面は凹凸が著しく不規則な形を呈し、底面に近い壁は、一部オーバーハングする箇所がある。土壌埋土は黒褐色土やローム、灰白色粘質土が混在しており、明らかに人為的な堆積状況を示す。



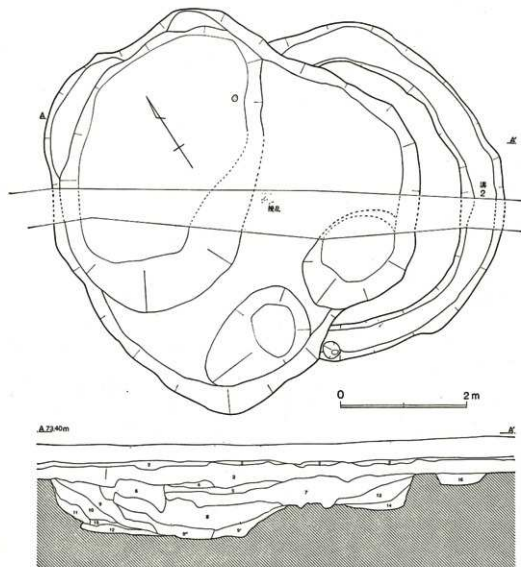
1. 表土。 2. 暗褐色土。 3. 暗褐色土 ロームブロック粒子やや少なめに含む。 3'. 暗褐色土 ロームブロックの混入やや少ない。
4. 暗褐色土 灰白色粘土ブロック(多量)、ロームブロック黒色土含む。 5. 明茶褐色土 ソフトローム。
6. 明茶褐色土 ソフトローム+ハードローム。 6'. 暗褐色土 微量の粘土粒子含む。
- 6''. 暗褐色土 少量の粘土ブロックと多量のロームブロックを含む。 7. 暗茶褐色土 ローム、黒褐色土含む
8. 黒褐色土とロームの混土层 ロームを主とする。 8'. 黒褐色土とロームの混土层 黒褐色土を主とする。
9. 暗茶褐色土 粘土、ローム、黒褐色土含む。 10. 灰白色粘土 黒褐色土少量含む

第84図 1号粘土探掘壕



第85図 1号粘土探掘壕出土遺物

この種の土壌は、将監塚・古井戸遺跡においても検出され、いづれも底面付近の深さに灰白色粘土層の堆積が認められることから、この白色粘土の採取を目的に掘削された土坑と理解される。



- | | | |
|----------|-----------|-----------------------|
| 1. 灰褐色土 | 9. 暗褐色土 | 9層基調にロームブロック粘土、黒褐色土含む |
| 2. 黒褐色土 | 9'. 暗褐色土 | 9層類似 |
| 3. 褐色土 | 10. 暗茶褐色土 | 黒褐色土しみ状に含む |
| 4. 暗褐色土 | 11. 茶褐色土 | ローム質土、黒褐色土混在 |
| 5. 明茶褐色土 | 12. 黒褐色土 | |
| 6. 暗茶褐色土 | 13. 黒褐色土 | |
| 7. 褐色土 | 14. 暗褐色土 | 灰白色粘質土粘土少量含む |
| 8. 茶褐色土 | 15. 明茶褐色土 | ローム質土 |
| 9. 暗褐色土 | 16. 暗褐色土 | |
| | | 多量のロームブロック粘土、粘土ブロックと |
| | | 黒褐色土含む、粘性強い |
| | | 少量のローム粒、黒褐色土含む |

第86図 2号粘土採取坑・2号溝跡

今井G

1号粘土探掘坑出土遺物 (第85図)

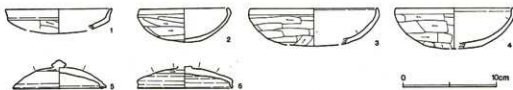
器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	1	(11.0)		(3.0)	ABC F	褐色 2	体部外面寛削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	覆土。口縁部 $1/30$
環	2	(9.8)		3.1	BCDE	橙褐色 2	体部外面寛削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	N.5。 $1/30$
皿	3	(27.5)		(3.3)	BC F	赤褐色 1	体部外面寛削り。口縁部横ナゲ、体部内面に及ぶ。	覆土。 $1/30$
須恵蓋	4	9.6		3.0	DE・黒色粒子	灰色 1	ロクロナゲ。天井部回転削り。	覆土。完存。接地面はほぼ同じ。
蓋	5	10.1		(2.0)	DE	青灰色 1	ロクロナゲ。天井部回転削り。	N.10, 12。 $1/20$ 接地面は外側。つまみ欠失。
環	6	(9.0)		3.2	BDE	灰色 2	底部外面手持ち削り。体部・口縁部ロクロナゲ。	覆土。 $1/30$
環	7	(9.9)	(8.0)	(3.0)	BDE	灰黒色 1	底部外面寛切りか。周辺手持ち削り。体部・口縁部ロクロナゲ。	N.21。 $1/30$
土師甕	8	(18.5)		(5.7)	BCDE・砂粒子	橙褐色	胴部外面寛削り、内面ナゲ。口縁部横ナゲ。	覆土。口縁部 $1/30$

2号粘土探掘坑 (第86図)

12D・13D区を中心に位置し、3号掘立柱建物跡及び3号探掘坑と近接する。調査区域内に全ておさまるが、中央部はガス管による攪乱を受けている。規模は南北6.15m、東西5.9m、確認面からの深さ1m(最深部)を測る。形態は不整形を呈するが、これは幾つかの土壌が重複して掘られた結果であると考えられる。底面及び壁面の形状も規格性がなく、凹凸が著しい。

覆土は(暗)褐色土に混じってロームブロックや灰白色粘土ブロックが含まれる。土層の堆積も人為的なもので、数回に及ぶ掘削の結果と考えられる。

出土遺物は量的には少ないが、覆土中より土師器坏・須恵器蓋や甕片の他、鞠羽片を検出した。



第87図 2号粘土探掘坑出土遺物

2号粘土探掘坑出土遺物 (第87図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	1	(11.4)		(2.2)	BC	褐色 2	体部外面寛削り、内面磨減。口縁部横ナゲ。	覆土。 $1/30$

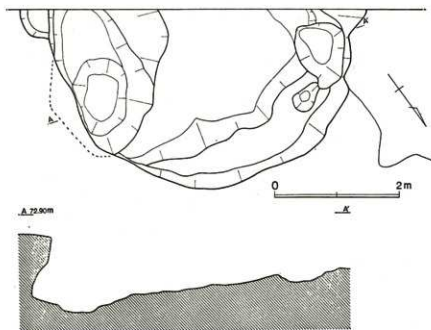
器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土部環	2	9.6		3.6	A B C D E	橙褐色 2	体部外面篋削り、内面磨減。口縁部横ナダ。	覆土。完存。
環	3	(13.7)		(3.9)	A B	褐色 2	体部外面篋削り、上位未調整。口縁部横ナダ、体部内面に及ぶ。ナダ丁穿。	覆土。1/10
環	4	(12.7)		4.4	A B C F	褐色 2	体部外面篋削り。口縁部横ナダ。	覆土。1/10
須志蓋	5	(10.0)		(2.2)	D E	黒灰色 2	ロクロナダ。天井部回転篋削り。	覆土。1/10 つまみ欠失。
蓋	6	(10.2)		(2.3)	D E	灰色 2	ロクロナダ。天井部回転篋削り。	覆土。1/10 つまみ欠失。

3号粘土探掘墳 (第88図)

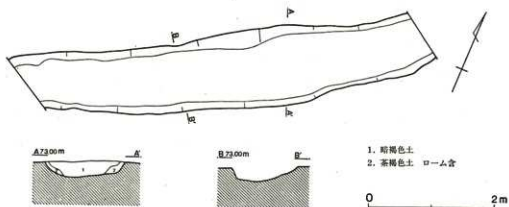
14D区を中心に位置し、全体のおよそ半分程が調査区内に検出された。4号住居跡と一部重複するが、粘土探掘墳の方が新しい。

検出された部分の最大径は5.7m、確認面からの深さは1.3m (最深部) を測り、平面形態は不整円形を呈するものと推定される。

1・2号探掘墳同様、底面は凹凸が激しく、西壁部の下端は壁が大きく抉られ、オーバーハングする状況が認められた。覆土はロームブロックや灰白色の粘土塊を含み、土層も数度の掘り返しを示す。出土遺物は微量の土師器坏小片だけである。



第88図 3号粘土探掘墳



第89図 1号溝跡

1号溝跡 (第89図)

2号住居跡と1号採掘壕の間を縫うように南西～北東方向にのびる。幅は0.9～1.3mで、約30cmの深さを有する。須恵器杯・蓋・甕の小片が検出されたが、溝の時期は不明確である。

2号溝跡 (第86図)

2号粘土採掘壕の東側にあり、採掘壕と重複するが、新旧関係はつかめなかった。ほぼ円形に回る溝跡の東半分が検出されたことになる。外径が5.5m、溝跡50～70cm、深さは20～25cmと浅い。

覆土は、暗褐色を呈するほぼ単一の土層で、土師器杯・甕類の小片が微量出土した。性格・時期共に明確でない。

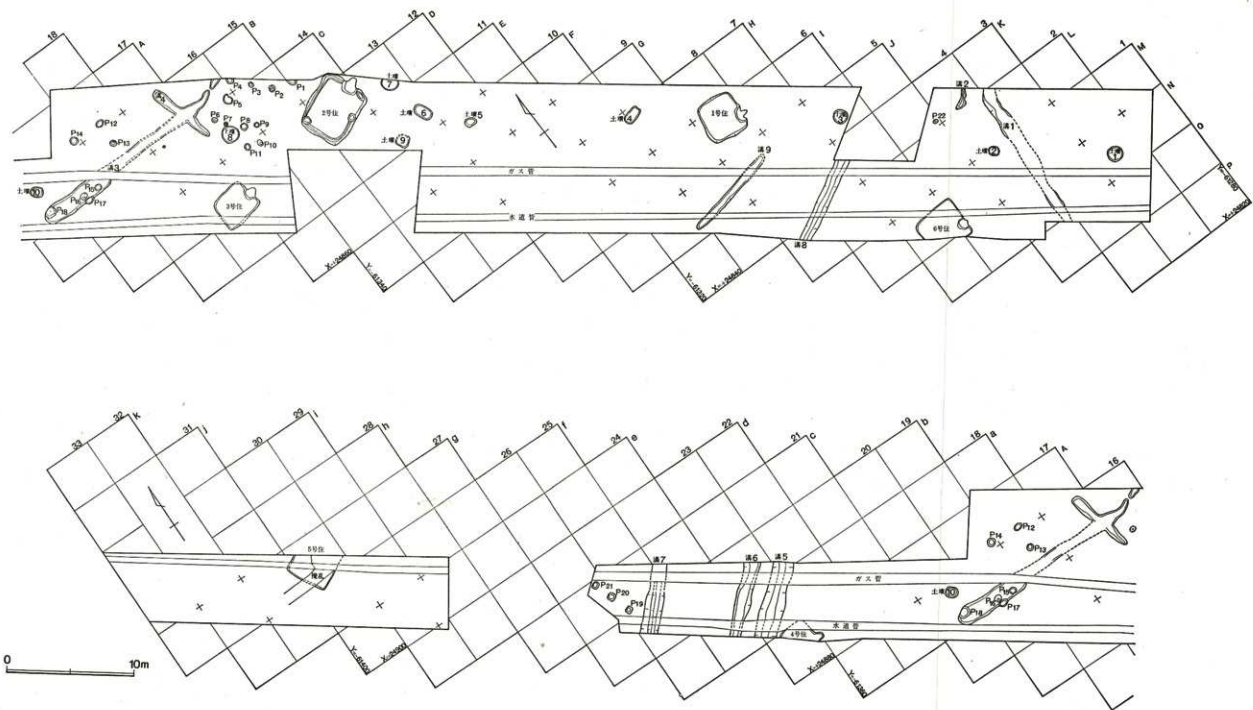
3. F地点の遺構と出土遺物

今井遺跡群F地点は本庄市共栄に所在し、G地点の東に隣接する。調査区は、南東から北西に直線的に向かう道路敷を対象とする。遺跡の標高は約73～73.5mを測り、表土下約30～60cmでローム面に達する。

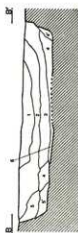
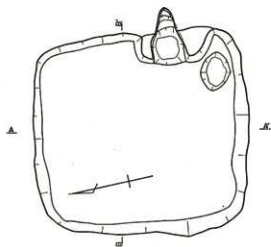
検出された遺構には、堅穴住居跡6軒、溝跡7条、土壇10基の他にビットがあるが、調査区内を縦走するガス管、水道管等の攪乱により、遺構の多くは寸断されている。

堅穴住居跡は真間～国分期に位置付けられ、調査区全体に散在する傾向にある。そのなかでも、1・2号住居跡は攪乱も受けず、住居の全体が検出された。1号住居跡では、北東コーナー付近に遺物が集中し、一度に投棄されたような状況がみられた。また、2号住居跡では、末期的なかえりをもつ須恵器蓋・杯と土師器杯・甕類が伴出し、良好な資料が得られた。

溝跡は攪乱により遺存状況は芳しくなく、時期も不明なものが多いが、3・4・7号溝からは、土師器や須恵器片が検出された。またビット19～21は、掘立建物跡柱穴の可能性がある。



第903图 今井遺跡群F地点全圖

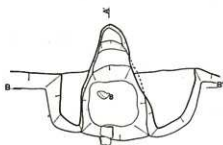


□.2780m



- | | |
|-----------|----------------------|
| 1. 暗褐色土 | 焼土(微量) |
| 2. 褐色土 | 焼土、炭化粒(微量) |
| 3. 黒褐色土 | 焼土粒、炭化粒(少)、ロームブロック含む |
| 4. 暗褐色土 | ローム粒(やや多)、焼土粒(少) |
| 4'. 暗褐色土 | 4層近似 |
| 5. 茶褐色土 | ローム質土、泥在 |
| 5'. 明茶褐色土 | 5層と類似 |
| 6. 明茶褐色土 | 黒褐色土混在、ロームブロック含む |

0 2m



□.2260m



- | | |
|------------|---------------|
| 1. 褐色土 | やや粘質 |
| 2. 暗黄褐色土 | 粘質土、焼土(多) |
| 2'. 黄褐色土 | 2層近似 |
| 2''. 暗黄褐色土 | 2層近似、焼土(少) |
| 3. 暗灰褐色土 | 炭化粒子、焼土(少量) |
| 4. 暗灰褐色土 | ロームブロック混在 |
| 5. 褐色土 | |
| 6. 黄褐色土 | ローム主体、焼土、粘土混在 |
| 7. 黄褐色土 | 焼土粒(微量) |

0 1m

第91図 1号住居跡・カマF

今井F

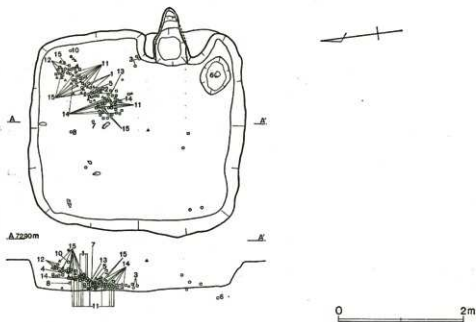
1号住居跡 (第91・92図)

8 I 区中心に位置し、住居跡全体が検出された。東西辺3.28m、南北辺3.5mのほぼ正方形を呈し、床面までの深さは北壁で50cmと深い。主軸方位は、E-8°-Sを示す。

床面はロームブロックが浮き出し、やや凹凸がみられ、あまり堅い箇所は認められない。

カマドは東壁の南寄りの位置に設けられ、壁外に40cm突出する。燃焼部は床面から10cmの深さで方形に掘り込まれている。煙道は北壁に沿って垂直に近い角度で立ち上がり、中位に一段テラス状の平坦面をもつ。またカマド右脇には深さ20cmの楕円形貯蔵穴が設置される。

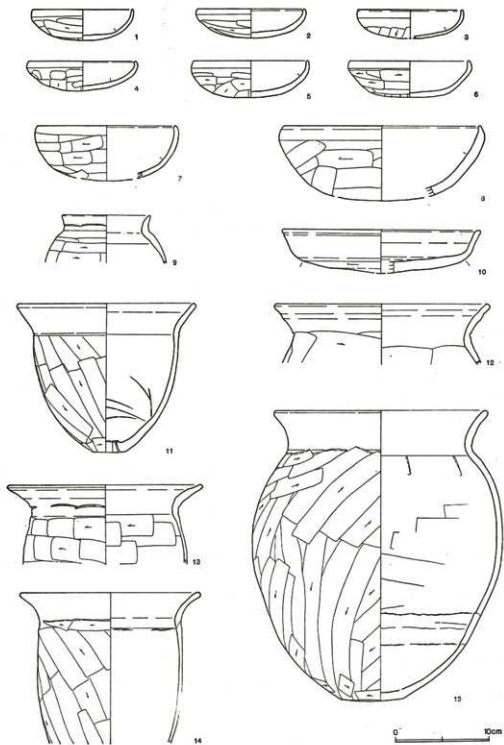
出土遺物は、土師器杯・甕・甕・壺、須恵器杯の各器種が揃っているが、それらの多くは北東コーナーから中央部にかけて、住居埋没過程で一括投棄されたような状況で出土した。



第92図 1号住居跡出土遺物分布図

1号住居跡出土遺物 (第93図)

器種	番号	大きさ (cm)		胎土	色調 焼成	手法の特報	出土位置・残存率	
		口径	底径					
土師器	1	10.7		3.3	BCF	褐色	体部外面荒削り、上位未調整。口縁部横ナゲ、体部内面に及ぶ。	N.37, 106, 108. ほぼ完。
杯	2	11.6		3.1	BCF	褐色	体部外面荒削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	N.114. ほぼ完。
杯	3	(11.2)		(3.1)	BCF	褐色	体部外面荒削り、上位ナゲ。口縁部横ナゲ、体部内面に及ぶ。	N.82, 84. 2/5。



第93图 1号住居跡出土遺物

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
坏	4	11.5		3.2	BCF	褐色 2	体部外面寛削り、上位未調整、指頭直残る。口縁部横ナゲ、体部内面に及ぶ。	N.129。完存。
坏	5	12.3		4.0	BC	橙褐色 2	体部外面寛削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	N.115。ほぼ完。
坏	6	(12.8)		3.9	ABCF	茶褐色 2	体部外面寛削り。口縁部横ナゲ。	貯穴。1/10
坏	7	(14.8)		(6.9)	CF	橙褐色 1	体部外面寛削り。口縁部横ナゲ。	N.92。1/10
鉢	8	(21.0)		(8.1)	BCDF	橙褐色 2	体部外面寛削り。口縁部横ナゲ、体部内面に及ぶ。	N.91。カマドN.3。1/10
小型壺	9	(11.4)		5.1	ABC	褐色 2	胴部外面寛削り、上位未調整。口縁部横ナゲ、胴部内面に及ぶ。	1区覆土。口縁部1/10
須恵坏	10	(21.0)	(16.6)	(4.2)	BDEF	灰色 2	胴部外面回転削り。	N.4。1/10
土師瓶	11	19.0	孔径 2.5	16.2	ABCDE	淡橙褐色 1	胴部寛削り、内面寛ナゲ。口縁部横ナゲ。底部削り後割減。穿孔部寛ナゲ。	N.28, 33, 58, 101, 102他。口縁部1/10。胴部1/10
壺	12	(22.6)		(6.5)	ABCF	橙褐色 1	胴部外面寛削り、内面寛ナゲ。口縁部横ナゲ。	N.1, 8, 23。口縁部1/10
壺	13	(20.6)		8.4	ABCDEF	橙褐色 1	胴部外面寛削り、内面寛ナゲ。口縁部横ナゲ。	N.116。口縁部1/10
壺	14	19.0		16.2	ACDE。砂粒 多し。	淡褐色 1	胴部外面寛削り後ナゲ、内面ナゲ。口縁部横ナゲ。	N.55, 63, 70, 101, 121他。口縁部、ほぼ完。胴部1/10
壺	15	22.4	6.7	31.1	ABCDE	橙褐色 1	底・胴部外面寛削り、内面寛ナゲ、接合部は指ナゲ。口縁部横ナゲ。	N.2, 14, 27, 29, 31, 104他。口縁部・底部完。胴部1/10

2号住居跡 (第94・95図)

14D区を中心に位置し、調査区内にほぼおさまる。5.02×4.04m、床面までの深さ60cmを測る深く掘り込まれた住居跡で、平面プランは長方形を呈する。主軸方位はN-68°-Eを示す。

ローム面を掘り込んだ床面は、ほぼ平坦ではあるが全体的に軟弱で、強く踏み固められた形跡はみられない。また床面下には、浅い土城状の落ち込みが数箇所検出された。

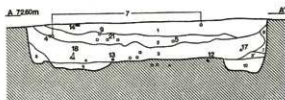
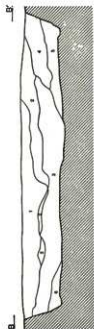
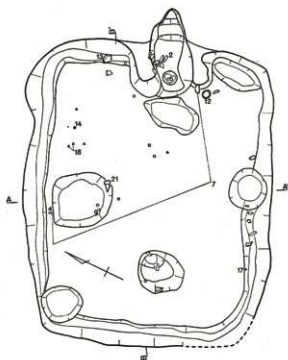
カマドは東壁のほぼ中央に設けられ、壁外への掘り込みは約50cmを測り、その軸線は、住居主軸に対してやや北に振れるようである。煙道は壁ラインに沿って垂直に近い角度で立ち上がる。

その他の施設に壁溝が検出されている。壁に沿って1/4周する。柱穴らしきビットは認められない。

出土遺物は、土師器坏・甕類、須恵器坏・蓋などがあり、12・13の須恵器蓋はカマドの左右の床面から検出された。

2号住居跡出土遺物 (第96図)

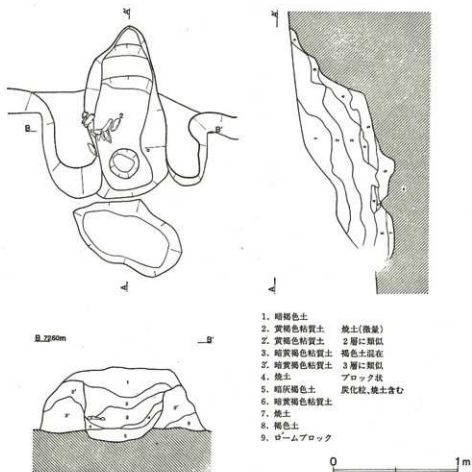
器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師坏	1	(11.6)		(3.5)	E (少) BCD F	褐色 1	体部外面寛削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	4区覆土。1/10
坏	2	10.5		3.4	ABCD	茶褐色 2	体部外面寛削り。口縁部横ナゲ。	カマドN.2。ほぼ完。



1. 灰茶褐色土 焼土粒子(少)
2. 黒褐色土 焼土粒子(やや多)
3. 暗褐色土 焼土粒、ロームブロック(少) やや粘質
3. 暗褐色土 焼土粒、ロームブロック(少)
4. 暗茶褐色土 ローム粒子、焼土粒(多)、粘質
5. 明茶褐色土 焼土(多)、粘質
6. 褐色土 ローム粒子含む
7. 黒褐色土 2層に近似
8. 茶褐色土 ローム粒子、ブロック含む
9. 暗黄褐色土 黄褐色粒土、焼土粒子、ローム粒子混在、粘質
10. 暗褐色土 黄褐色土、ローム粒子少量混在する、やや粘質

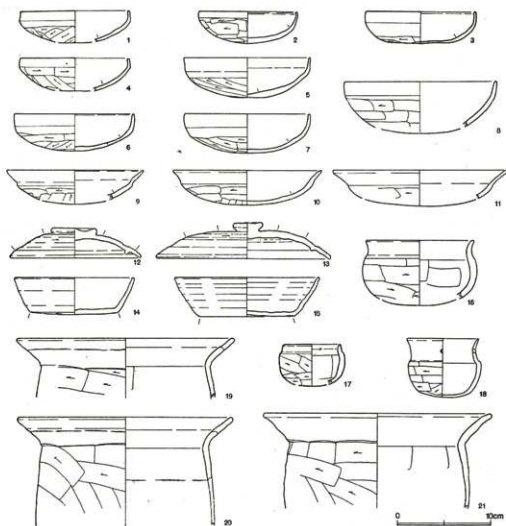
第94図 2号住居跡

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
坏	3	(11.7)		(3.4)	ABCEF	褐色 1	体部外面下半部削り、上半未調整。口縁部横ナゲ。	1区覆土。1/30
坏	4	(11.8)		(4.0)	C(少)BD	褐色 1	体部外面削り。口縁部横ナゲ。	N.20。1/30
坏	5	(13.5)		4.3	BCF	褐色 1	体部外面削り。口縁部横ナゲ。	N.3。1/30
坏	6	(12.8)		4.0	BCDF	橙褐色 1	体部外面削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	2区覆土。1/30



第95図 2号住居跡コマド

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
坏	7	13.3		4.25	BDEF	橙褐色 2	体部外面斡削り、上位未調整。口縁部 炭ナゲ、体部内面に及ぶ。	N. 2, 20。ほぼ完。
坏	8	(16.2)		(5.6)	BCF	褐色 1	体部外面斡削り、上位未調整。口縁部 炭ナゲ。	4区覆土。1/100
坏	9	(14.5)		(3.6)	CF	褐色 2	体部外面斡削り。口縁部炭ナゲ、体部 内面に及ぶ。	N. 19。1/100
坏	10	(15.8)		(3.7)	ABC	褐色 2	体部外面斡削り、上位未調整。口縁部 炭ナゲ。	4区覆土。1/100
坏	11	(16.8)		(4.0)	BCDEF	橙褐色 1	体部外面斡削り。口縁部炭ナゲ、体部 内面に及ぶ。	覆土。1/100
須恵蓋	12	13.8		3.2	ADE。砂粒多 し。	灰褐色 3	クロコナゲ。天井部回転斡削り。	N. 1。完存。



第96図 2号住居跡出土遺物

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
蓋	13	18.5		3.8	DE・砂粒	灰色 2	ロクロナデ。天井部回転寛削り。	N.9。1/10
坏	14	(12.6)	9.4	4.0	DE	灰色 2	底部外面回転削り。口縁部ロクロナデ。	N.11。1/10
坏	15	(15.3)	(10.0)	4.2	DE	明灰色 1	底部外面回転削り、周辺段を形成。 口縁部ロクロナデ。	4区覆土。底部1/10
土師 小型壺	16	(11.4)		(7.0)	BC	橙褐色 2	胴部外面寛削り、内面寛ナデ。口縁部横ナデ。	3区覆土。1/10
小型壺	17	(6.0)		(4.5)	BCDF	橙褐色 2	胴部外面寛削り、内面寛ナデ。口縁部横ナデ。	N.23。1/10

今井F

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出土位置・残存率
		口徑	底徑	器高				
小型壺	18	(7.4)		6.4	ABCDE	橙褐色 1	胴部外面寛削り、内面ナゲ。口縁部横ナゲ、内側より穿孔。	№14, 15。ほぼ完。
壺	19	(23.0)		6.5	ABCDEF	茶褐色 2	胴部外面寛削り、内面寛ナゲ。口縁部横ナゲ。	1区覆土。口縁部 ^{1/2} 。
壺	20	(22.8)		11.6	BCDEF	茶褐色 1	胴部外面寛削り、内面寛ナゲ。口縁部横ナゲ。	1区覆土。口縁部 ^{1/2} 。
壺	21	(24.1)	(10.2)		ABCDEF	茶褐色 2	胴部外面寛削り、内面寛ナゲ。口縁部横ナゲ。	№16。 ^{1/2} 。

3号住居跡 (第97図)

17D・17E区中心に位置する。調査区内に全体がおさまるものの、北東コーナー及び南西コーナー附近をガス管・水道管に破壊されており、遺存状態は悪い。主軸方位はN-83°-Eを示す。

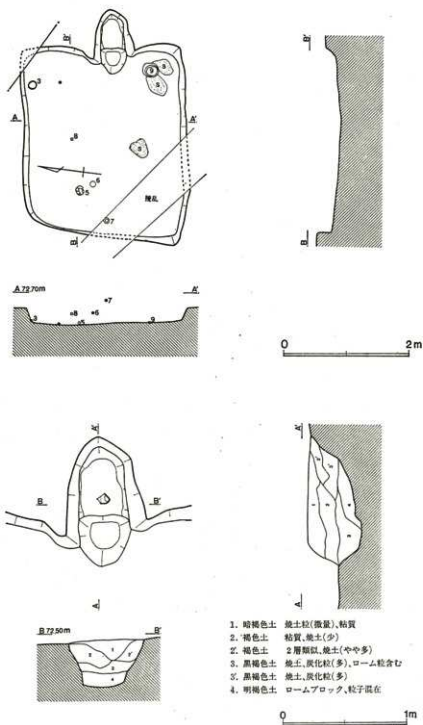
東西3.2m、南北2.7m、深さ20~25cmの規模をもち、平面形態は長方形を呈する。

床面はロームブロックが浮き出し、ややごつごつしている。全体的にみれば平坦といえるが、カマド前面は、僅かに落ち込む。またカマド前から住居中央部の床面は比較的堅いが、周辺部は軟弱であった。カマドは東壁の中央から少し南寄りの位置に構築される。所謂袖部は明瞭でなく、焚き口を除いた部分は壁外に突出する形態を示す。

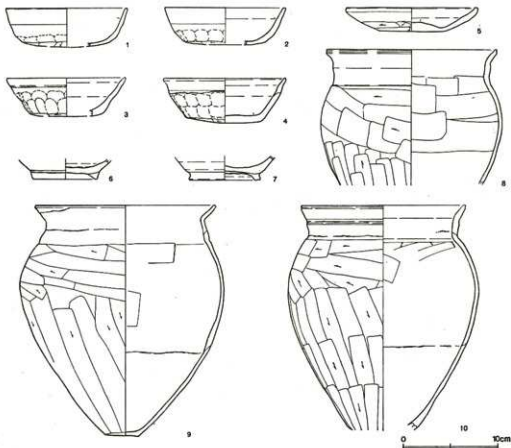
床面南東隅に2個、中央南壁寄りに1個、大きな石が置かれており9の壺は2個の石にもたせかけるように出土した。その他には、3の坏、及び5の皿もほぼ床面から検出された。

3号住居跡出土遺物 (第98図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎 土	色 調 焼 成	手 法 の 特 徴	出土位置・残存率
		口徑	底徑	器高				
土師环	1	12.9	9.0	4.2	ABCF	橙褐色 1	底部外面寛削り。体部外面未調整、指頭痕残る。口縁部横ナゲ。	貯穴。 ^{1/2} 。
环	2	(12.9)		(3.9)	ABCF	茶褐色 1	底部外面寛削り。体部外面未調整、指頭痕残る。口縁部横ナゲ。	覆土。 ^{1/2} 。
环	3	13.0	7.8	4.8	ABCDEF	橙褐色 2	底部外面寛削り。体部外面未調整、指頭痕残る。	№1。ほぼ完。
环	4	12.0	7.6	4.1	BC	褐色 3	底部外面寛削り、体部外面指ナゲ、上端未調整。口縁部横ナゲ。	覆土。 ^{2/3} 。
皿	5	14.0		3.5	ABCEF	茶褐色 2	底・体部下外面寛削り、上半未調整。口縁部横ナゲ。	№6。完存。
土師質高台坏	6		6.8	2.2	ABCDF	褐色 2	底部外面回転糸切り後高台貼り付け。体部口ナゲ。	№5。底部完。
須恵高台坏	7		7.6	3.1	ABCD	黒褐色 3	底部外面回転糸切り後高台貼り付け。体部口ナゲ。	№7。底部 ^{1/2} 。
土師壺	8	18.2		14.5	ABC F, 厳密。	褐色 2	胴部外面寛削り、内面寛ナゲ。口縁部横ナゲ。	№3。カマド内。 ^{2/3} 。
壺	9	19.6	3.6	24.7	ABCDE	茶褐色 1	底・胴部外面寛削り、内面寛ナゲ。口縁部横ナゲ。	№11。口縁部 ^{2/3} 。胴部 ^{1/2} 。底部完。
壺	10	(17.6)		24.2	ABCDE	茶褐色 1	胴部外面寛削り、内面木口状工具ナゲ。胴部外面木口状工具ナゲ後横ナゲ。	カマド内。覆土。口縁部 ^{2/3} 。胴部 ^{1/2} 。



第97図 3号住居跡・カマド



第98図 3号住居跡出土遺物

4号住居跡 (第99図)

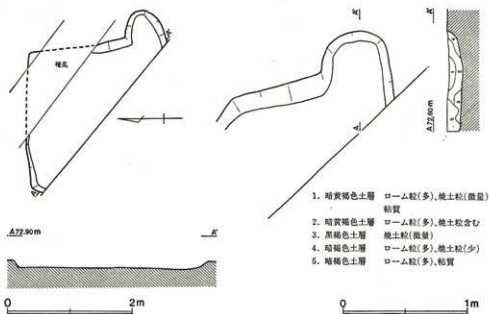
23A区に位置し、5号溝跡の南に近接して構築されている。住居跡全体のうち、約半分は調査区外にかかる。また、調査区内に位置する部分でも、北東コーナー周辺は水道管により攪乱され、遺存状態は極めて悪い。

したがって正確な規模等も不明な点が多いが、東西2.3m、南北2.24+ α mの方形プランを呈するものと推定される。床面までの深さは、北東コーナー付近で11cmと非常に浅い。主軸方位はN-88°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、堅く踏み固められている。

カマドは東壁に設置されるが、袖部は認められない。また、焚口部にも掘り込みはみられず、床面と同一レベルで続いている。

出土遺物は少なく、実測し得るものはないが、焼成の悪い須恵器高台杯と土師器杯の小片が検出された。3号住居跡と近接した時期のものであると推定される。



第99図 4号住居跡・カマド

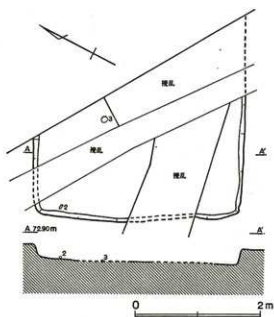
5号住居跡 (第100図)

30g区を中心に検出された。住居跡の東半分は調査区域外に延びる。調査区内にある西側部分についても、ガス管その他の擾乱により寸断され、全体の規模を窺うことはできない。

南北3.42m、東西2mが残存し、深さは、南壁部で26cmを測る。床面も概ね平坦であるが、やや軟かい。主軸方位を東西にとれば、 $N-65^{\circ}-E$ を示す。

カマドは東壁、もしくは北壁に設置されたと考えられるが、調査区内には存在しない。また壁溝、柱穴等の施設も確認されなかった。

出土遺物には、図示した坏3点の他に甕の小片が少量ある。特に2・3の坏はほぼ床面から検出された。



第100図 5号住居跡

今井F



第101図 5号住居跡出土遺物

5号住居跡出土遺物 (第101図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	1	(10.3)		2.9	BCDEF	橙褐色 1	体部外面寛削り。口縁部横ナゲ、体部内面に及ぶ。	覆土。2/10
環	2	(10.7)		3.2	BDE・砂粒	橙褐色 2	体部外面寛削り。口縁部横ナゲ、体部内面に及ぶ。	№1。2/10
環	3	10.2		3.3	ABCDEF	茶褐色 1	体部外面寛削り、上位未調整。口縁部横ナゲ、体部内面に及ぶ。	№2。4/10

6号住居跡 (第102図)

調査区東端に近い、6M区を中心にして位置する。南壁から西壁中央部にかけては、調査区の外にはずれる。またカマド北側は、水道管によって一部破壊されている。

規模は東西3.68m、南北3.38m、深さ20cm(北壁)を測り、方形の平面プランを呈する。

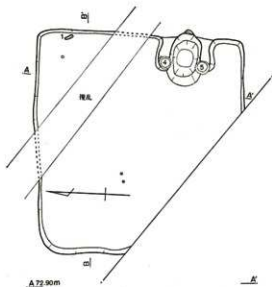
床面はほぼ平坦であるが、ロームブロックが浮き出し、軟弱な部分が多い。ただ、カマド前面の周囲のみ堅く踏み固められた形跡が確認された。主軸方位はN-89°-Eを指す。

カマドは東壁の南寄りに設けられるが、壁外への掘り込みは僅かで、殆どが住居内に位置する。またカマド袖部には、図示した4・5の甕が倒置状態で据え置かれていた。これはカマド袖部の補強材として用いられたものと考えられる。

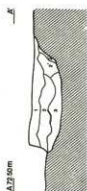
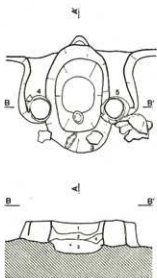
図示遺物では、1の環が床直で、3がカマド焚口部から検出された。

6号住居跡出土遺物 (第103図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	1	10.1		3.0	ABCDEF	茶褐色 1	体部外面寛削り。口縁部横ナゲ。	№2。4/10
環	2	9.8		3.2	BDEF	茶褐色 1	体部外面寛削り、上位未調整。口縁部横ナゲ、体部内面に及ぶ。	覆土。ほぼ完。
環	3	13.8		7.4	ABEF	茶褐色 1	体部外面寛削り。口縁部横ナゲ、体部内面に及ぶ。	カマド№3。4/10
甕	4	(20.0)		(16.8)	ABCDEF	茶褐色 1	胴部外面寛削り、内面寛ナゲ丁寧。口縁部横ナゲ。	カマド左袖。口縁部2/10。胴部2/10
甕	5	(22.3)		(24.2)	ABCDEF	茶褐色 2	胴部外面粗い寛削り一部横ナゲ、内面寛ナゲ及びナゲ。口縁部横ナゲ。	カマド右袖。口縁部完。胴部2/10



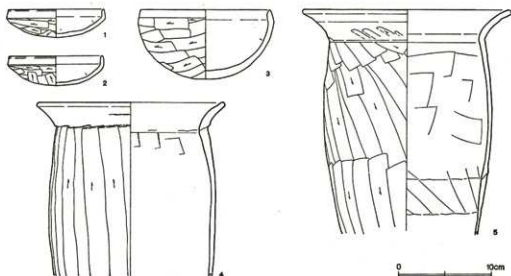
0 2m



1. 暗黄褐色土
粘質土、ローム粒(少)
2. 黄褐色土
粘質土、焼土粒(微量)
2. 黄褐色土
2層類似、焼土粒(やや多)
3. 暗褐色土
灰化粒、焼土粒(少)
3. 暗褐色土
3層類似、粘土混在
4. 洪赤褐色焼土

0 1m

第102図 6号住居跡・カマド



第103図 6号住居跡出土遺物

1～9号溝跡 (第104・105図)

1号溝跡は調査区東端部にあり、南北に調査区を横断するが、掘り込みが浅く、途中で切れる部分がある。2号溝跡も近似した覆土をもつが、共に出土遺物はなく、時期は不詳である。

3号溝跡は、3号住居跡の北6mの位置を東西に走り、4号溝跡と直交する。周辺はゴミ穴等の攪乱が多く、不明な点が多い。3号溝跡から土師器杯・甕細片が少量出土し、4号溝跡より須恵器甕の口縁部片が検出された。

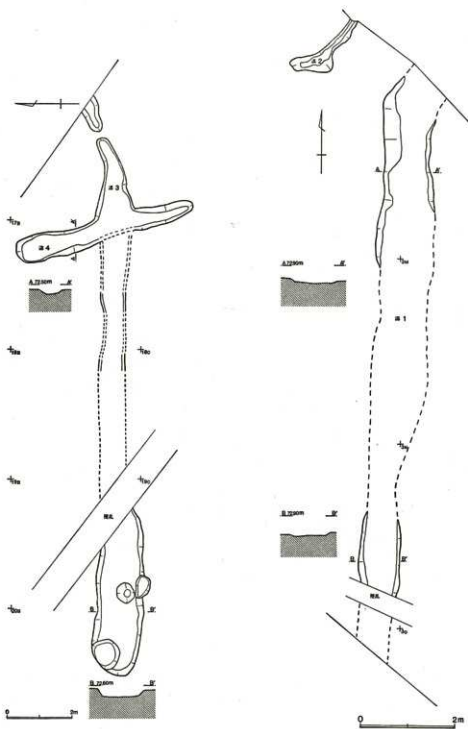
5・6号溝跡は、4号住居跡北側を平行して、南西から北東にぬける。規模は5号溝跡がやや大きく、上幅1.9m、深さ75cm、6号溝跡の上幅1.2m、深さ25～30cmを測る。両溝跡共に出土遺物は全くなく、時期は明らかにできない。

7号溝跡は、6号溝跡の西側に6m程隔たり、5・6号溝跡とほぼ平行して南西から北東方向にはしる。調査区が狭いうえ、ガス管による攪乱もあるため調査できた部分は少ないが、上幅1.4m、底面幅40cm、深さ35～40cmを測る。断面の形状は逆梯形を呈し、北側にテラスをもつ。

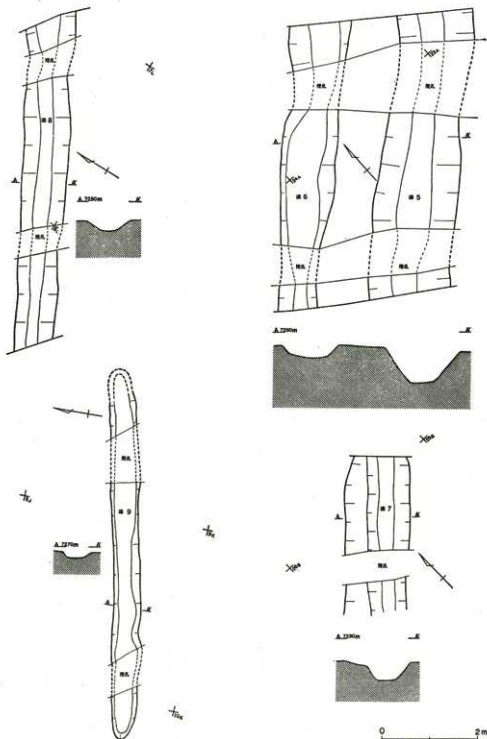
出土遺物は少ないが、底部に回転糸切り痕をそのまま残した焼成の悪い須恵器杯と土師器杯・甕の破片など国分期の土器が覆土より出土した。

8号溝跡は、1・6号の両住居跡のほぼ真中を南西から北東にはしる。上幅約1m、底面幅30cm前後を測り、深さは約20cmと浅い。出土遺物は全くなかった。

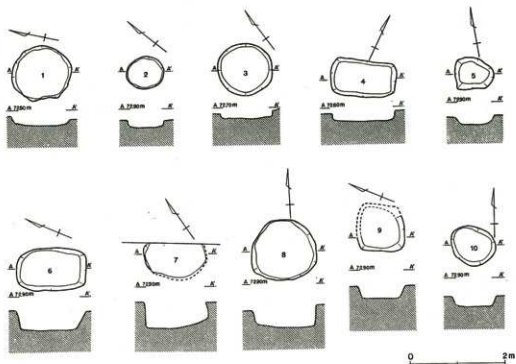
9号溝跡は1号住居跡の南2.5mにあり、東西方向に延びる。上幅55～60cm、深さ5～12cmと浅く、約8mの長さで検出された。出土遺物は全くない。



第104図 1~4号溝跡



第105圖 5～9号溝跡



第106図 1～10号土坑

1～10号土坑 (第106図)

F地点では、10基の土坑が検出された。5～7・9号土坑が比較的近接して位置するが、全体的には分布状態は疎らで、全域に散在している。形態は、円形プランを呈し、浅いたらい状の底面をもつ例（1～3・5・9・10号土坑）と、円形プランで比較的深く、壁は直立もしくはオーバーハングするもの（7・8号）、隅丸長方形のもの（4・6号）の3タイプが識別できる。

このうち、1・3～8号土坑から遺物が検出された。出土遺物は細片が多いが、全て土師器または須恵器で、周囲で検出された住居跡群に伴うものであろう。

第2表 今井F地点土坑計測表

番号	長軸×短軸×深さ	長軸方位	番号	長軸×短軸×深さ	長軸方位
1	126×112×21	N-30°-W	6	148×92×44	N-17°-W
2	78×66×20	E-41°-S	7	128×(78)×57	
3	116×112×16.5		8	138×128×47.5	
4	140×78×26.5	N-75°-E	9	102×98×28.5	N-25°-W
5	84×64×19.5	N-82°-E	10	98×78×23	E-45°-S

4. E地点の遺構と出土遺物

今井遺跡群E地点は、本庄市大字今井に所在し、F地点とD地点の間に位置する。標高は72.5～73mを測り、表土からローム面まで40～70cmの深さをもつ。

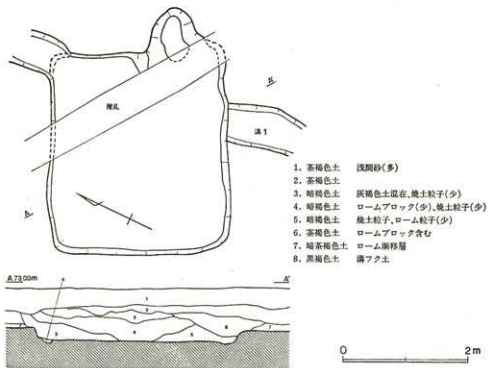
検出された遺構は竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、溝1条、土壇1基、ピット20本である。調査区東寄りに掘立柱建物跡と土壇、ピット群が集中し、西側に住居跡と溝跡が分布するが、主な遺構はガス管・水道管の擾乱を受けている。

竪穴住居跡は1号溝跡と重複し、溝跡の方が新しい。また1号溝跡は、ローム面への掘り込みが浅いため1号住居跡の北側で途切れてしまう。

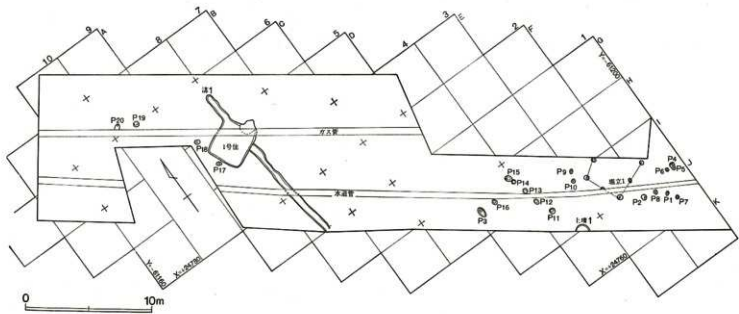
掘立柱建物跡としたものはピット群の中にあるが、角度が開き気味で確定するには問題があるかもしれない。

1号住居跡 (第107・109図)

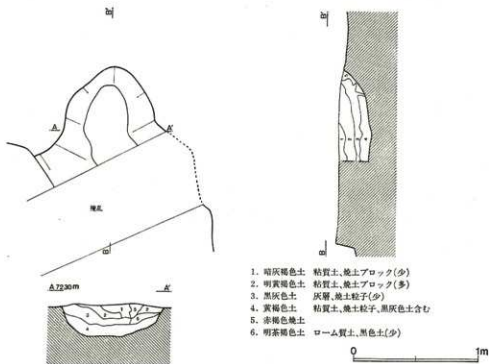
調査区西寄りの7D・8D区を中心に位置し、調査区内に全ておさまるが、カマドの一部から北壁にかけて、ガス管による擾乱を受けている。



第107図 1号住居跡



第108图 今井遺跡群E地点全圖



第109図 1号住居跡カマド

規模は東西3.26m、南北2.98mの方形プランを呈し、底面までの深さは北壁部で20~25cmを測る。主軸方位はN-63°-Eを示す。

床面の状態はやや凹凸が顕著で、堅さはカマド前面が最も堅く、壁際周辺が軟かい傾向にある。

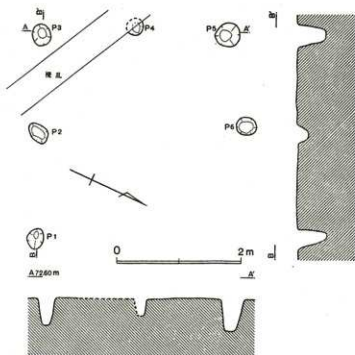
カマドは東壁の南側に寄った位置に設けられており、壁外に75cm掘り込まれる。底面は舟底状を呈し、床面より10cm掘り下げられていた。出土遺物には土師器と須恵器の破片が少量あるが、実測し得るものはない。国分期の所産と考えられる。

1号掘立柱建物跡(第110図)

調査区東端部にまとまって存在する、20個余りの小ピット群のなかから抽出した。2I区中心に位置するが、調査区が狭いため全体の規模は明らかでない。

東西2間、南北2間が検出され、東側及び南側柱列はほぼ直角に並ぶものの、北側柱穴のP₆が外側に開き気味になる。

P₁~P₃間とP₃・P₆間の各柱間距離は、1.7m、P₃~P₅間のそれは1.55m前後となる。各柱穴の規模は径30~40cmと小型で、円形プランを呈する。深さはP₁・P₃・P₅が45~50cmと比較的深く、P₂・P₄・P₆が20~30cmを測り、浅い。隅柱穴が深いものと考え、建物規模は2×2間の小規模なものとなろう。出土遺物はない。



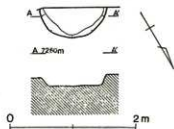
第110図 1号掘立柱建物跡

1号土壇 (第111図)

3 I から 3 J 区にかけて検出された。調査区域外にかかるため、完掘できていない。

径110cm、深さ15~20cmを測り、平面プランは円形を呈するものと推定される。断面形はたらい状を呈し、底面は平坦である。

遺物は検出されなかった。

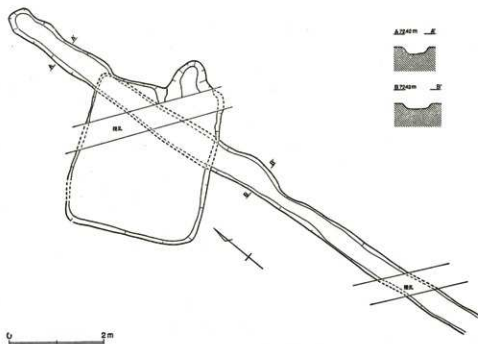


第111図 1号土壇

1号溝跡 (第112図)

調査区西寄りの位置に検出され、南北方向に延びる。1号住居跡と重複するが、土層観察により住居跡よりも新しいことが確認された。確認面の幅は50~60cm、深さは15cm以下である。ルーム面への掘り込みは非常に浅く、住居跡の北側で途切れてしまう。

出土遺物は全くなく、時期は平安時代以降と考えられる。



第112図 1号溝跡

5. D地点の遺構と出土遺物

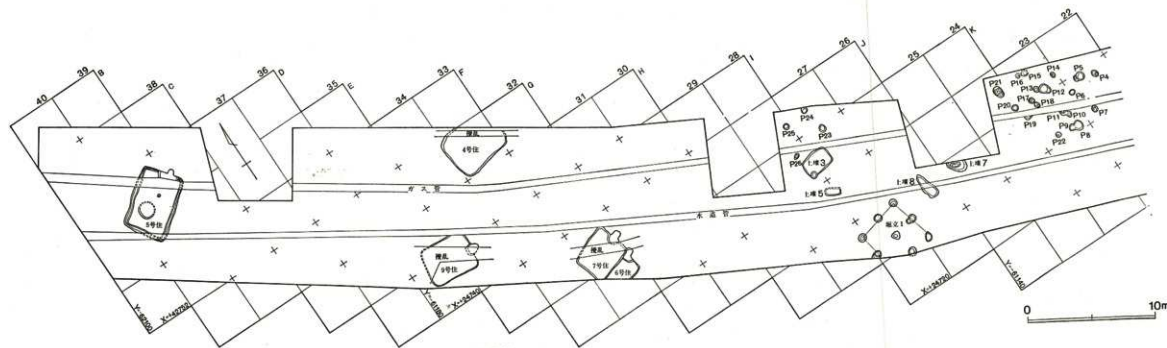
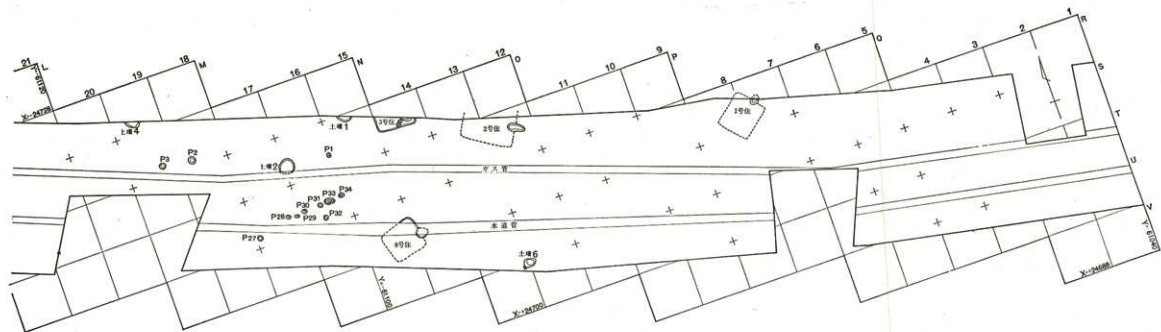
D地点は本庄市大字今井地内に所在し、調査区両側には西今井の集落が立ち並ぶ。今井遺跡群のなかでも最も長い調査区で、標高は72～73m前後を測る。

調査により検出された遺構は、竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡1棟、土壇8基とピット群がある。

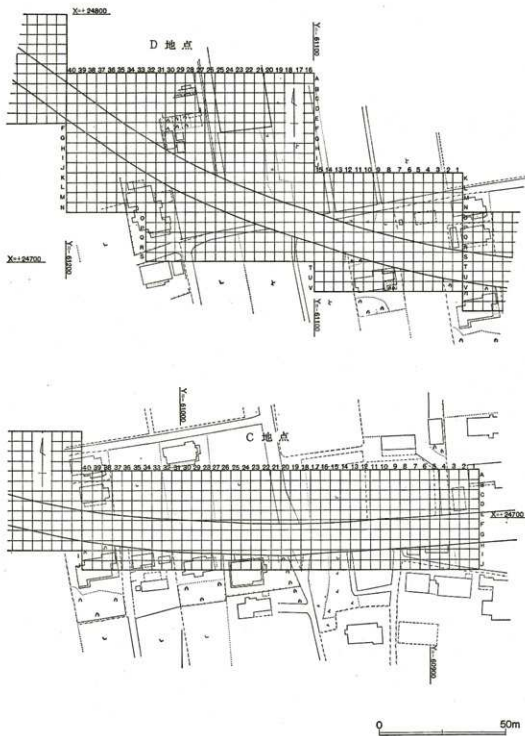
竪穴住居跡は、6号住居跡と7号住居跡が重複するが、他は各々単独に営まれている。また1・2号住居跡はルーム面への掘り込みが殆どみられず、カマドのみの検出にとどまった。全体的にガス管・水道管を始めとする擾乱が多く、各遺構の遺存状態は良くなかった。

調査区中央付近で検出された掘立柱建物跡は、所謂総柱建物跡と思われ、調査区内で2×2間分が確認できた。30m程西に離れた4号住居跡からは、灰釉段皿、コの字状口縁壺に伴って鉄製落とし鍔が検出されている。総柱の建物跡を倉と考えれば、両者の関連性が問題となろう。

住居跡からの土器出土量は比較的少なく、すべて奈良～平安時代(8世紀～10世紀初頭頃)に位置づけられるものである。その他の遺物として、2号住居跡の床面より石製紡錘車が、7号住居跡と8号ピットより墨書された土器(片)が各1点ずつ出土している。



第113圖 今井遺跡群D地点全圖



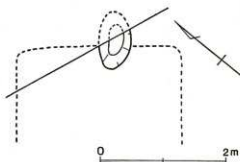
第114図 今井遺跡群C・D地点グリッド配置図

今井D

1号住居跡(第115図)

調査区東端に近い7Q区中心に位置する。区域外に半ばかかる箇所に焼土の堆積が検出されたため精査したところ、カマド掘り込みと判明した。床面は全く残存せず、規模等の詳細は不明とせざるを得ない。

調査区北壁の断面を視察したところ、ルーム面への掘り込みは3~5cmと非常に浅い。出土遺物はなく、時期不明。



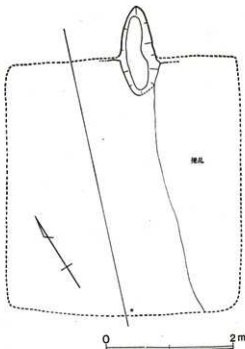
第115図 1号住居跡

2号住居跡(第116図)

12P区を中心に位置し、西側に3号住居跡、南側に8号住居跡が近接して営まれている。この住居跡も1号住居跡同様遺存状態が悪く、カマド掘り方と床面の一部がかりうじて残存するのみで、その大半は失われていた。ルーム面を僅かに掘り下げて床面としており、残存状況から東西長4.3m前後と推定されるが、南北長については不明とせざるを得ない。

カマド掘り方は長さ1.5m、幅0.6mの長楕円形を呈し、深さは約10cmを測る。

出土遺物は少ないが、石製紡錘車が床面より検出された。その他にコの字状口縁甕と須恵器杯の口縁部片が出土している。



第116図 2号住居跡

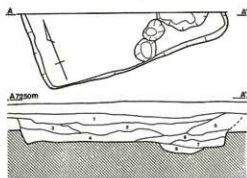
3号住居跡(第117図)

14・O区に位置する。調査区外にかかるため、南壁部周辺のみ検出された。

全体の規模は不明だが、東西辺3.16m、南北1.35mを越える住居跡で、方形プランを呈するものと推定される。確認面から床面までの深さは20~25cmを測る。主軸が南壁に沿うと仮定すれば、主軸方位はE-2°-Sを指す。

床面はやや起伏があり、中央付近が高く壁周辺に向かって下がる状況が認められる。

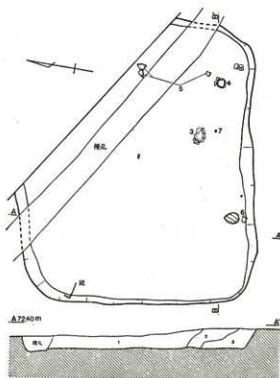
また、土塊状の落ち込みとピットが2本検出され、前者は住居に伴うものと考えられるが、ピットについては伴うか否かは不明である。出土遺物は、図示した塊(126図-2)の他に、9世紀代に位置づけられる土師器杯・甕片が少量検出されている。



1. 暗褐色土 ローム粒子(多),炭化物粒子(少),きめ粗い
2. 暗茶褐色土 ローム粒子(多)
3. 茶褐色土 2と類似,ローム粒(多)
4. 暗灰褐色土 ローム粒子(多),粘性あり
5. 黒褐色土 ローム粒子(多),きめ細かくしまり強い
6. 暗茶褐色土 ローム粒子(多),焼土粒子(微量)
7. 暗茶褐色土 ローム粒子(少),焼土粒子(多),炭化粒子(少)
8. 茶褐色土 ロームを主体,焼土粒子(少)

0 2m

第117図 3号住居跡



1. 暗褐色土 ローム粒(多),炭化粒(少)
2. 暗褐色土 ローム粒,やや粘質
3. 暗褐色土 ローム粒,ブロック(多)粘質

0 2m

第118図 4号住居跡

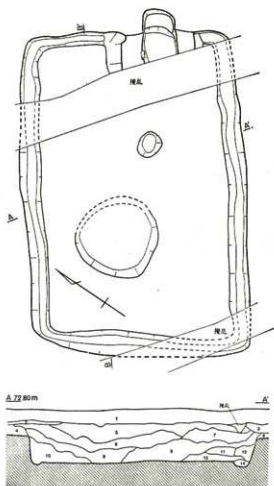
今井D

4号住居跡 (第118図)

調査区西端寄りの33G区を中心にした位置にあり、北東コーナー部周辺は調査区域外にかかる。また、調査区に沿った擾乱により一部破壊されている。規模は4.68m×3.9m、水糸レベルからの深さは約40cmを測り、長方形の平面プランをとるものと推定される。

カマドは調査区内からは確認されていないが、東壁と調査区ラインの接する位置に若干の粘質土がみられることから、東壁中央部付近に設置されたものと考えられる。

出土遺物は図示したもの以外には土器器坏と須恵器坏・高台付坏の細片がある。第126図7の灰釉段皿は、床面直上から出土した。また住居西側の壁際から、床面より若干浮いた状態で鉄製落とし鏡(第271図1)が出土した。北坂遺跡で検出例はあるが、類例の少ないものである。



- | | | | | |
|----------|---------|-----------|-----------|---------|
| 1. 茶褐色土 | 火山灰(多) | 8. 暗茶褐色土 | ローム粒(多) | |
| 2. 茶褐色土 | 火山灰(少) | | 黒褐色土混在 | |
| 3. 暗茶褐色土 | 火山灰(多) | 9. 暗黄褐色土 | ローム粒、 | |
| 4. 明茶褐色土 | ローム漸移層 | | ブロック(多) | |
| 5. 暗茶褐色土 | ローム粒(多) | 10. 暗黄褐色土 | ローム粒(多) | |
| | | 黒褐色土混在 | 11. 暗黄褐色土 | 10層類似 |
| 6. 暗褐色土 | | ローム粒(多) | 12. 暗黄褐色土 | ローム粒、 |
| 7. 褐色土 | | ローム粒、 | | ブロック(多) |
| | | ブロック(多) | 13. 褐色土 | ローム粒(少) |
| | | | 14. 暗褐色土 | |

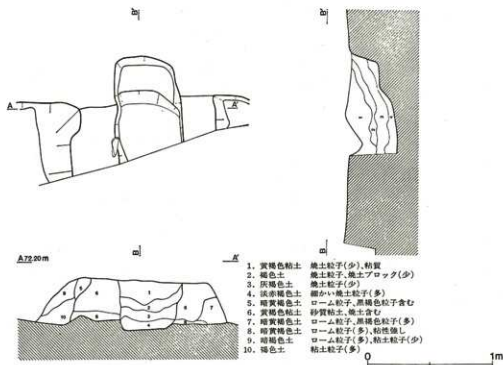
0 2m

第119図 5号住居跡

5号住居跡(第119・120図)

39C・D区中心に位置し、ガス管・水道管による擾乱を受けている。5.3×3.7m、深さ40cmの規模をもつ長方形プランの住居跡である。壁は垂直に立ちあがり、壁溝が全周する。床面は、概ね堅く踏み固められ、中央より西に寄った位置には、円形を呈する床下土壌が設置されている。直径1.36m、深さ40cmの大きさで、ロームブロック混じりの褐色土で埋められていた。また住居覆土には、ロームブロックが多く含まれていた。主軸方位はN-57°-Eを示す。

カマドは東壁の南寄りに設けられ、壁外に40cm張り出す。焚口部分は擾乱のため残存しない。出土遺物は少なく、図示した皿(126図9)の他には土器器坏・皿・甕の細片がある。



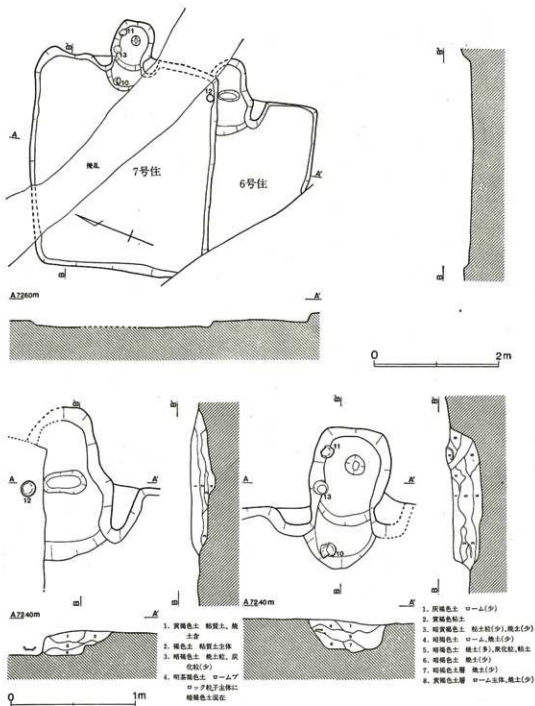
第120図 5号住居跡カマド

6号住居跡(第121図)

32K区に位置し、西壁から南壁にかかる部分は調査区外にはずれる。また7号住居跡と重複し、カマドから北の部分は切られている。このため規模等の詳細は不明であるが、南北1.6m以上、東西辺は2.8m前後を測る方形プランの住居跡と推定される。主軸方位はN-75°-Eを示す。

壁高は10~14cmと浅い。床面は壁周辺がやや低く、堅く踏み固めた様子は認められない。カマドは東壁に設けられ、壁外に65cm掘り込まれている。また燃焼部中央に浅いピットが存在する。

出土遺物は少なく、土器器坏・コの字状口縁甕、須恵器高台付坏の細片が検出された。



第121図 6・7号住居跡、カマド

7号住居跡(第121図)

32J区中心に位置し、6号住居跡の北側に重複する。切り合い関係は7号住居跡が新しい。また住居内を斜めに抜ける攪乱により、床面は寸断されている。規模は3.48×3.03m、深さ10cmを測り、長方形の平面プランを呈する。主軸方位はN-70°-Eを示す。

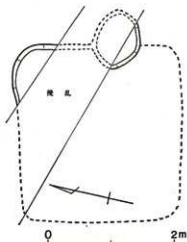
床面は比較的凹凸が少なく、中央部付近がやや堅いのみで、他は概して軟かい状況であった。

カマドは東壁の中央部に設けられ、焼成部の大部分は壁外に突出する。また燃焼部底面には、支脚据え付け痕と思われる小ピットが穿たれていた。袖部は貧弱で、あまり明瞭でなかった。

出土遺物は図示したもの他、灰釉瓶、須恵器杯や土師器コの字状口縁甕の細片がある。

8号住居跡(第122図)

3号住居跡の南側約7mの15Q区中心に位置する。住居の南半分は削平されていて残存しない。床面は北東コーナー周辺が僅かに確認されたにとどまり、カマドも住居内を通る水道管により攪乱を受け、その大部分は破壊されていた。このため規模等の詳細は不明であるが、北東コーナー部の壁高は10cm、僅かに残されたカマドの掘り込みは5cmの深さであった。出土遺物は、コの字甕と杯の細片が数片検出されただけである。



第122図 8号住居跡

9号住居跡(第123図)

34H・I区から35H・I区にかけて位置する。

カマドから両壁にぬける攪乱と、北東コーナーを

通る水道管により住居は寸断され、遺存状態は悪い。規模は3.92×3.18mの東西に長い長方形プランを呈し、床面までの深さは南壁で20cmを測る。主軸方位はE-6°-Sを示す。

床面中央部は攪乱により破壊されている。残存部は比較的平坦で、南壁中央寄りの箇所がやや堅い。カマドも攪乱を受けているが、それが浅いために下面は破壊を免れた。現状では壁外に40cm張り出し、燃焼部先端が10cm落ち込む。その他、南西コーナー部に貯蔵穴様のピットが発見された。出土遺物には土師器甕の破片が多く、土師器杯、須恵器杯、高台付杯と磁石2点が出土した。

1号掘立柱建物跡(第124図)

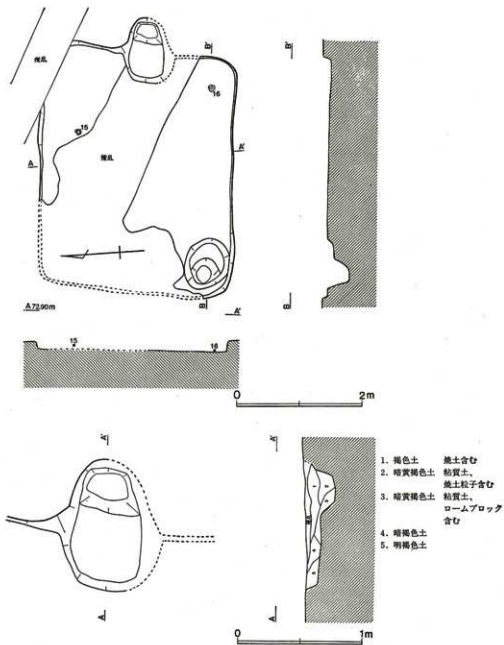
27M区を中心に位置する。調査区南縁部にあるために更に広がる可能性もあるが、現状では2×2間の総柱の倉庫跡と考えておく。P₆に相当する南西隅柱は調査区域外になり未検出である。またP₄は攪乱の下より検出された。

柱穴規模は直径60~80cmの円形プランを呈し、深さはP₂が最も浅く20cm、最も深いP₅が50cmで、他は30cm前後を測る。各柱列は比較的揃い、柱間距離は1.9~2.0mである。建物の軸を東西

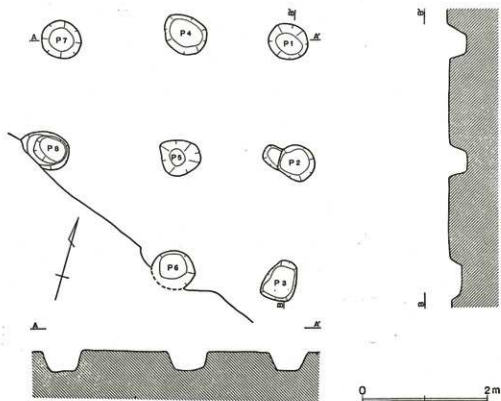
今井D

にとれば、主軸方位はN-78°-Eを示す。

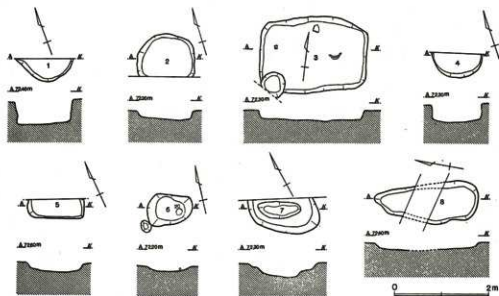
遺物はP₁・P₇・P₈より土師器細片が出土したが、図示し得るものはない。



第123図 9号住居跡・カマド



第124图 1号掘立柱建物跡



第125图 1~8号土坑

今井D

1～8号土壌 (第125図)

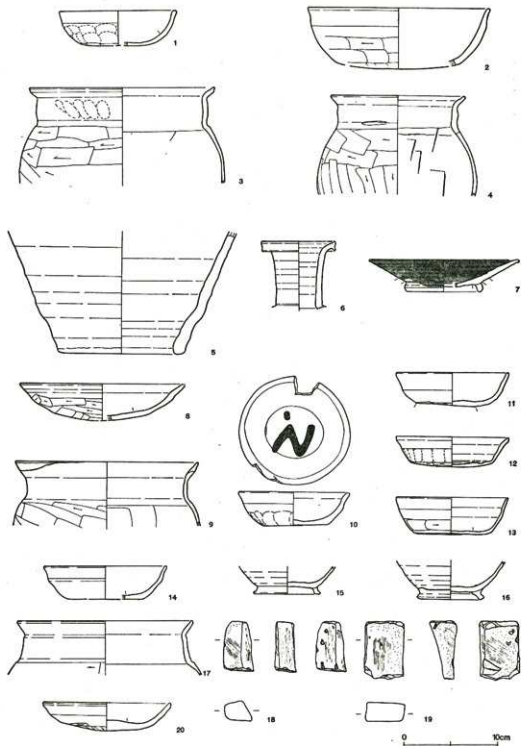
土壌は平面形により、円形(2・4)、方形(1・3・5)と不定形(6～8)のものに大別される。遺物は2～4号と6号土壌から出土した。2号土壌からはコの字台付甕、3号土壌から須恵器大甕口縁部と蓋、4号土壌から土師器甕細片、6号土壌からは126図20の皿が出土した。

第3表 今井D地点土壌計測表

番号	長軸×短軸×深さ	長軸方位	番号	長軸×短軸×深さ	長軸方位
1	230×(50)×31.5	N-80°-E	5	120×(42)×18.5	N-115°-E
2	220×98×18.5		6	96×62×12	
3	230×160×33.5		7	160×(66)×32.5	N-11°-W
4	110×(52)×19.5		8	224×80×15.5	

2～5・7～9号住居跡、6号土壌出土遺物 (第126図)

器種	番号	大きさ(cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	1	12.2	8.0	3.6	BCF	赤褐色 2	底部外面寛削り。体部外面推頭によるナゲ。口縁部横ナゲ。	2号住居土。1/10。
	2	(19.5)	(13.4)	(6.5)	BCF	褐色 2	底部外面寛削り。体部外面軽い寛削り。上位未調整。口縁部横ナゲ。	3号住居土。1/10。
甕	3	19.8		(10.1)	ABCDE	赤褐色 1	口縁部横ナゲ後、胴部外面寛削り、内面寛ナゲ。	4号住居N.9。胴部1/10。口縁部完。
小型甕	4	14.4		(10.6)	ABCDE	赤褐色 1	口縁部横ナゲ後、胴部外面寛削り、内面寛ナゲ。	4号住居N.5。胴部1/10。口縁部完存。
須恵器	5		13.6	(13.2)	AED	赤褐色 2	ロクロナゲ。	4号住居N.4・17。1/10。
長頸甕	6	6.0		(7.3)	DE	黒灰色 2	ロクロナゲ。	4号住居N.11。口縁部のみ。
灰釉段皿	7	15.9	7.7	3.3	黒色粒子、きめ 粗かく緻密。	淡緑色 1	ロクロナゲ。底部・体部外面下位回転削り後、高台部貼付け。	4号住居N.23。床直。1/10。内面に輪刷毛掛け。
土師甕	8	(19.5)		(6.8)	ABCF	暗褐色 2	胴部外面寛削り、内面寛ナゲ。口縁部横ナゲ。	8号住居土。口縁部1/10。
環	9	(16.6)		4.0	ABDEF	橙褐色 1	体部外面寛削り、上位未調整。口縁部横ナゲ、内部内面に及ぶ。	5号住居土。2/10。
環	10	11.6	6.9	3.6	ABCF	橙褐色 1	底部外面寛削り。体部外面指ナゲ。口縁部横ナゲ。	7号住居カマF N.1。ほぼ完。
環	11	11.9	6.3	3.7	ABCDE F	赤褐色 1	底部外面寛削り。体部外面未調整。口縁部横ナゲ。	7号住居カマT N.2。2/10。
環	12	12.1	8.9	3.2	BCF	褐色 2	底部外面寛削り。体部推頭圧痕。口縁部横ナゲ。	7号住居N.1。完存。
環	13	12.0	4.0	3.9	BCF	赤褐色 1	底部・体部外面寛削り、体部上位ナゲ。口縁部横ナゲ。	7号住居カマF N.3。2/10。
環	14	(13.0)	(8.0)	3.6	BDF	赤褐色 1	底部外面寛削り。体部外面未調整。口縁部横ナゲ。	9号住居土。1/10。
須恵器高台甕	15		6.8	(3.0)	DE	明灰色 2	底部回転糸切り後高台部貼付け。体部ロクロナゲ。	9号住居N.2。高台部完。
高台甕	16		6.3	(4.1)	DE	灰色 2	底部回転糸切り後高台部貼付け。体部ロクロナゲ。	9号住居N.1。高台部完。内面に重ね焼き痕残る。



第126図 2~5・7~9号住居跡、6号土坑出土遺物

今井C

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 構成	手法の特長	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師壺	17	(18.8)		(5.8)	ABCDEF	茶褐色 1	胴部外面削り、内面荒ナゲ。口縁部横ナゲ。	9号住カマド内。口縁部 1/2。
甌石	18	残長 (5.3)	幅 3.1	厚さ 2.1	石材は砂岩質	灰白色	長辺4面とも使用。各面の磨痕は浅い。使用の為断面が平行四辺形状に変形。	9号住覆土。1/2。表面は非常に平滑。
甌石	19	(6.3)	4.2	2.9	石材は砂岩質	灰白色	長辺4面とも使用。主には3面。うち1面は中央を浅く溝状に使う。	9号住覆土。1/2。中央の砥ぎ細る部分で欠損。
土師杯	20	12.6		3.0	ABCF	褐色 1	体部外面削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	土壇6N.1。完存。

6. C地点の遺構と出土遺物

今井遺跡群C地点は本庄市今井地内に所在し、調査区は西今井の集落を抜ける道路敷きを対象とする。遺跡の標高は71～71.6m前後を測り、西側から東側へ緩やかに傾斜をもつ。

調査により検出された遺構は、竪穴住居跡6軒、井戸跡1基、溝跡4条、土壇1基の他、ピット群がある。いずれの遺構も調査区を縦走するガス管・水道管等の攪乱を受けて遺存状態が悪い。

竪穴住居跡は、調査区中央部から西側にかけて検出され、1・3号住居跡が重複関係にある。この内3号住居跡は古墳時代後期の遺構で他の住居跡は井戸跡を含め真間期後半～国分期に位置付けられる。2号住居跡はこの一群の中で最も古く丸底の土師器杯を出土する。次いで1号住居跡が続ぎ、大型で4本柱穴をもちカマド内から「く」の字甕を出土し、前内出2号窯段階の須恵器杯を共伴させる。4・5号住居跡からは「コ」の字甕が出土し、4号住居跡カマド右側からは刀子の柄部が検出された。また南側のピット群は、明確には掘立柱建物跡と断定でき得ないが関連性が強い。

井戸跡は、墨書土器・白色針状物質を含む須恵器片等、多量の遺物を出土することからこの時期のものと考えられる。溝跡は、出土遺物もなく時期不詳である。

1号住居跡 (第128回)

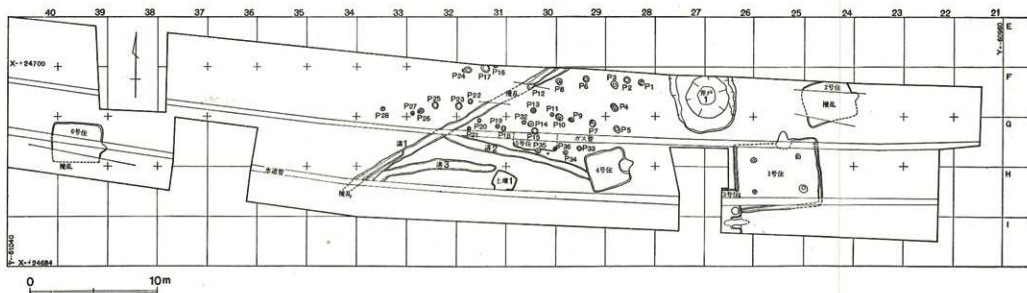
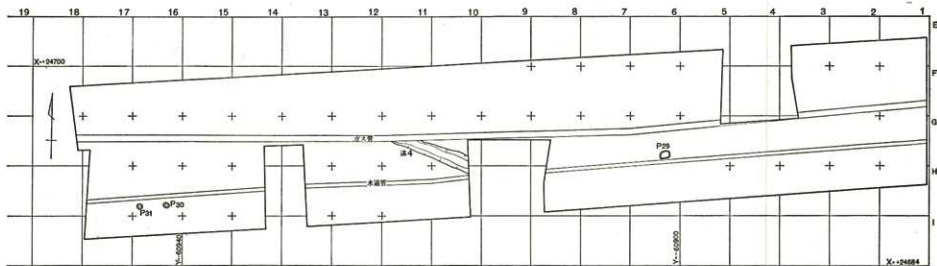
25G区を中心とし、調査区中央に位置する。カマドを構築する北壁東側はガス管によって、南壁西側は水道管によって破壊されている。西壁南側は3号住居跡と重複し、1号住居跡が新しい。

規模は東西6.94m、南北5.48m、深さ30cmを測る。平面プランは長方形を呈し、大型住居跡としてとらえられる。主軸方位はN-3°-Eを指し形態・構造ともによく整った住居跡である。

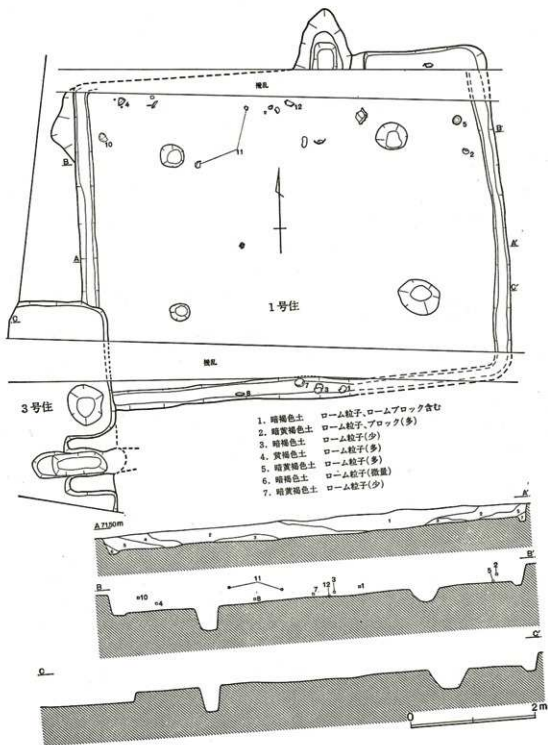
床面はローム面で、堅く踏み固められている。主柱穴は4本で規則的に配置される。床面下25～40cm程でしっかりしている。壁溝は幅20cm、深さ20cm程である。

カマドは北壁の東寄り、壁外に96cm掘り込んで設けられ、底は床面より15cm低く、燃焼部は幅40cmを測り、左右に図示した13・14の「く」の字甕が倒立した状態で出土した。両袖がガス管により破壊されているため、袖部の補強に使用された甕か否かは不明である。

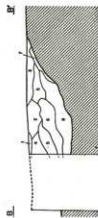
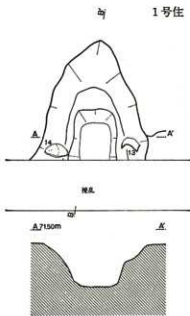
出土遺物は、口縁部が直立し、器高の浅い丸底の土師器杯や底部回転削りの須恵器杯がある。



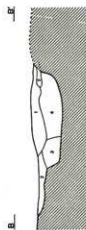
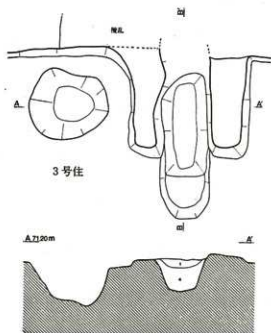
第127図 今井遺跡群C地点、全測図



第128図 1・3号住居跡



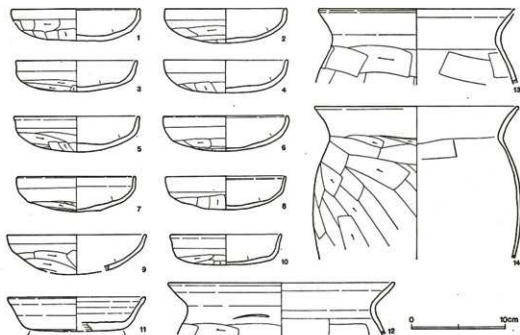
1. 暗褐色土 ローム、焼土粒わずかに含む
2. 暗黄褐色土 焼土、炭化粒子含む粘性強い
3. 暗褐色土
4. 黄褐色土 粘質、焼土粒子微量含む
5. 暗赤褐色土 焼土粒子、ブロックに粘土混る
6. 暗赤褐色土 焼土を主体にわずかに粘土混る
7. 黄褐色土 微量の焼土混る
8. 暗褐色土 焼土、炭化粒子、ローム粒子含む
しまり弱い



1. 赤褐色焼土
2. 灰褐色土 灰混在
3. 暗褐色土 ローム粒、灰、焼土混在
しまり弱い、
4. 暗黄褐色土 ローム多量に含む、
しまり弱い、

0 1m

第129図 1・3号住居跡カメラ



第130図 1号住居跡出土遺物

1号住居跡出土遺物 (第130図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師杯	1	13.8		3.4	ABC F	褐色 2	体部外面篋削り。口縁部横ナゲ。	N. m. 1/5。
杯	2	(12.9)		3.7	AB	褐色 3	体部外面篋削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	N. a. 1/5。
杯	3	12.9		3.4	BC F	褐色 2	体部外面篋削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	N. l. 1/5。
杯	4	13.7		3.6	ABC	淡褐色 1	体部外面篋削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	N. 7. 1/5。
杯	5	13.3		3.9	ABC F	茶褐色 2	体部外面篋削り、上位ナゲ。口縁部横ナゲ。	N. l. 完存。
杯	6	13.2		3.8	ABC F	褐色 2	体部外面篋削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	覆土。ほぼ完。
杯	7	12.6		3.8	BC F	茶褐色 1	体部外面篋削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	N. i. ほぼ完。
杯	8	12.8		3.6	BC F	褐色 1	体部外面篋削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	N. h. ほぼ完。
杯	9	(15.0)	(4.3)		BC F	褐色 2	体部外区鉢削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	覆土。1/5。
杯	10	11.9	4.2	3.3	BC F	褐色 2	底部外面篋削り。体部外面未調整。口縁部横ナゲ。	N. e. 完存。
須恵杯	11	14.5	10.0	3.7	DE	灰色 1	口クロナゲ。底部外面同篋削り。	N. d. 5. 1/5。

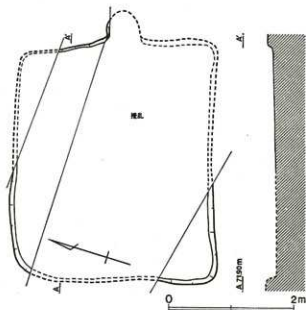
器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師甕	12 (24.2)		(5.2)	ABC F	橙褐色 1	胴部外面荒削り、内面荒ナゲ。口縁部横ナゲ。	Ⅲ. 3. カマド内。口縁部 ¹ / ₁₀	
甕	13 20.9		(8.1)	BC D	褐色 2	胴部外面荒削り、内面荒ナゲ。口縁部横ナゲ。	カマドⅢ. 2。口縁部 ¹ / ₁₀	
甕	14 (21.8)		(16.4)	A B C D E F	茶褐色 1	胴部外面荒削り、内面荒ナゲ。口縁部横ナゲ。	カマドⅢ. 1。胴部 ² / ₁₀ 。口縁部 ¹ / ₁₀	

2号住居跡 (第131図)

調査区中央に近い24F区に位置し、南側には1号住居跡が近接する。住居跡は、北東コーナーが調査区外で、中央に大きな掘乱を受け、東壁に掘り込んで設けられたカマドもその姿を失っている。

規模は東西3.86m、南北3.26mと推定され、深さ10cmと極めて浅い。平面プランは長方形を呈す。主軸方位はN-74°-Eを示す。

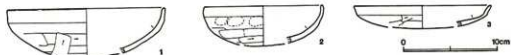
床面はローム面で、やや堅くしまる。東壁外にカマドの焼土が一部残存する。出土遺物は、器高の高い丸底の土師器坏を伴う。



第131図 2号住居跡

2号住居跡出土遺物 (第132図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師坏	1 (16.5)		(5.2)	BC F	褐色 2	体部外面荒削り、上位ナゲ、内面ナゲ。口縁部横ナゲ。	Ⅲ. 土。 ¹ / ₁₀	
坏	2 (12.6)		(4.3)	BC F	褐色 2	体部外面荒削り、上位指頭痕残る。口縁部横ナゲ。	Ⅲ. 土。 ¹ / ₁₀	
皿	3 (14.7)		(2.5)	BC	褐色 2	体部外面荒削り。口縁部横ナゲ。	Ⅲ. 土。 ¹ / ₁₀	

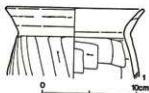


第132図 2号住居跡出土遺物

3号住居跡(第128図)

26H区に位置し、調査区中央の1号住居跡西壁コーナー部と重複関係にある。カマドを設ける東壁から北壁コーナー部が検出されたのみで、他は調査区域外である。東壁を1号住居跡床面下より検出し、深さは確認面より30cmを測る。

カマド上部は攪乱により煙道が削られ、両袖は90cmを測り、底は舟底型で床面からの深さ20cm。カマド左側には、貯蔵穴と考えられる施設が存在する。出土遺物はカマド内から鬼高期と思われる甕が検出された。



第128図 3号住居跡出土遺物

3号住居跡出土遺物(第133図)

図示した土師器甕は、カマド内覆土より出土した。口径14.4cm、残高7.5cm、橙褐色で焼成は普通。胎土はA、B、C、Fを含み、胴部外面上方への篋削りを施す。

4号住居跡(第134図)

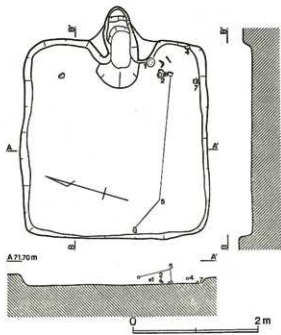
29H区、調査区中央に位置する。

規模は、東西3.20m、南北3.04m、深さ15cmを測り方形プランを呈す。主軸方位はN-74°-Eを指す。

床面は平坦だが、ロームブロックが浮き出し、コーナー部は軟質である。

カマドは東壁中央に壁外に48cm掘り込み、底は床面より18cm低く、舟底型を呈す。煙道部は階段状に立ち、焚口部は幅30cmを測る。

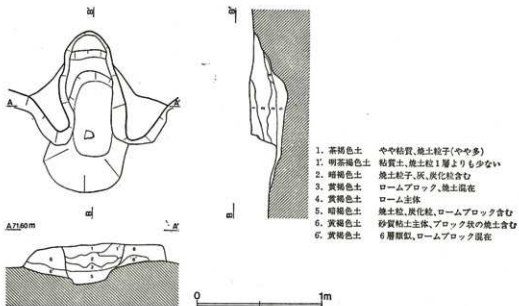
出土遺物はカマド内から図示6、床直から図示7のコの字甕、2の底部糸切りの須恵器坏や酸化焰焼成の高台付皿・鉄器(刀子の柄部分)が出土した。いずれもカマド右側に集中し、貯蔵穴に代わる付属施設の存在が示唆される。



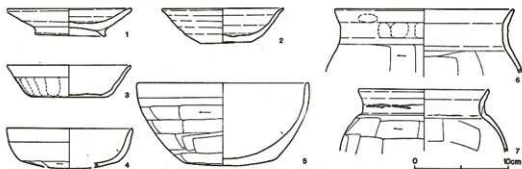
第134図4号住居跡

4号住居跡出土遺物(第136図)

器種	番号	大きさ(cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師器 高台皿	1	13.2	7.5	2.9	ABDEF	褐色 4	ロクロナデ。底部外面回転糸切り後、高台部貼付け。	N.3。ほぼ完。黒灰色の部分有り。



第135図 4号住居跡カマド



第136図 4号住居跡出土遺物

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特長	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
須恵環	2	13.0	5.5	3.7	ABEF	灰色 3	ロクロナゲ。底部外面回転承切り。	N.7。1/10。
土師環	3	13.2	(8.3)	3.4	AB	茶褐色 2	口縁部傾ナゲ、内面に及ぶ。体部外面 頸頭おさえ。底部外面削り。	覆土。1/10。
環	4	(13.4)		(4.3)	BCF	褐色 2	底部外面削り。体部ナゲ。口縁部傾 ナゲ。	N.2。1/10。底部に焼成前の 穴風修痕(粘土光燐)有り。
鉢	5	8.2		8.9	ABC	褐色 3	底部、体部外面削り、上位未調整。 口縁部傾ナゲ。	N.8、15。1/10。

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師罎	6	19.0		(6.9)	A B C F	褐色 2	胴部外面篋削り、内面篋ナゲ。口縁部指頭おさえ後横ナゲ。	カマド内。口縁部 $1/10$
小型罎	7	13.8		(6.7)	B C E F	茶褐色 2	胴部外面篋削り、内面篋ナゲ。口縁部横ナゲ、接合痕明瞭。	№9。口縁部ほぼ完。

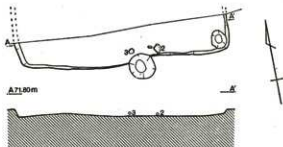
5号住居跡 (第137図)

30G区、4号住居西側に位置する。住居跡のほとんどが擾乱を受け、南側がわずかに検出された。

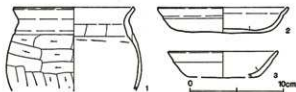
規模は、東西3.50m、南北は不明である。深さ12cmを測り、方形プランを呈すると思われる。主軸方位はE-3°-Sを示す。

床面は平坦だが、わずかに西側コーナー部分が低い。軟質だが、ローム面を利用している。

出土遺物は、覆土中から小型のコの字甕 (図示1) が検出された。



第137図 5号住居跡



第138図 5号住居跡出土遺物

5号住居跡出土遺物 (第138図)

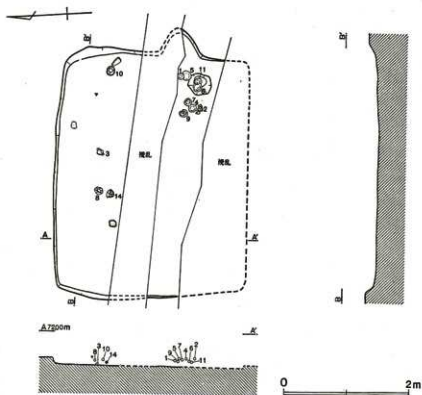
5号住居跡からの出土遺物は、土師器のみである。図示した1は、小型甕で推定口径12.8cm、残高8.9cm

で茶褐色を呈し、焼成は良好である。胎土はB C D E Fを混入させる。覆土から出土し、口縁部・胴部上半 $1/10$ 残存。2は土師器罎で口径13.9cm、器高2.8cm、推定底径9.2cm、茶褐色を呈し焼成は良好。胎土はB Fを混入。底部外面篋削り、体部外面ナゲ、内面横ナゲ。口縁部は木口状工具による横ナゲ、体部との間に明瞭な段有り、外反する。 $1/10$ 残存。3は土師器罎で推定口径11.7cm、器高2.8cm、推定底径7.4cm、橙褐色で焼成良好。胎土A B E F、底部篋削り。体部未調整。口縁 $1/10$ 残。

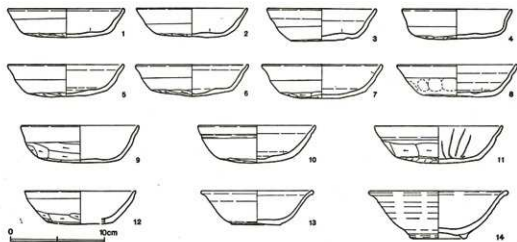
6号住居跡 (第139図)

39G区。調査区西端部分に位置する。住居跡は、南東コーナー部から西壁にかけて擾乱を受け、中央部を東西に水道管が埋設され、カマドも半壊されている。

規模は東西4.10m、南北3.15mと推測され、深さ15cm前後を測り、長方形プランを呈す。主軸方位は、E-5°-Sを指す。床面は平坦で、ロームブロックが浮き出すが、よくしまっている。



第139図 6号住居跡



第140図 6号住居跡出土遺物

カマドは東壁のやや南寄りに45cm程掘り込んで設けられている。底は床面と同レベルである。カマド前底部の覆土中から土師器が集中して出土した。また床面を切り込んで径38cm、深さ14cmを測る貯蔵穴状のピットが検出された。出土遺物は、底部糸切り離して、外反する口縁の端部が肥厚する須恵器杯や、器形の歪みが見られる平底の杯が検出された。

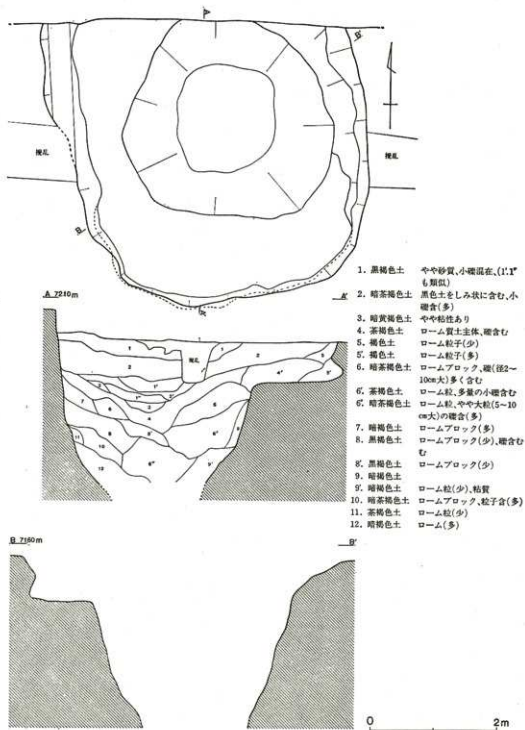
6号住居跡出土遺物(第140図)

器種	番号	大きさ(cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師杯	1	12.2	9.3	3.1	BF	茶褐色 1	底部外面篋削り。体部外面未調整。口縁部横ナゲ。	N.9。口縁部 ^{1/4} 。
杯	2	(11.8)	(7.6)	3.1	BG	茶褐色 1	底部外面篋削り。体部外面ナゲ。口縁部横ナゲ。	N.16。口縁部 ^{1/4} 。
杯	3	11.6	7.2	4.5	ABDF	橙褐色 2	底部外面篋削り、周辺部調整。体部外面未調整。口縁部横ナゲ。	N.5。覆土。ほぼ完。
杯	4	11.6	9.1	3.3	BDEF	茶褐色 2	底部外面篋削り。体部外面未調整。口縁部横ナゲ。内面ナゲ。	N.14。 ^{1/4} 。
杯	5	12.3	8.5	3.5	BDEF	橙褐色 2	底部外面篋削り。体部外面未調整。口縁部横ナゲ。内面ナゲ。	N.10。ほぼ完。体部下半～底部に煤状物質付着。
杯	6	12.0	(8.8)	3.4	BEF	橙褐色 2	底部外面篋削り。体部外面未調整。口縁部横ナゲ。内面ナゲ。	N.12。ほぼ完。
杯	7	12.8	(9.2)	3.6	ABDEF	橙褐色 2	底部外面篋削り。体部外面未調整。口縁部横ナゲ。	N.13。ほぼ完。煤状物質付着。つくり雑。
杯	8	12.8	7.7	3.4	ABF	橙褐色 1	底部外面周辺部削り。体部指取面残存。口縁部横ナゲ。	N.6。ほぼ完。つくりやや雑。
杯	9	12.5	8.9	4.0	BCDF	橙褐色 2	底部・体部外面篋削り。口縁部横ナゲ全体に磨滅。	N.15。ほぼ完。
杯	10	12.5	7.8	4.1	BF	橙褐色 2	底部外面篋削り、体部外面未調整。口縁部横ナゲ。	N.1。 ^{1/4} 。つくりやや雑。
杯	11	(13.6)	(9.1)	4.0	ABF	茶褐色 1	底部・体部外面篋削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。内面ナゲ後暗文を施す。	覆土。口縁部 ^{1/4} 。体部内面に黒色付着物あり。
杯	12	(11.8)	(7.1)	(3.6)	BDEF	褐色 1	底部・体部外面篋削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。	覆土。 ^{1/4} 。
須恵杯	13	12.0	5.4	3.7	CD	黒灰色 1	口縁部横ナゲ。底部外面回転削り。	N.11。完存。
高台杯	14	(14.7)	(7.8)	5.1	BDEF	黄灰色 3	底部外面回転削り後高台貼付け。体部から口縁部口縁部横ナゲ。	N.8。 ^{3/4} 。

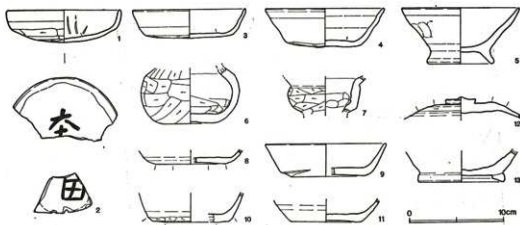
1号井戸跡(第141図)

調査区東寄りの26・27F区に位置し、東に2号住居跡、南に1・3号住居跡、西に4号住居跡が位置し、囲まれるようにして検出された。井戸跡は北側が調査区域外にかかる。

規模は東西5.18m、南北4.65+ α m、深さ2.26+ α mを測り、平面プランは隅丸方形を呈す。確認面から65cm程下がった所で平坦なテラス状部分が回り、南側で一部10~20cmのオーバーハングが認められた。開口部は径3.40mを測り、徐々に狭まる。覆土は自然堆積の状況を示し、ローム粒子・ブロック混じりの黒褐色土が主体である。出土遺物では、「本」「田」の墨書土器・底部外周篋削りで白色針状物質を混入させた須恵器杯や酸化焙焼成の高台付杯が検出された。他にも中層・下層から多量の土師器や須恵器破片が出土し、周辺の住居跡と同時に存在と考えられる。



第141図 1号井戸跡

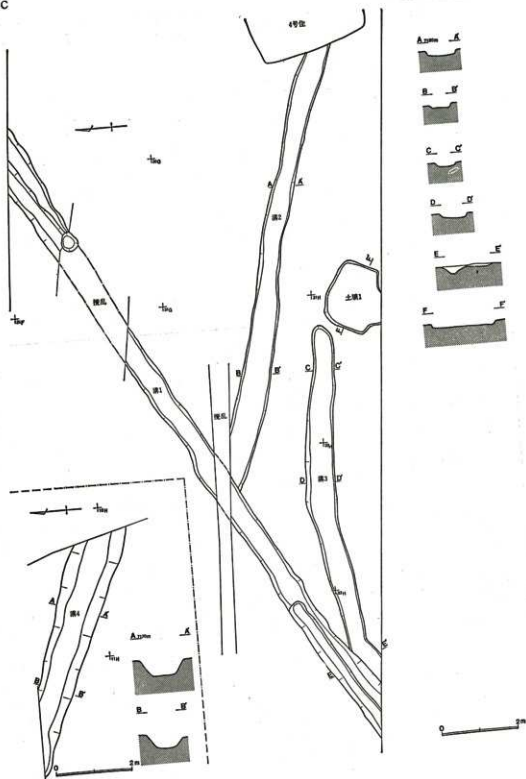


第142図 1号井戸跡出土遺物

1号井戸跡出土遺物 (第142図)

部種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	1	(12.0)		3.4	BCDE	橙褐色 1	体部外面寛削り、上位未調整。口縁部横ナゲ。内面に暗文有り。	覆土、中層。1/3。底部外面に墨書あり。
環	2				BCEF	橙褐色 1	底部外面寛削り、内面ナゲ。	覆土、下層、底部破片。底部内面に墨書あり。
環	3	(12.0)	9.3	3.1	BF	橙褐色 1	底部外面寛削り。体部外面未調整。口縁部横ナゲ、底部内面平滑。	黒褐色土層、赤褐色土層。口縁部2/3。
環	4	12.5	7.9	4.2	BDEF	茶褐色 1	底部外面寛削り。体部外面未調整。口縁部横ナゲ。	黒褐色土層。口縁部2/3。
土師質 高台環	5	(12.5)	6.8	6.0	BDF	淡橙褐色 1	口縁部横ナゲ。体部外面指頭圧痕。高台部貼りつけ。	黒褐色、中層。口縁部2/3。底部完。
土師 小壺	6	10.6		(6.0)	ABDEF	茶褐色 1	底部・胴部外面寛削り、内面下半寛ナゲ。	覆土、中層。胴部2/3。底部完。
小壺	7		(3.9)		ADEF	茶褐色 1	胴部外面寛削り、内面寛ナゲ、下方に指頭痕残る。口縁部横ナゲ。	覆土、中層。底部2/3。
須恵環	8	(7.4)	(1.5)		BDEG	灰色 1	底部外面回転糸切り周辺回転削り。体部ワクロナゲ。	覆土、中層。底部2/3。
環	9	(12.7)	(7.9)	3.5	砂粒、微細白色粒	灰色 1	底部外面回転糸切り2回。体部～口縁部ワクロナゲ。	覆土、中・下層。口縁部1/3。
環	10	(8.2)	(2.2)		DE	灰色 1	底部外面回転糸切り周辺回転削り。体部下位手持ち削り。	覆土、下層。底部2/3。
環	11		(2.5)		DE	青灰色 2	底部外面回転糸切り。体部外面ワクロナゲ。	覆土、中層。底部完。
蓋	12		(1.4)		E(多)D	青灰色 2	ワクロナゲ。天井部回転削り、つまみ周囲回転糸切り痕残る。	黒褐色土層。1/3。
瓶	13	9.1	(3.4)		黒色粒子、微細砂粒	灰色 1	底部外面回転削り後高台貼付け。	覆土、中層。底部完。

今井C



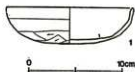
第143图 1~4号溝跡、1号土塚

1号土塙 (第143図)

31H区、4号住居跡の西側に検出された。南側は調査区外に張り出て延びる。規模は東西1.76mで南北 $1.65 + \alpha$ m。深さは10cmと浅い。主軸方位はN-63°-Wを指す。底面は平坦である。出土遺物は須恵器の口縁部、及び外面平行叩きで内面青海波文をもつ胴部小破片が検出された。

1～3号溝跡 (第143図)

1号溝は調査区東側に位置し、南西から北東に調査区を横切る。走向はN-63°-Eで、直線的である。深さ10cm程で浅く、幅60cm前後である。覆土中には、浅間B軽石(?)と少量の焼土粒子を含む。溝2は1号溝に切られ、32G区から4号溝に向け延びる。走向はN-77°-Wで、深さ10cm程で浅く、幅55～80cmである。図示の土器器杯を出土するが、伴うか否かは不明。3号溝も1号溝に切られ、33H区からN-85°-Eで走向する。



第144図 2号溝跡出土遺物

2号溝跡出土遺物 (第144図)

土器器杯。口径13.5cm、器高3.9cmを測る。褐色で焼成は普通である。胎土はB、C、Fを混入させ、緻密である。手法は底部から体部外面にかけて筥削りを施し、一部未調整部を残す。口縁部横ナデ、体部内面に及ぶ。全体の約 $\frac{1}{3}$ 程度残存する。

4号溝跡 (第143図)

10・11G区。調査区東側に位置する。北面から南東に調査区を斜向する。北側は攪乱を受け、南側は調査区域外に続く。遺物は検出されなかった。走向はN-65°-Wである。幅95～107cm、深さは45cm前後である。

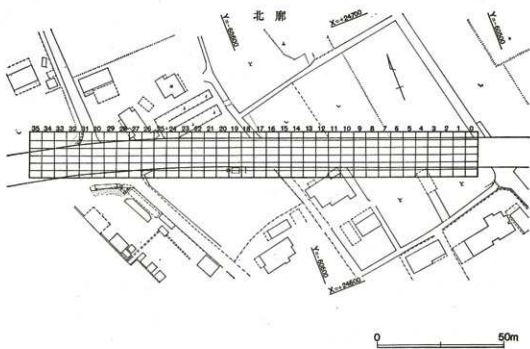
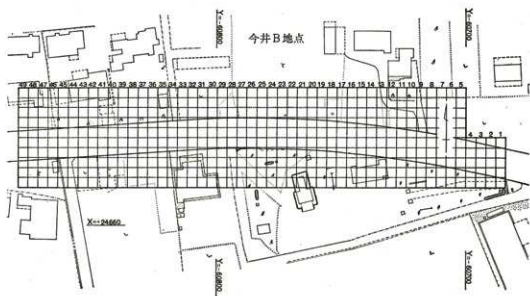
7. B地点の遺構と出土遺物

今井遺跡群B地点は、本庄市大字今井字北廓から西廓に跨って所在し、東に北廓遺跡、西にはC地点が隣接する。また調査区の南側に接して金嶺神社が鎮座する。遺跡は西から東に緩く傾斜する洪積扇状地上の、標高70.5～71.5m付近に立地し、周辺は起伏が少ない平坦な地形で、主として桑園と果樹園に土地利用がなされている。

調査区は、東西約200mの狭長な道路敷を対象としており、そのなかを縦走するガス管や水道管その他の攪乱のために遺構の遺存状態はあまり良くなかった。

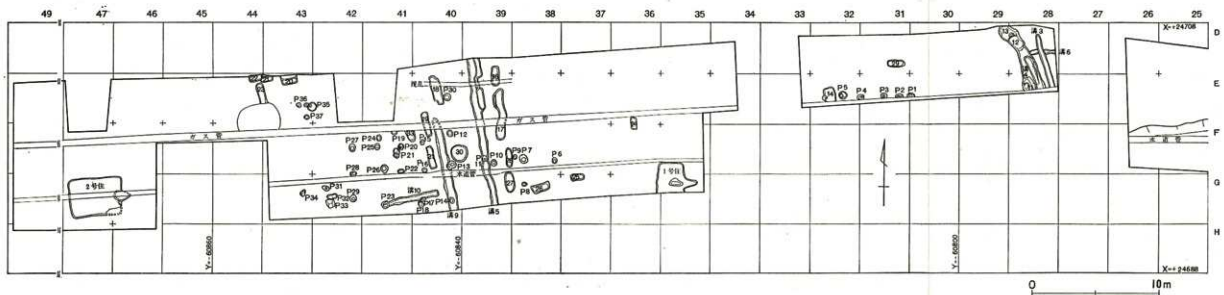
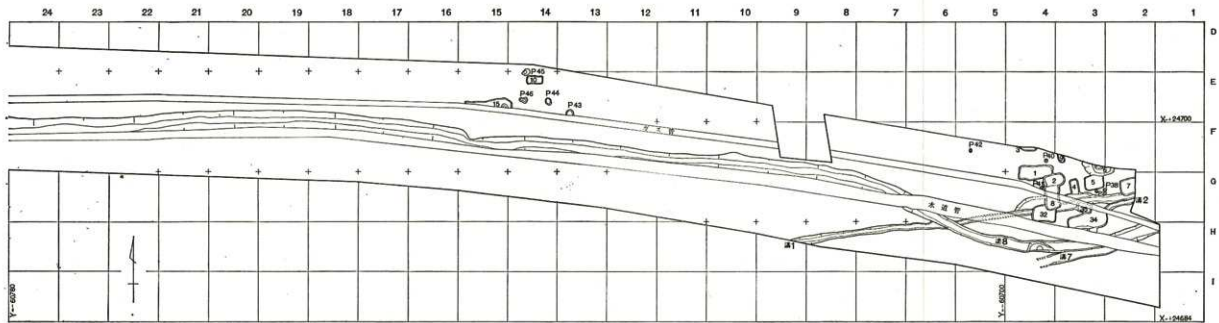
検出された遺構には、堅穴住居跡2軒、土塙35基、溝状遺構10条、ピット46本がある。

今井B



0 50m

第145図 今井遺跡群B地点・北廓遺跡グリッド配置図



第146图 今井造群B地点全图

堅穴住居跡は調査区西寄りの位置より、相互に45m程隔たって検出された。両者とも平安時代に属するもので、規模の小さい1号住居跡からは墨書土器などと共に青銅製の帯金具が出土しており、注目される。

土壇は35基検出されているが、検出位置から大きく4つに分かれる。調査区東端の北廓遺跡と接する地域が最も密集度が高く、12基が群在している。これらは隅丸長方形を呈するものが多い。遺物が全く検出されないために時期決定は困難であるが、隣接する北廓遺跡の中～近世の溝跡群との関連で把えるべきであろう。また7号溝跡は、内耳鍋等を出土した北廓遺跡12号溝跡の西側延長部と考えられるが、遺物は殆ど検出されなかった。

8号溝跡は7号溝跡から分岐し、やや蛇行しながら調査区内を縦走する。

一方、調査区西域の2軒の住居跡に挟まれた区域には、土壇、溝、ピット群が集中する。土壇には、円形のものと同長円～長方形を呈するものがある。16～19・27・28・31号土壇は、溝状遺構の途切れたものとも見做せる。またピット群のなかには、掘立柱建物跡の存在も想定されるが、明確にできなかった。

1号住居跡 (第147図)

35F・G区を中心に位置する。東壁南側と南壁は調査区外にかかる。北西コーナーは水道管敷設により、一部削平されている。

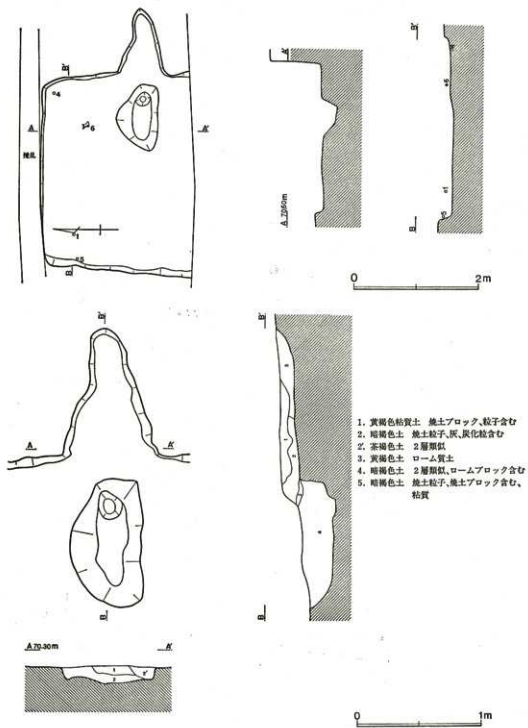
規模は2.97×2.45+αm、深さは西壁で26cmを測る。主軸はおおよそN-90°-Eを示す。

カマドは東壁に付設され、壁外へ1.04mのびる。焚き口部付近には1.4×0.58m、深さ25～30cmのカマド施設と関係すると思われる不整楕円形の落ち込みが検出されている。

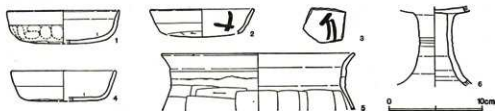
遺物は少量である。東側コーナー部より土師器坏(4)が床直で出土し、その南西側より須恵器高坏脚部(6)、北西コーナー部より土師器坏(1)、甕口縁部(5)が出土している。また覆土中より青銅製帯金具の一部(第271図10)と内面に墨書の有る土師器破片(2・3)が検出されている。

1号住居跡出土遺物 (第148図)

器種	番号	大きさ(cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師器 坏	1	12.0	9.4	3.5	ABCF	赤褐色 1	底部外面削り。体部外面指跡が残る。口縁部横ナゲ、体部内面に及ぶ。	N.2。1/10
	2	(11.0)	(8.8)	(2.9)	BCEF	赤褐色 2	底部外面削り。体部外面未調整。口縁部横ナゲ。	覆土。1/10。内面に墨書あり。
	3				BCEF	褐色 2	底部外面削り、内面ナゲ。	覆土。底部破片。内面に墨書あり。
土師器 坏	4	11.0	8.6	3.3	ABCF	赤褐色 1	底部外面削り。体部外面ナゲ。口縁部外面指ナゲ後横ナゲ。	N.4。2/10
甕	5	(20.7)		(6.1)	ABC	赤褐色 1	胴部外面削り、内面横ナゲ。口縁部指おさえ後横ナゲ。	N.1。口縁部2/10
須恵器 高坏	6		(8.5)		DEF	灰色 2	ロクロナゲ。柱状部外面に2本の沈線を施す。	N.3。脚部1/10



第147図 1号住居跡・カマド



第148図 1号住居跡出土遺物

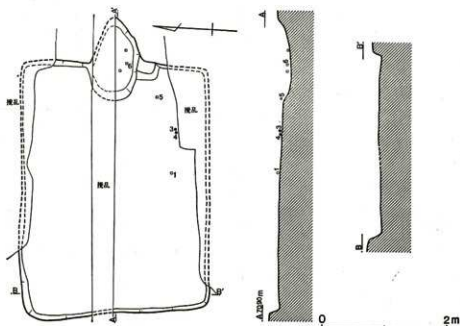
2号住居跡 (第149図)

46・47G区に位置する。全体に擾乱が著しく、西壁及び北壁・東壁の一部のみが残存していた。

残存部分及び床面・遺物の出土範囲から、長方形プランで、規模は約4.2×3.1mと推定される。深さは約17～22cmを測る。主軸方位は推定でN-85°-Eを示す。床面は、カマド前面及び住居跡中央部を中心に、非常に堅く良好な状態を呈す。一方壁際はやや軟弱で僅かに凹む。柱穴は、残存範囲内では認められない。

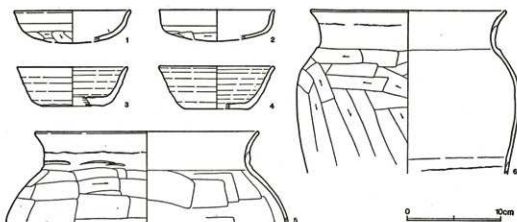
カマドは中央より北側が、水道管敷設による擾乱を受けている為、遺存状態が悪く詳細は不明である。残存する部分からは、土器器竈(6他)が潰れた状態で検出されている。

遺物はカマド付近を中心に、住居跡遺存状況に比し、比較的多くの破片が出土している。



第149図 2号住居跡

今井B



第150図 2号住居跡出土遺物

2号住居跡出土遺物 (第150図)

器種	番号	大きさ (mm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	1	(12.4)		(3.5)	ABCEP	橙褐色 2	胴部外面斲削り、上位は未調整。口縁部外面軽いナゲ横ナゲ。	N.15, 1/3。
環	2	(12.3)		(3.3)	ABF	褐色 2	胴部外面斲削り、上位は未調整。口縁部横ナゲ。	覆土, 1/3。
須恵環	3	(11.8)	(6.6)	(4.2)	CDEF	灰色 2	口クロナゲ。底部外面回転未切り。	N.23, 覆土, 1/3。
環	4	(12.2)	(7.0)	(4.6)	BCDF (赤色 粒子)	淡灰色 2	口クロナゲ。底部外面回転未切り。	N.23, 1/3。
土師甕	5	(23.8)		(9.8)	ABCF	褐色 2	胴部外面斲削り、内面横ナゲ。口縁部横ナゲ。	N.22, 口縁部, 1/3。
甕	6	(11.0)		(17.5)	ABCDE。砂 粒多し。	茶褐色 1	胴部外面斲削り、内面整器木口伏工具によるナゲ。口縁部横ナゲ。	N.24, 口縁部, 1/3, 脚部 1/3。

1・2号溝跡 (第151図)

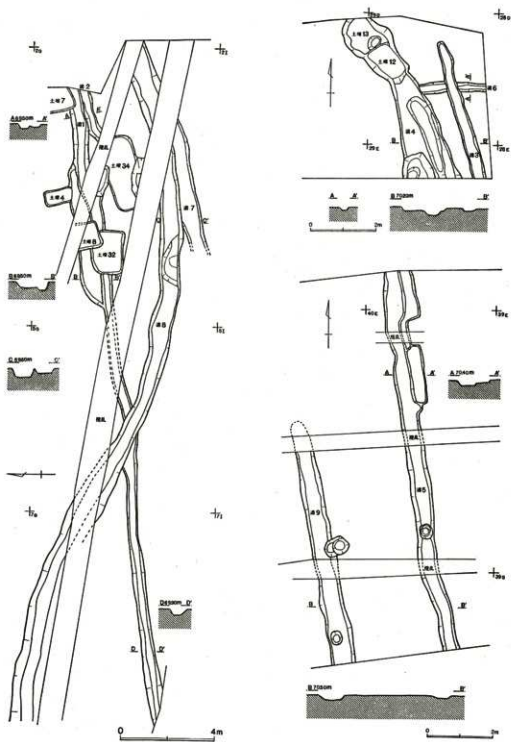
調査区東端部から検出された。1号溝跡は幅55~67cm、深さ5~20cmの浅い溝で東西方向に直線的に延びる。4・7・8・32号土塊及び8号溝跡と重複するが、土塊群よりも新しい。8号溝跡との新旧関係は不明であった。

2号溝跡は1号溝跡から分岐する。深さ5~9cmと非常に浅く、ガス管の南側では検出されなかった。34号土塊よりも新しいと考えておきたい。

3・4・6号溝跡 (第151図)

3号溝跡は28D・E区に位置し、幅40cm、深さ10cmの浅い溝跡で南北に延びる。

4号溝跡は3号溝跡西側に近接する。溝内に土塊状の落ち込み (11~13号土塊) が存在するが、



第151图 1~9号洞跡

今井B

切り合いは不明瞭であった。最大幅1.36m、深さ5～21cmを測る。微量の土器片が出土したが、遺存状態が悪く、所属時期不明。

6号溝跡は3・4号溝跡に直交するように東西方向にのびる。西側は4号溝跡に切られ、その延長部は確認されない。幅23～35cm、深さ2.5～4.5cmと浅い。

7・8号溝跡（第151図）

7号溝跡は北廓遺跡12号溝跡の延長部に相当する。幅35～55cm、深さは12～15cmと浅い。内耳銅片が少量検出されている。8号溝跡は7号溝跡から分岐し、調査区内を蛇行しつつ西にのびる。幅40～65cm、深さは20～70cmを測り、標高の高い西側が深い傾向にある。7号溝跡との切り合いは不明である。

5・9号溝跡（第151図）

5・9号溝跡は39・40区にそれぞれ平行して検出された。5号溝跡は9号溝跡の東側に位置し、南北に走る。幅0.6～1mで北側は2段に掘り込まれる所がある。深さは10～20cmと浅い。

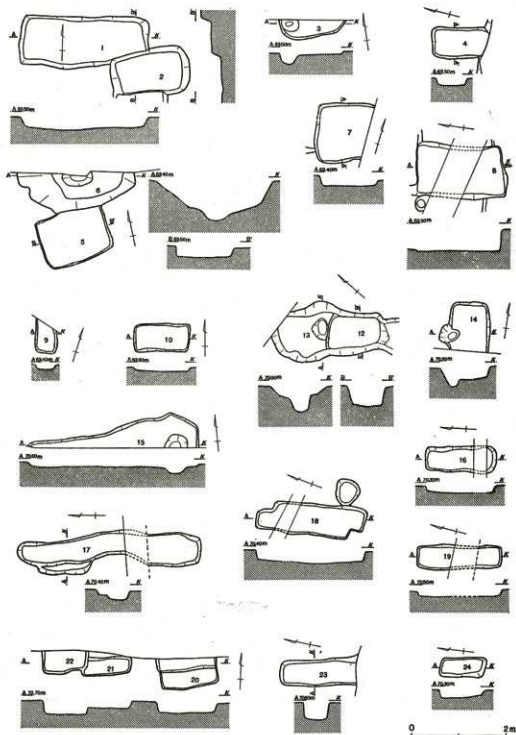
9号溝跡は5号溝跡と基本的な規模・形態は近似するが、東西に走るガス管の北側で途切れている。幅0.6m、深さ20cmを測る。両溝とも覆土は黒～暗褐色を呈し、ローム粒子が混在する。出土遺物は少ないが、土師器杯・甕の細片が出土している。

1～35号土壌（第152図）

B地点からは35基の土壌が検出された。その平面分布をみると、調査区東端部の2～4区、14・15区、28～32区、36～44区の4つのまとまりが識別できる。

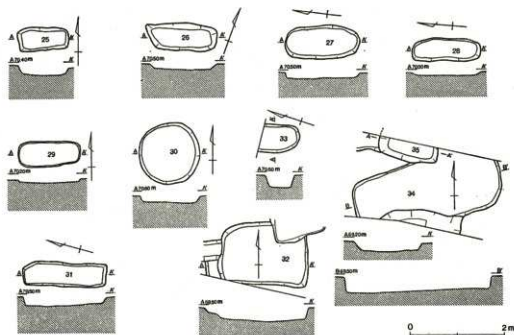
各土壌は平面形態から、隅丸長方形、長楕円（溝状）、円形、不定形の4タイプに分類される。隅丸長方形を呈する土壌のうち、比較的規模の大きい1～5・7・8・32・34号土壌は、調査区東端部に集中し、重複も多い。新旧関係を示せば、1・8号土壌（旧）→2号土壌（新）、32号土壌→8号土壌、34号土壌→35号土壌、5号土壌→6号土壌となる。覆土も類似しており、黒褐色土をベースにロームブロックとローム粒子を多量に混在する。人為的な堆積と考えられよう。この一角から検出された土壌群は、遺物を全く出土しないために所属時期の決定は困難を伴うが、隣接する北廓遺跡の溝跡群と一連のものとして扱えば、中～近世期として過りなからう。10～15号、29号土壌も上記土壌群と近接する時期と考えておく。

一方、調査区西域の1・2号住居跡に挟まれて位置する土壌群には、円形プランのもの（30号土壌）と長楕円もしくは長方形のもの（16～28・31号土壌）があり、後者は溝状遺構の途切れたような形状を示している。16～18・20・31・33号土壌からは、真間～園分間の土師器杯・皿・甕類の細片が出土した。



第152图 1~24号土坑

北廓



第153図 25～35号土塊

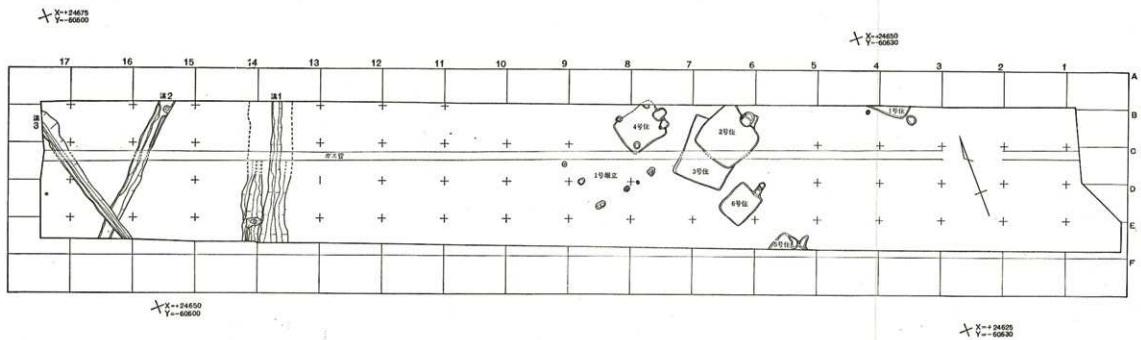
8. 北廓遺跡の遺構と出土遺物

北廓遺跡は本市大字今井字北廓から長興寺境内付にかけて所在する。遺跡は女堀川の開析により形成された沖積地（水田面）に面した、標高70～70.5mの洪積扇状地縁辺部に立地する。調査区西域にはローム層が発達するが、中央から東域にかけてローム層が薄くなり、代わって暗褐色を呈す沖積土壌が堆積する。住居跡群と1号溝跡は、この沖積土を掘り込み構築されていた。

検出遺構には、堅穴住居跡6軒と掘立柱建物跡1棟、溝跡14条があり、調査区東部に存在する奈良～平安時代の住居跡と西部に構築された中世～近世の溝跡群に大別される。

堅穴住居跡群と掘立柱建物跡は、調査区東端部に近接して存在する。3号住居跡と2号住居跡、4号住居跡と掘立柱建物跡は相互に重複関係にあり、各々後者の方が前者よりも新しい。

溝跡は14条検出されたが、古墳時代の遺物出土する1・2号溝と昭和時代の所産と思われる4号溝跡を除くと、中～近世期に属するものと考えられる。特に11号溝跡は、幅3.8mと規模が最も大きく、地割（道路）に対応して直角に屈曲する。水の流れた形跡もないことから、館跡（屋敷跡）に伴う堀跡と想定することも可能である。西に隣接する金鎖神社南傍は、「陣屋前」又は「御蔵屋敷」と呼ばれ、児玉党の一派今井氏の館跡とする説（小松徹三「埼玉本庄・郷土史話」）もあ



第154图 北彩渣跡全測図

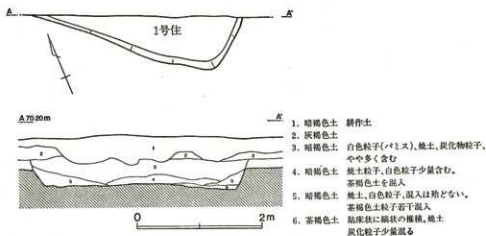
るが、それとの関連は不明とせざるを得ない。

1号住居跡 (第155図)

3・4 B区を中心に位置する。住居跡大半が調査区外にかかり、南側コーナー部分が検出された。

全体の規模・形態は不明だが、調査区内で西南壁3.06m、東南壁0.96mを測る。壁はやや斜めに立ち上がり、壁高は西壁で確認面より0.24mを測る。床面はやや凹凸がみられる。

遺物には土師器杯、甕、須恵器大型寛片がみられる。いずれも小破片で量は少ない。



第155図 1号住居跡

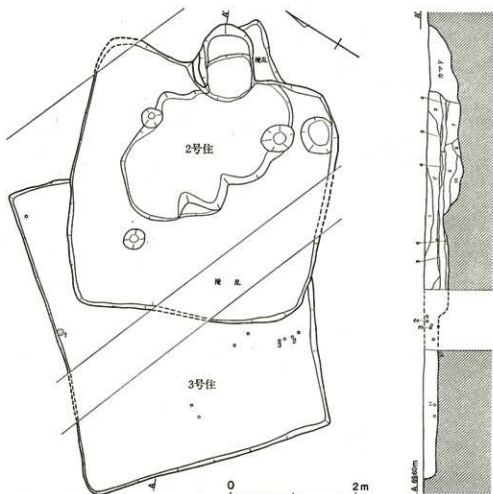
2号住居跡 (第156・157図)

5・6 B, 5・6 C区を中心に位置する。3号住居跡を切り、一部に攪乱を受けている。

規模は、4.34×4.1m、深さ0.35mで、プランはやや隅丸の方形を呈す。主軸方位はN-67°-Eを示す。床面は比較的平坦である。

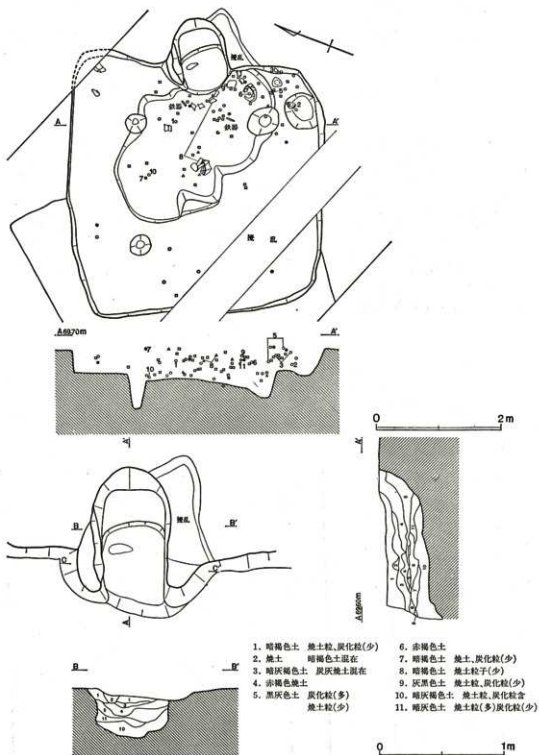
カマドは東壁中央の位置にあり、壁を約0.77m掘り込んでつくられていた。左袖側は、強く熱を受けた状態を残し、燃焼部付近は非常によく焼けた厚い焼土層が認められた。住居跡中央部床面には焼土塊があり、その直上により土師甕(8)が出土している。床面下には、カマド前方から住居跡中央部にかけて、深さ約10cmの不整形な土塊が検出された。

遺物は土師器杯、甕、須恵器杯の他、鉄製刀子(第271図5)、鉄製鎌(第271図6)、不明鉄製品、土鍾(11)、軽石(9・10)が出土している。柱穴は、残存範囲内で3本確認された。

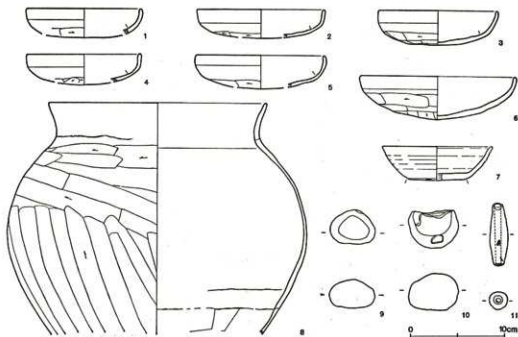


1. 暗褐色土 焼土・炭化粒・白色粒(多)。1'. 暗褐色土 1層類似,白色粒(少)。
2. 暗褐色土 焼土(多)。
3. 茶褐色土 焼土含。
4. 焼土。
5. 暗褐色土 炭化粒(少),焼土含。
6. 黄灰色土 粘質,焼土含。
7. 暗灰褐色土 焼土(多),炭化粒(少)。
8. 茶褐色土 焼土粘含。
9. 暗褐色土 焼土,炭化粒(多)。
10. 黑褐色土 炭化粒(少),焼土粘含。
11. 暗褐色土 白色粒子(少),焼土(少)。

第156图 2・3号住居跡



第157图 2号住居跡出土遺物分布図・カマド



第158図 2号住居跡出土遺物

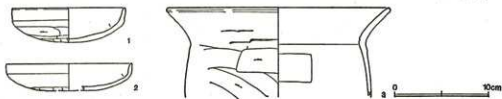
2号住居跡出土遺物 (第158図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	1 (12.2)			(3.1)	BCF	橙褐色 2	口縁部横ナゲ。体部外面上位未調整、 下位焼削り。	N.15。口縁部。1/30
環	2 13.8			(3.1)	ABC	褐色 2	口縁部横ナゲ。体部外面未調整。底部 外面焼削り、内面ナゲ。	N.31a。1/30
環	3 12.7			(3.7)	ABC	褐色 3	口縁部横ナゲ。体部外面上位未調整、 下位および底部外面焼削り。	N.27、28。1/30
環	4 (12.2)			(3.3)	ABC	褐色 2	口縁部横ナゲ。体部外面未調整。底部 外面焼削り。	甌土。1/30
環	5 (13.9)			(3.6)	ABC	褐色 2	口縁部横ナゲ。体部外面未調整。底部 外面焼削り。	N.21、26。2/30
環	6 (16.6)			4.6	ABC	褐色 2	口縁部横ナゲ。体部外面焼削り、上位 は未調整。内面は磨減が著しく不明瞭。	N.19。2/30
須恵環	7 (12.0)	(6.3)		3.6	EG	灰色 1	口縁～体部口ロナゲ。底部外面ナゲ、 周辺回転焼削り。	N.42。2/30。口ロナ右回り。 南北全産。
土師壺	8 (23.4)		(24.8)		砂粒(やや多) ABCDE	赤褐色 1	口縁部横ナゲ。胴部外面焼削り、内面 ナゲ。接合部はナゲ痕顯著。	N.6、43、カマド内。口縁 部1/30。胴部1/30
軽石	9 全長 3.7	幅 4.8	厚さ 3.0		角閃石安山岩	灰褐色	表面は角がとれて丸味をもつ。	N.1。完存。
軽石	10 全長 (3.9)	幅 5.3	厚さ 3.9		角閃石安山岩	灰褐色	表面は丸味をもつ。キズ状の痕跡が若 干みられる。	N.6。1/30
土鍾	11 全長 6.7	外径 1.9	孔径 0.6		ABC	暗褐色 2	外面ナゲ調整。	甌土。ほぼ完。

3号住居跡 (第156図)

6・7 BC, 6 D区に位置する。2号住居跡に切られている他、ガス管敷設による攪乱を一部に受けている。規模は5.06×4.26m、深さは西壁で0.22mである。プランは長方形に近い。主軸方位はN-41.5°-Eを示し、他の住居跡とはやや異なる。床面は平坦である。

遺物は、土師器杯(1)が北西壁際の中央に床直で、土師器杯(2)、土師器甕(3)が東南壁近くより出土している。他に少量の土師器片の出土がみられた。



第159図 3号住居跡出土遺物

3号住居跡出土遺物 (第159図)

器種	番号	大きさ(cm)		胎土	色調 地成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径				
土師杯	1	12.2		3.7	A B C F	茶褐色 2 口縁部横ナデ。体部外面磨削り、上位は木調整。内面はナデ。	N.2。完存。
杯	2	(13.5)		(2.8)	B C F	褐色 2 口縁部横ナデ。体部外面未調整。底部外面磨削り。	N.9。口縁部/10
甕	3	(23.8)		(9.5)	A B C F	褐色 1 口縁部横ナデ。胴部外面磨削り、内面はナデ。	N.11。口縁部/30

4号住居跡 (第160図)

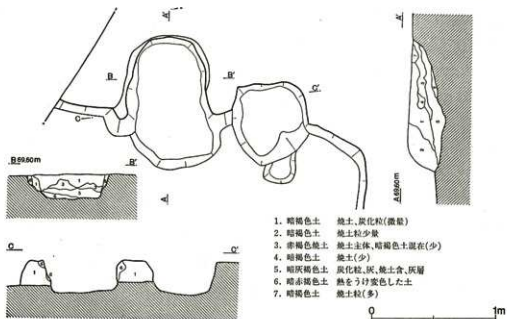
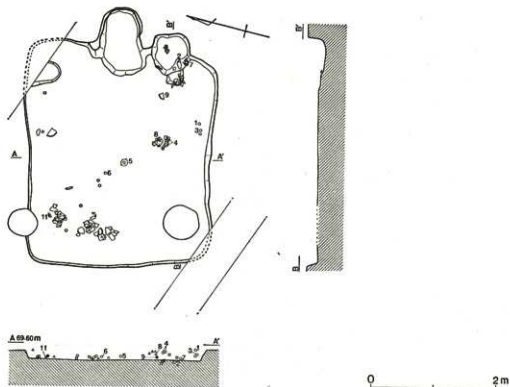
7・8 BC区を中心に位置する。北側コーナー部は調査区外にかかる。1号掘立柱建物跡と重複する。建物跡の柱穴が、上面において確認されたことから、本住居跡は建物跡より古い時期に属することが明らかである。

規模は3.66×3.13m、深さは西壁で0.18mである。プランはやや隅丸の方形に近く、南・北壁中央はそれぞれ、やや内側へくびれる形態を呈す。主軸方位はN-74°-Eを示す。床面は、暗茶褐色で非常に堅く、平坦である。

カマドは東壁中央に付設され、壁は約0.6m切り込んでいる。カマド内には非常に堅い焼土層がみられ、スサを泥じえる。カマド右側に、壁ラインを掘り込む貯蔵穴様の落ち込みが検出された。床面からの深さ約10cmを測る。

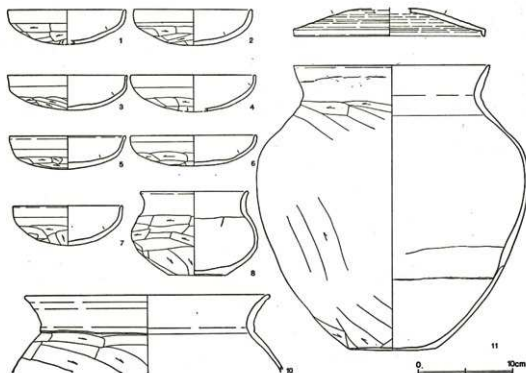
遺物は土師器杯、小型壺、甕、須恵器蓋、不明鉄器片1(30g)等で土師器がその多くを占める。

北界



1. 暗褐色土 焼土、炭化粒(微量)
2. 暗褐色土 焼土粒少量
3. 赤褐色土 焼土主体、暗褐色土混在(少)
4. 暗褐色土 焼土(少)
5. 暗灰褐色土 炭化粒、灰、焼土含、灰層
6. 暗赤褐色土 熱をうけ変色した土
7. 暗褐色土 焼土粒(多)

第160図 4号住居跡・カマド



第161図 4号住居跡出土遺物

4号住居跡出土遺物 (第161図)

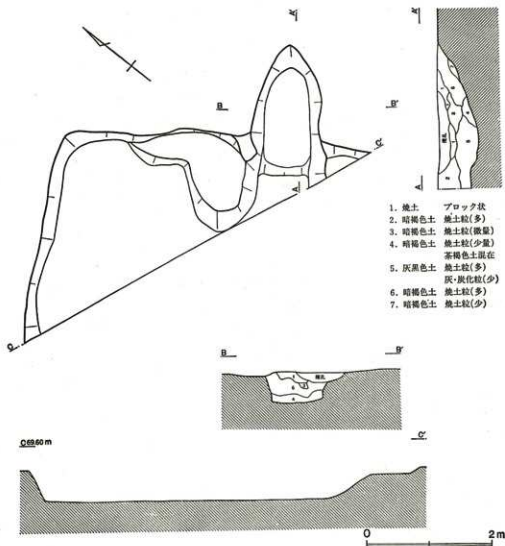
部種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	1	12.6		3.2	BC	橙褐色 2	口縁部横ナゲ。体部外面寛削り、内面ナゲ。	№.6。2/10
環	2	12.6		3.8	BCF	赤褐色 2	口縁部横ナゲ。体部外面寛削り、上位は未調整。内面はナゲ。	貯穴№.1、カマド内。ほぼ完。
環	3	12.8		3.7	ABC	褐色 2	口縁部横ナゲ。体部外面寛削り、上位は未調整。	№.7。1/10
環	4	13.4		3.9	BC	橙褐色 2	口縁部横ナゲ。体部外面寛削り、上位は未調整。	№.9、10。2/10
環	5	12.4		3.5	BCF	赤褐色 2	口縁部横ナゲ。体部外面寛削り、上位は未調整で、亀裂痕を残す。	№.16。2/10
環	6	13.4		3.2	BC	赤褐色 2	口縁部横ナゲ。体部外面寛削り、上位は未調整、内面はナゲ。	№.17。2/10
環	7	11.6		4.2	BC	赤褐色 2	口縁部横ナゲ。体部外面寛削り、上位は未調整。	№.1。2/10
小型壺	8	11.6	3.1	9.0	砂粒(多)。ABCDE	赤褐色 2	口縁部横ナゲ。胴部・底部外面寛削り、内面ナゲ。	№.15。口縁部、底部完形。胴部ほぼ完。
須恵蓋	9	(20.4)		(2.9)	G(多)E	青灰色 1	ロクロナゲ。天井部外面回転寛削り。	№.5。2/10。ロクロ右回り南比企産。

北廓

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師壺	10	(25.8)		(8.4)	A B C F	赤褐色 1	口縁部横ナデ。胴部外面は寛削り。胴部には削りによる段有り。	カマド。口縁部/4。
甕	11	(11.0)	(9.6)	30.6	A (多) B C D E	橙褐色 2	口縁部横ナデ。胴部・底部外面寛削り、内面ナデ。	Ⅱ.33。底部完存。口縁部1/4。胴部/4。

5号住居跡 (第162図)

5 E区に位置する。住居跡南西側が調査区外にかかり、カマドと北側コーナー部が検出された。

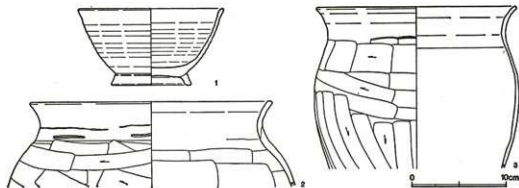


第162図 5号住居跡

規模は $(1.76 + \alpha) \times (2.48 + \alpha)$ m、深さは北壁で0.48mを測る。全体のプランは不明確であるが、主軸方位はN-60°-Eを示すと思われる。床面は比較的平坦である。

カマドは東壁に付設され、壁外へ約0.75m掘り込まれる。

遺物は須恵器高台付碗、土師器甕等がみられる。全体的には、土師器煮沸具破片が多くを占める。



第163図 5号住居跡出土遺物

5号住居跡出土遺物 (第163図)

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調		手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高		焼成			
須恵 高台 土師 甕	1	15.2	8.5	8.2	CD	灰 色 2	口縁～体部ロクロナデ。底部外面四角 未切りの後、高台に伴うロクロナデ。	覆土。1/30	
	2	(25.6)		(9.2)	ABCDEF	茶褐色 1	口縁部横ナデ。胴部外面荒削り、内面 荒ナデ。	覆土。口縁部1/30	
甕	3	(21.2)		(17.3)	ABCDEF	橙褐色 2	口縁部横ナデ。胴部外面荒削り。内面 は磨滅の為不明瞭。	覆土。口縁部1/30。胴部上 半1/30	

6号住居跡 (第164図)

5・6D、6E区に位置する。規模は2.88m×2.34m、深さは南壁で0.20mを測る。プランは長方形を呈す。主軸方位はN-66°-Eを示す。床面は部分的にやや凹凸がみられる。

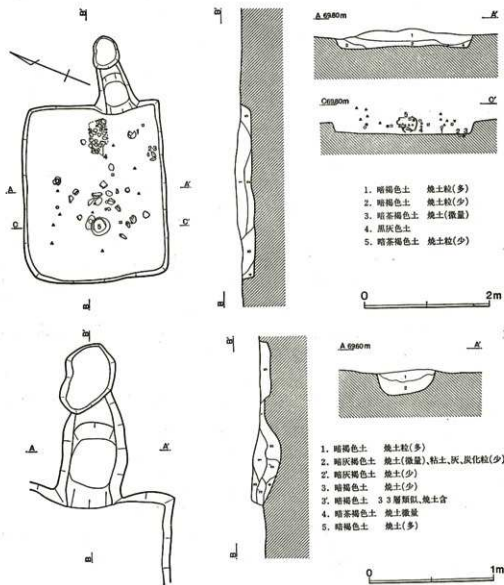
カマドは東壁南寄りに付設されている。煙道を含めた長さは約1.3mを測る。カマド主軸はN-55°-Eで住居跡主軸に比し、やや北側に傾く。

出土遺物には、土師器杯、須恵器大型甕片がある。そのうち土師器甕(5)は、住居跡中央部西南寄りの位置から正立した状態で出土した。底部は床面より約4cmの高さで、床直に近い。甕内の土は単層で、焼土・炭化物を少量含む暗褐色土である。また甕5付近には磨石や砥石様のものを含む複数の石の散布が認められた。

6号住居跡出土遺物 (第165図)

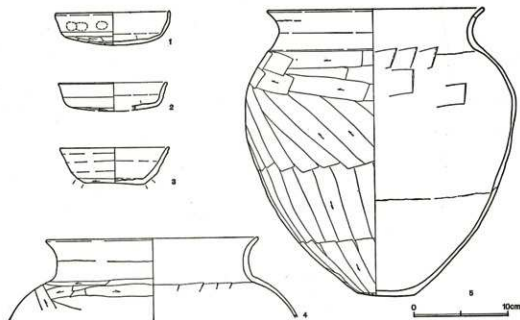
北府

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色 藍 焼 成	手 法 の 特 徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師	1	12.2		3.5	砂粒 (やや多)。ABCDE	茶褐色 3	口縁部横ナゲ。体部外面未調整。底部外面削り、内面ナゲ。	N.24。口縁部 $1/4$ 。体部～底部ほぼ完。
環	2	11.6		(3.9)	砂粒 (多)。ABCDE	茶褐色 1	口縁部横ナゲ。体部外面未調整。底部外面削り。	N.25。口縁部ほぼ完。体部～底部ほぼ完。
須恵	3	11.8	6.6	4.0	D (多) F (少) ABC E	灰 色 3	口縁～体部口クロナゲの後、体部下端即転削り。底部外面即転未切り。	N.25。口縁部 $1/4$ 。体部～底部完。口クロ右回り。



第164図 6号住居跡・カマド

器種	番号	大きさ (cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師壺	4	(22.8)		(8.7)	砂粒(多)。AB CDEF	茶褐色 1	口縁部横ナゲ。胴部外面荒削り、内面 荒ナゲ	N.13, 16。口縁部 ^{1/3} 。
甕	5	23.8 23.2	8.8	30.8	砂粒(多)。AB CDE	橙褐色 2	口縁部横ナゲ。胴部・底部外面荒削り 内面荒ナゲ及びナゲ。磨減著しい。	N.23。口縁部・胴部 ^{1/3} 。 底部完。



第165図 6号住居跡出土遺物

1～3号溝跡 (第166・167図)

1号溝跡は13・14A～D区に位置する。遺物は主として砂礫層より出土し、鬼高期の杯(1)、鉢、高杯等の破片の他、一部に五領期の破片を含む。

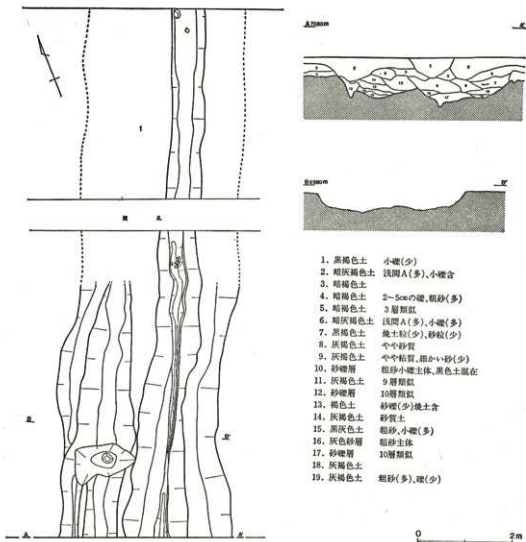
2号溝跡は15A～D、16C～E区に位置する。3号溝に切られており、より古い時期に属するものである。遺物は少量で、台付甕破片(2)、土師器壺底部、土師器杯片等が検出された。また、砂の堆積がみられ、若干ではあるが水の流れた形跡が窺われる。

3号溝跡は16C～E、17B・C区に位置する。2号溝跡を切っている。遺物は土師器片少量と、陶器片が出土している。覆土中に浅間砂(浅間A軽石と思われる)が多量に含まれることから、天明期以降に属するものと思われる。

4～14号溝跡 (第168・169図)

4号溝跡は深さ(確認面より)約0.2mでビール瓶等が出土。昭和初～戦前期の所産と考えられる。

5号溝跡は東側に向かうに従い底面レベルが上がる。遺物は常滑他中世期的大型甕片少量である。



第166図 1号溝跡

6号溝跡は深さ約0.1~0.3m。溝8によって切られている。内耳鍋片1片が出土している。

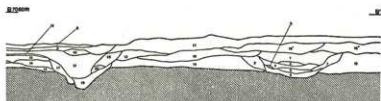
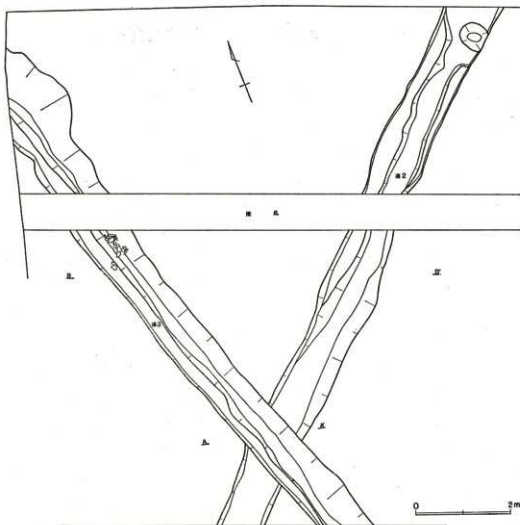
7号溝跡は深さ約0.3~0.6m。底面近くより、かわらけが、(4)を含めて計3片出土している。

8号溝跡は、溝6を切り、溝9に切られている。遺物は近世陶器片他が少量出土している。

9号溝跡は、溝8・10を切る。覆土に浅間A軽石が混じる。遺物は、かわらけ片等少量である。

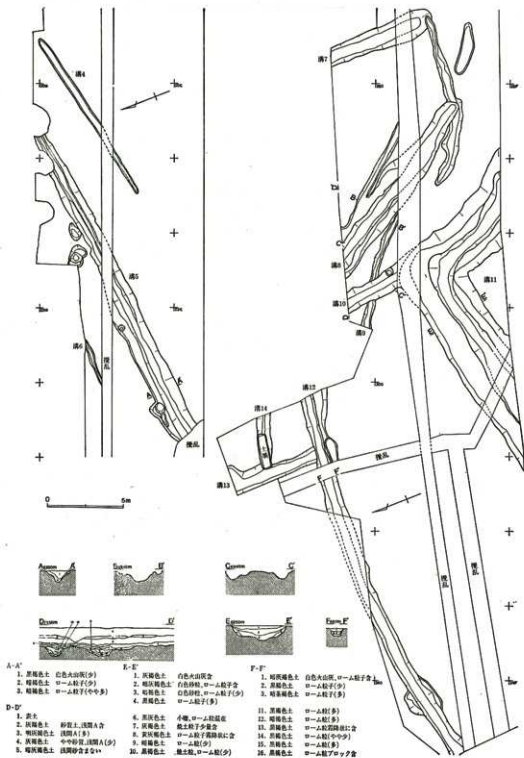
10号溝跡は、深さ約0.5~0.6mを測る。溝9によって切られている。

11号溝跡は深さ0.6~1.2mを測る。遺物(計925g)は、1層よりの出土が多い。かわらけ(5)、陶器皿(3)、内耳鍋、ほうろく等で、遺物・形態より、館跡の一部である可能性が考えられる。

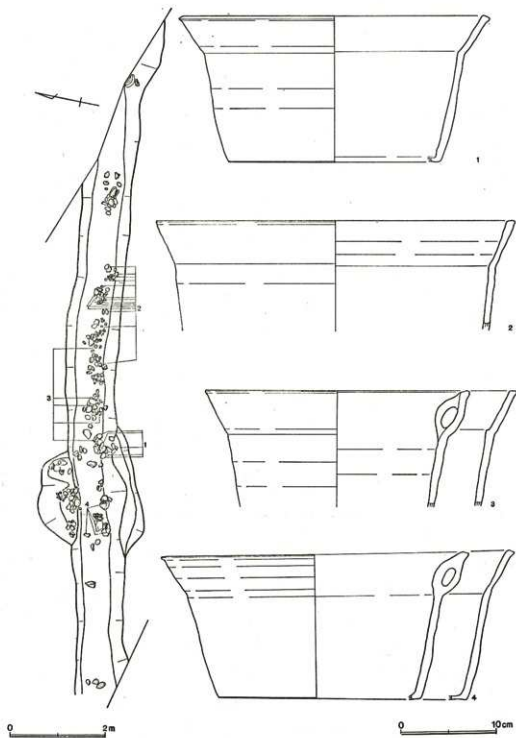


- | | | | | | |
|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|
| 1. 淡灰褐色土 | 粒子微密 | 11. 暗灰褐色土 | 洗間A(多)、焼土 | 16. 暗褐色土 | 洗間A(多) |
| 2. 暗褐色土 | 焼土粒子(少) | 12. 灰白色砂層 | 炭化粒、小礫混在 | 16'. 暗褐色土 | 洗間A(少) |
| 3. 淡褐色土 | 粗砂(少) | 13. 暗褐色土 | 洗間Aの純層 | 19. 褐色土 | 洗間A(微量)、 |
| 4. 灰褐色土 | やや粘質 | 14. 暗褐色土 | 洗間A(少) | | ロームブロック |
| 5. 暗褐色土 | 粗い砂(多) | 15. 暗茶褐色土 | 径1-5cmの小礫 | | 混在 |
| 6. 暗褐色土 | ローム粒(少) | 16. 黒褐色土 | (多) | A. 暗褐色土 | 粘質、焼土、 |
| 7. 褐色土 | 砂粒(少) | 16'. 黒褐色土 | ローム混在 | | 炭化粒(微量) |
| 8. 暗褐色土 | ローム、粗砂(少) | 17. 灰褐色土 | 洗間A(少) | B. 暗褐色土 | 洗間A(多) |
| 9. 暗褐色土 | 洗間A、小礫混在 | | 洗間A(やや多) | C. 暗褐色土 | 洗間A、 |
| 10. 黒褐色土 | 径5-10cmの礫 | | 16層類似 | | ローム粒(少) |
| | | | ローム粒(少) | D. 灰褐色土 | ロームブロック含 |
| | | | 洗間A(やや多) | | 倉 |

第167図 2・3号溝跡



第168図 4~14号溝跡



第160圖 12号溝跡出土遺物及び出土遺物分布圖

北席

12号溝跡は深さ約0.4~0.5mを測り、遺物は礫群に混在して、投棄された様な状況で出土した。図示した内耳鍋(1~4)の他、ほうろく、かわらけ、すり鉢、石臼等の破片が検出されている。

13号溝跡(深さ約0.3m)と14号溝跡は共に土壌によって切られており、遺物は検出されていない。



第170図 1・2・7・11号溝跡出土遺物

1・2・7・11号溝跡出土遺物(第170図)

器種	番号	大きさ(cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	1	(12.8)		5.0	ABC F	褐色 2	口縁部横ナゲ。体部外面焼削り。	溝1層土。2/10
台付甕	2	(13.0)		(4.7)	ABCE	褐色 2	口縁部横ナゲ。胴部外面ヘケ目調整。内面に接合痕を残す。	溝2層土。口縁部/10
陶器皿	3	12.1	6.8	2.3	D・砂粒(微)。極めて緻密。	淡褐色 1	底部外面回転焼削り。高台削り出し。器面全体に釉薬を施す。器内灰白色。	溝11層土。2/10。文様茶色。底部内面に重ね焼成。
かわらけ	4	7.5	2.1	5.0	C(少) F。緻密。	赤褐色 2	ロクロナゲ。底部外面回転未切り。内面ナゲ。	溝7層土N.3。ほぼ完。口唇部に油煙付着。
かわらけ	5	9.2	6.1	1.9	AC F	褐色 2	ロクロナゲ。底部外面回転未切り。	溝11層土。2/10

12号溝跡出土遺物(第169図)

器種	番号	大きさ(cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
内耳鍋	1	(33.0)	(22.7)	(15.7)	AC F	黒褐色 2	口縁部横方向の内ナゲ。胴部外面ナゲまたは未調整。内面横~斜方向の内ナゲ。	N. 14, 19, 20, 28, 1/10。器内褐色。底部はナゲ。
内耳鍋	2	(38.2)		(11.7)	C F	灰色 2	口縁部、胴部内面横方向の内ナゲ。胴部外面ナゲまたは未調整。	N.50~54, 61, 70, 78, 79, 1/10
内耳鍋	3	(28.2)		(12.4)	AC	黒色 2	口縁、胴部横方向の内ナゲ。胴部外面下位横~斜削り。内耳周辺指ナゲ。	N.30, 31, 41。2/10。器内灰褐色。外面に煤付着。
内耳鍋	4	32.9	21.6	15.4	A・砂粒	黒色 2	口縁部横方向ナゲ。胴外面ナゲ又は未調整。内面斜~横方向ナゲ。底部磨成。	N.2~4, 75, 77。2/10。器内灰褐色。外面に煤付着。

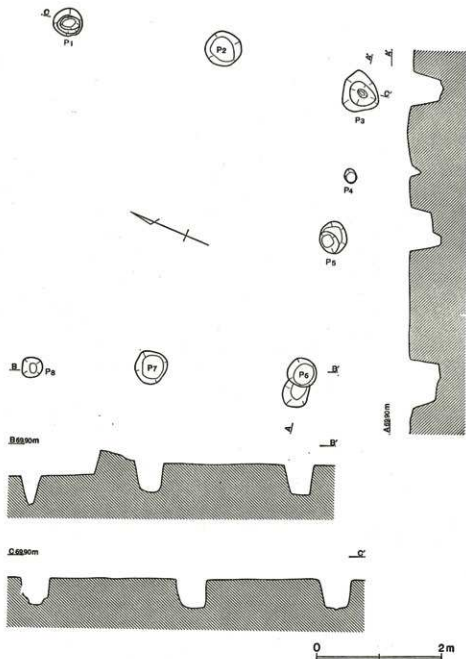
1号獨立柱建物跡(第171図)

7・8B~D区を中心に位置し、4号住居跡を切っている。全体の規模が不明確であり疑問が残

北原

るが、ひとまず掘立柱建物跡の一部として扱っておきたい。柱間は東側柱穴列で2.4~2.6m、西側で2.0~2.5m、南側2.2~2.5mで、南側柱穴列及び西側中央の柱穴は、掘り方底面のレベルを同じくする。

遺物は土師器甕、坏片少量が柱穴より出土している。国分期初頭を中心とする時期が考えられる。



第171図 1号掘立柱建物跡

Ⅶ 一丁田遺跡の調査

1. 遺跡の概観

一丁田遺跡は、本庄市今井字一丁田 148 他に所在する。調査前は、女堀川流域の沖積扇状地上に形成された左岸の水田地帯として土地利用がなされていた。調査対象区は、取付道路建設に伴って現道拡幅部分（A区）および水田地帯の削平を受ける道路幅部分（B・C区）である。今回報告の川越田・梅沢遺跡は女堀川を挟む右岸自然堤防上に位置し、東方 200m には後遺跡が位置する。

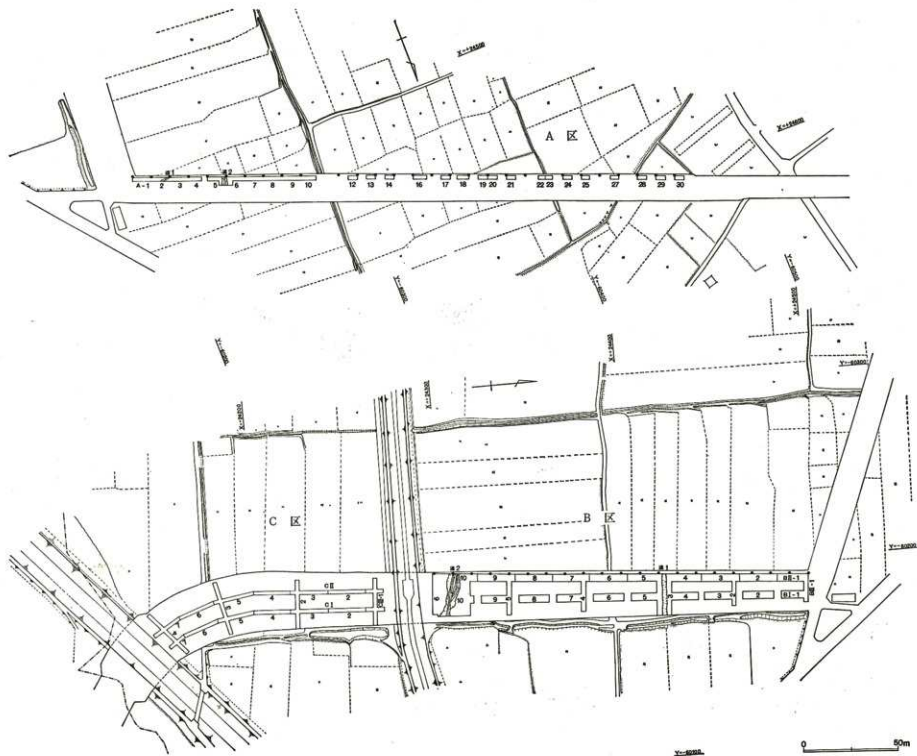
発掘調査は、昭和55年12月から昭和56年3月にわたって行なわれた。調査区はA・B・C区に分けられ、A区は西端で北廓遺跡に隣接する東西区域で、B・C区は九郷用水によって分割され、C区南端に女堀川を臨む北北区域である。調査はトレンチを入れて行なわれた。A区は拡幅部分に幅 3m、10mごとに地点を1～30まで区切った。B区は幅 4mのⅠ・Ⅱトレンチを南北に2本、東西方向にⅢトレンチを入れた。C区も幅 2mで同様に行なった。第Ⅹ系国家座標のX軸・Y軸の数値は、全測図（第172図）に示した通りである。

検出された遺構は溝跡 4 条である。古墳時代の遺構として、A区—2号溝とB区—1号溝が検出された。2号溝は覆土上層に、榛名二岳降下火山灰（FA）を堆積させる。出土遺物は土師器鉢・埴の口縁部破片等が検出され、その開鑿を五領期に求められる。この時期に左岸の開鑿が行なわれていたことが知られる。1号溝は第9層に被覆されており、第7層がB軽石層であること、出土遺物に横散壊の破片を伴うことから、鬼高期に使用されていたと考えられる。その他、B区—2号溝は自然河川としてとらえられ、第9層に被覆されているために古墳時代の流路として考えられる。A区—1号溝は、陶器・土鍋等の出土遺物から中世以降としてとらえられる。

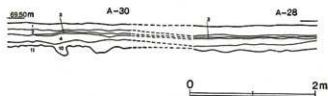
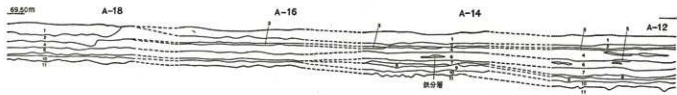
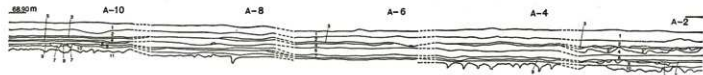
本遺跡は女堀川条里遺構として知られる地域で、この地域の水田は一町（約 109m）四方に地割され碁盤目状になる。遺跡西方 500m の位置には、久城田条里制残存遺構が存在する。本遺跡調査がトレンチ調査のため面的成果を欠いているが、層位的調査では、上面に現代耕作土—浅間山系A軽石降灰層—水田耕作土層—茶褐色土層—水田耕作土層—灰茶褐色土層—浅間山系B軽石降灰層—黄茶褐色粘土層—青黒色粘土層と順次堆積している。このことから、黄茶褐色粘土層が奈良・平安期の水田面として考えられる。青黒色粘土層は、遺物の検出は認められないが、五領期・鬼高期等の溝が切り込んでいることから該期に伴う水田耕作土層と考えられる。

見玉地方における条里遺構については、多くの検討がなされてきている。本遺跡の「一丁田」という小字名も条里に由来するもので、この地域では他に五反田・六反田・八反田・九反田・深町等の小字名が散見できる。条里復元を試みた六反田遺跡（1981、梅沢）では条里区画の基準点を各郡毎に存在する式内社及び式外社を考慮して検討が加えられている。本跡からは、明瞭な条里型地割を推定すべき坪や条里の遺構が認められないが、調査区域を流れる九郷用水や女堀川の流路は注目されるべき点である。

この時期の集落として立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群が存在し、更には将監塚・古井戸遺跡の大集落との有機的関連を考える必要がある。



第172圖 一丁田遺跡全測圖



1. 暗灰色土 (水田耕作土)白色火山灰含む
2. 暗黄灰色土 暗灰色土中に多量の白色火山灰含有、微量の酸化鉄沈着層
3. 淡灰褐色土 火山灰(浅間Aと思われる)の堆積層
4. 茶褐色土 水田床土、酸化鉄分沈着層
5. 茶褐色土 多量の白色火山灰と酸化鉄分含有
6. 灰茶褐色土 酸化鉄分多量に含有
7. 灰茶褐色土 多量の黄褐色土火山灰含有
8. 青黒色粘土 6層よりも細かい火山灰(径0.5-1mm)を多量に含有
部分的に確認される、含有物は殆どなく粘性強い
9. 黄茶褐色粘土 多量の酸化鉄分含有、粘性強い
10. 青黒色粘土 酸化鉄分を多量に含む、11層にしみこんだような状態、下部は不整合
11. 茶褐色粘土 酸化鉄分を多量に含有、粘性強い

2. A区の遺構と出土遺物

A区は、沖積扇状地で現在水田地帯として利用されている。検出された遺構は溝跡2条である。その他には、断面に鉄分沈澱層や粘質土層が確認され、床土と認識される。1号溝跡は上層に浅間山系A軽石の純層、B軽石を含む基本層序第6層を切り込んで閉塞されている。2号溝は覆土上層に榛名山二ツ岳降下火山灰（FA）が検出され、出土遺物から見て五領期に比定される。流路は女堀川に平行し、南北に走る。

1号溝跡（第174図）

A-2区。調査区内東側に位置する。北東から南西方向に斜向き、走向はN-88°-Eを指す。

規模は確認面で幅50cm、深さ30cmを測る。覆土は微量の火山灰を含み、多量の鉄分を沈澱させ、粘性が非常に強いことから水田跡に伴う水路と考えられる。溝はN層の床土より被覆され、上部には浅間山系A軽石の純層が認められ、B軽石を含む6層を切り込んでいる。出土遺物は、土鍋の底部小破片が2点検出され、これらの点から中世遺構として位置付けられる。

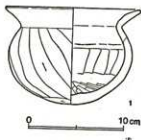


第174図 1号溝跡

2号溝跡（第176図）

A-5区。調査区内東側に位置し、1号溝跡の西方12mの距離にある。南から北へ緩やかな傾斜をもつ。走向方位はN-24°-Eを指す。

規模は南側で幅2m、北側は3.56mを測り、調査区中央で大きく拡幅する。深さは確認面から1.42mを測り、断面の形状は逆台形を呈す。土層は基本層序第7層（浅間山系B軽石火山灰）には、すでに埋没している。覆土上層のC層は分析の結果、榛名山二ツ岳降下火山灰（FA）に対比され、B層からも検出される。

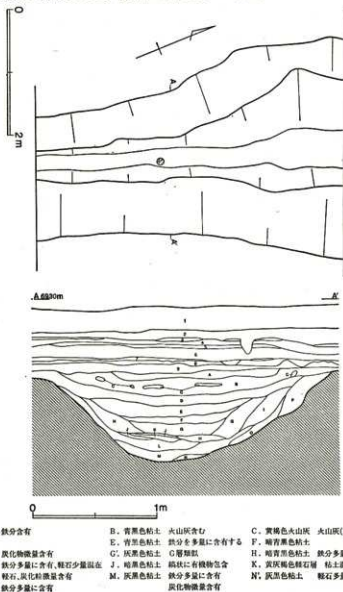


第176図 2号溝跡出土遺物

出土遺物は図示した土師器鉢が溝中央部、E・F層にかけて逆位の状態で検出され、他に埴の口縁部小片がE層中より検出された。これらの点から五領期の溝と位置付けられ、遺跡東方の川越田・柳沢遺跡との関連性が示唆される。

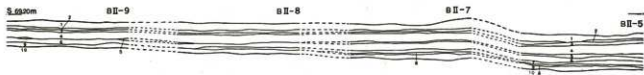
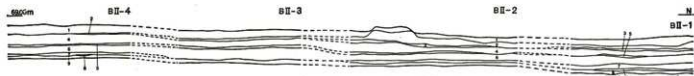
2号溝跡出土遺物(第175図)

土師器鉢。大きさは口径14.2cm、器高、10.3cm、淡褐色で焼成良好。胎土はA B C D Fを混入させる。口縁部横ナデ。体部外面篋削り、内面篋ナデ。底部内面に棒状工具によるナデを施す。球形形状を呈し、口縁部大きく外反させる。覆土中より出土。ほぼ完形。



- | | | | | | |
|-----------|----------------|-----------|------------|------------|-----------------|
| A. 青黑色粘土 | 鉄分含有 | B. 青黑色粘土 | 火山灰含む | C. 黄褐色火山灰 | 火山灰(F A 相色)集中部分 |
| D. 暗青黑色粘土 | | E. 青黑色粘土 | 鉄分を多量に含有する | F. 暗青黑色粘土 | |
| G. 青黑色粘土 | 炭化物微量含有 | G'. 灰黑色粘土 | 古層相取 | H. 暗青黑色粘土 | 鉄分多量、炭化物少量含有 |
| I. 灰黑色粘土 | 鉄分多量に含有、軽石少量混在 | J. 暗黑色粘土 | 鍋状に有微物包含 | K. 黄灰褐色軽石層 | 粘土混在、粗い粒子 |
| L. 暗青黑色粘土 | 軽石、炭化粒微量含有 | M. 灰黑色粘土 | 鉄分多量に含有 | N'. 灰黑色粘土 | 軽石多量に含有、やや細粒 |
| O. 茶褐色粘土 | 鉄分多量に含有 | | 炭化物微量含有 | | |
| P. 黄褐色粘土 | | | | | |

第176図 2号溝跡



土層註

1. 暗灰色土 (水田耕作土)白色火山灰含む
2. 暗黄灰色土 暗灰色土中に多量の白色火山灰含有、微量の酸化鉄沈着
3. 黄褐色土 水田床土、酸化鉄分沈着
4. 茶褐色土 多量の白色火山灰と酸化鉄分含有
5. 灰茶褐色土 酸化鉄分多量に含有
6. 灰茶褐色土 多量の黄茶褐色火山灰含有、酸化鉄分を微量含有
7. 灰茶褐色土 6層よりも細かい火山灰(径0.5-1mm)を多量に含有
8. 青黑色粘土 部分的に確認される、含有物は殆どなく、粘性強い
9. 黄茶褐色粘土 多量の酸化鉄分含有、粘性強い
10. 青黑色粘土 酸化鉄分を多量に含む、11層にしみこんだような状態
下部は不整合
11. 茶褐色粘土 酸化鉄分を多量に含有、粘性強い



第177図 B区土層図

3. B区の遺構と出土遺物

B区は女堀川によって運ばれてくる肥沃な土を堆積させる沖積扇状地で、現在水田地帯として利用されている。溝跡1条、河川跡1条。A区同様、断面には鉄分沈澱層や粘質土層が確認される。

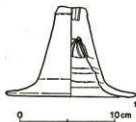
1号溝は、上面に浅間山系B軽石を含有する基本層序第7層・9層によって被覆されている。覆土中からは古墳時代鬼高期の模倣杯が小破片なれど数点、他に短脚の高坏脚部片、図示した絞り痕をもつ高坏脚部等が検出された。2号溝としたものは、その規模や形態から自然河川として考えられる。出土遺物は検出されない。1・2号溝とも東西方向に伸び、緩やかな地形の傾斜に伴って西から東へ流れる。東方約150m程に女堀川が流れるため、そこへ水を落としたと考えられる。現在用排水路として使用されている九郷用水路の開鑿時期は不明だが、やや流路がずれているにせよ、条里水田施行以前に河川が存在していたことは確かである。また、1号溝の存在によって、鬼高期に土木灌漑事業が行なわれていたことが窺える。

1号溝跡（第179図）

B区中央のⅢ-3地点で検出された。東西方向に走り、両端は調査区外に伸びる。走向方位N-78°-Wである。

本跡は溝底が大きく二条存在し、南側は北側の底に比べて同レベルか、-15cmの高低差を測る。確認面での幅は、1.90~2.50m、深さ15~45cmを測る。長さは22mの範囲で調査した。

出土遺物は、図示した高坏の脚部が溝東端部から出土した。杯部差し込み式で、脚内面に絞り目をもつ。この他、土師器模倣杯の小破片が若干と甕の破片他が検出された。覆土上部を浅間山系B軽石を多量に含む層が検出され、A区2号溝と同様、第10層を切り込んで開鑿されている。



第178図 1号溝跡出土遺物

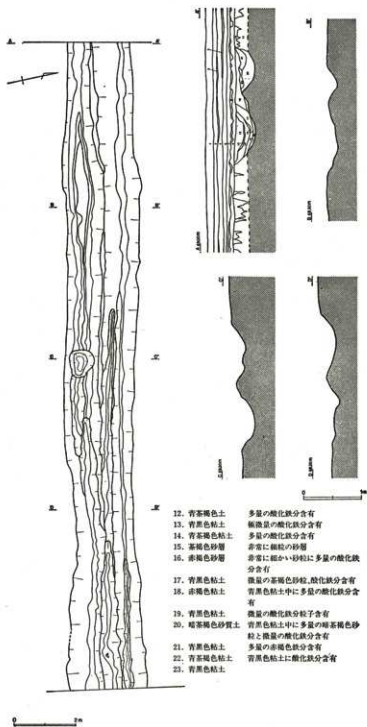
1号溝跡出土遺物（第178図）

土師器高坏。推定脚径12.2cm、残高19.7cm、橙褐色を呈し、焼成良好である。胎土はABCを混入させる。裾部横ナデ、柱状部外面ナデを施し、内面上位に絞り目、下位には輪積み痕が認められる。杯接合部には棒状工具痕が認められる。覆土出土。柱状部ほぼ完存。裾部1/3残存。

2号溝跡（第180図）

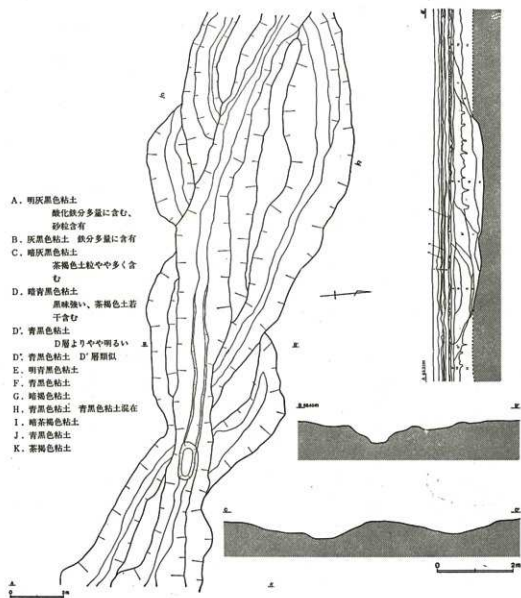
B区Ⅰ-Ⅲ-10地点にかけて検出された。走向は概ね東西方向に走り、西側を上流とする。両端は調査区外に伸び、東方150mには女堀川、すぐ南側には現九郷用水堀が流れている。

本跡は数度にわたって流路を変化させており、弱いながらも蛇行している。場所によっては浸食



第179図 1号溝跡

を受けた痕跡が見られる。覆土は何層にも渡って茶褐色土粒子、及び赤褐色鉄分の沈澱層が認められ、溝の流水によって運ばれてくる土壌堆積物白砂粒子を混在させる。こうした堆積物により溝底が高くなり、氾濫により流路が変化したことが推定され、人為的溝とするより自然河川としての可能性が考えられる。出土遺物は検出されていないが、覆土上面は、浅間B軽石を含有する水田耕作面が存在し、第10層を切っていることから、古墳時代以前に流れていた、現在の九郎用水堀の前身の河川の可能性も考えられる。



第180図 2号溝跡



- 1-11層はB区土層図と同一
 A. 暗灰色土 微量の火山灰と腐植土含む
 B. 暗灰色土 A層よりも火山灰を多く含む
 C. 茶褐色土 酸化鉄分多量に含む
 D. 青灰色土 微量の火山灰含む
 E. 淡灰色土 多量の礫混在(道路面)
 F. 礫層
 G. 茶褐色土 微量の火山灰、鉄分含有



4. C区の遺構と出土遺物

C区は九郷用水路と女堀川に挟まれた区域で、遺構の検出は認められなかった。トレンチ調査のため、陶器片と土器器片の採集にとどまった。土層断面によると自然堤防の形成は認められず、女堀川左岸と右岸の様相の違いが明らかである。

一丁目遺跡の鉱物分析結果

鉱物分析をバリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。その結果報告をまとめて記したい。

I 基本層位の結果報告について

第1層 濃灰色土層(現代耕作土) 第2層 白色火山灰層 第3層 赤褐色鉄分層 第4層 茶褐色土層 第5層 赤褐色鉄分層 第6層 灰茶褐色土層 第7層 黄茶褐色火山灰層 第8層 青黒色粘土層 第9層 黄茶褐色粘土層 第10層 青黒色粘土層 第11層 茶褐色粘土層。

本地点の分析結果からは、角閃石があまり産出せず、斜方輝石を主とし、単斜輝石、不透明鉱物を伴った鉱物組成が見られた。完新世以降の北関東においては斜方輝石、単斜輝石を含んだ浅間火山の活動が最も活発であったほか、榛名山二ツ岳火山の形成に由来する角閃石を伴った噴火活動が古墳時代にあったとされている。本地域は榛名火山の遠く南方に位置し、角閃石が非常に少ないことから、本地域における重鉱物の由来は浅間火山によるものと考えられる。

第2層は3~4mmの白色軽石を多く含む層で、粗粒な砂分が非常に多い。軽石は発泡がよく、あまり風化しておらず新鮮である。粗粒な砂分は粗い鉱物粒子が多く、異質な岩片はあまり見られない。この層は浅間A軽石層に対比されると考えられ、降下時期は天明3年(1783年)とされている。

第7層は3~4mmの褐灰色軽石を含み、砂分が非常に多い。軽石はやや風化し、発泡もあまり良くないものが見られる。砂分は鉱物粒子以外に異質な岩片が多く含まれている。浅間C軽石層は異質な岩片を殆んど含まないとされていることから、第7層は浅間B軽石層に類似していると思われる。降下時期は天仁元年(1108年)とされている。

II A-5区 2号溝跡

B・C層にテフラが存在し、以下のような理由で榛名火山から噴出した二ツ岳降下火山灰層(F A)に対比されると考えられる。C層は野外においてレンズ状にB層中に夾在する火山灰層である。この粒径分布をみると、 $1/4 \sim 1/8$ および $1/8 \sim 1/16$ mmの細粒な砂分から構成されていて、浅間A軽石層・B軽石層とは性質を異にする。また、火山ガラス片を附着した長柱状自形結晶からなる緑色角閃石が7~8%産出し、赤褐色角閃石・緑レン石等の破片も伴う。これは新井 房夫(1979、「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」考古学ジャーナル、157)のFAの記載に一致する。

(河西 学)

Ⅷ 川越田遺跡の調査

1. 遺跡の概観

川越田遺跡は女堀川と県道本庄・鬼石線とに挟まれた本庄市大字今井字川越田から見玉町大字高岡にかけて所在する。遺跡は女堀川右岸の自然堤防上の標高69.5m付近に立地し、調査前は水田と一部菜園として土地利用が図られてきた。また、五領～鬼高期の大集落として著名な後張遺跡は、本遺跡の東方約200mの地点に位置する。

調査は昭和56年4月、まず遺構の分布状況をみるための確認調査から始まり、本調査は水田の水位が低下する11月から翌年の5月にかけて実施された。調査方法はグリッド方式に基づく。調査区全域に対し、5×5mを単位とするグリッド網を被せ、更に南北に数例、東西にアルファベットを付し、両者の交叉する地点のグリッド名称とした。なお、グリッドの基本軸は第K系国家座標のX軸・Y軸に対応し、その座標値は全測図に示しておいた。

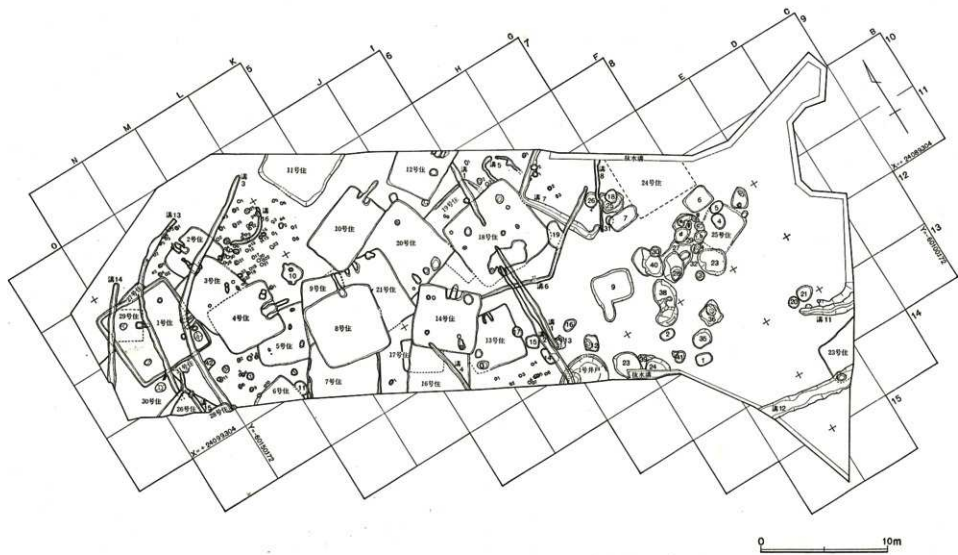
調査により検出された遺構には、五領～鬼高期の堅穴住居跡29軒、土壇37基、溝跡14条、井戸状遺構1基とピット群がある。住居跡は狭い調査区のなかで複雑に重複している。特に中央部から西域にかけて密集度が高く、東端部では逆に遺構分布密度は薄い。これを地形的にみると、遺構密集区域の標高が高く、東端部に向かうに従って下っていて、自然堤防頂部の狭隘な空間を居住地としていたことがわかる。また1・30号住居跡の西側では女堀川の旧流路となっており、地山が削平されて遺構は残存していなかった。

集落の継続時期は上記のとおり五領～鬼高期に相当し、該期の大集落である後張遺跡と距離的にも時間的にも近く、同一集落と考えても良からう。ただ後張遺跡の主体が鬼高Ⅰ式期で、Ⅱ式期の古段階で終息するのにに対し、本遺跡では鬼高Ⅱ式期の住居跡が多いことなど、細部の時期的構成はかなり異なる側面も認められるが、集落内の移動現象と考えれば説明がつく。いずれにせよ、両遺跡は有機的な関連性をもった遺跡と言えよう。

次に本遺跡の特徴的な遺構と遺物について記すと、まず五領期のタタキ目を施す土器群があげられる。これは24・25号住居跡と7号溝跡から検出されており、甕の胴部下にタタキ目を施すものと、胴部全面に亘り刷毛目の下に観察されるもの、並びに全面タタキ目の鉢形甕が存在する。県内でも類例の少ない好資料といえよう。

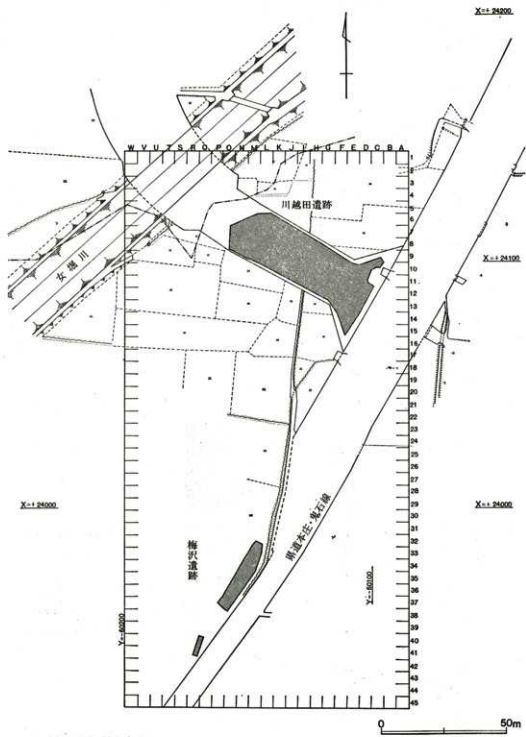
また、鬼高期に属する1号住居跡は掘り込みが深く、形態も整っており、床面及び覆土から多量の土器が出土した。特にカマド周辺の床面と貯蔵穴からの出土が多く、土師器杯・甕・高坏が主体を占める。

その他、16号溝として扱ったものは、平面形態が弧状を呈する小規模な溝状遺構で、周囲にピット群が配置されること、また、その位置する一角に住居跡が作られていない等、ミカド遺跡で報告された円形環状遺構との類似点が認められる。時期は明確でないが、あるいは同一視できるかもしれない。



第182図 川越田遺跡全測図

川越田



第183図 川越田・梅沢遺跡グリッド配置図

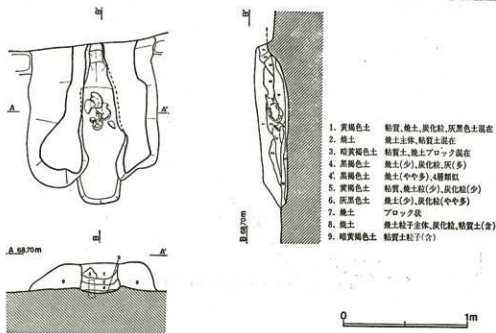
2. 遺構と出土遺物

1号住居跡 (第184・185図)

調査区西端の7N・8N区を中心に位置する。重複関係は、27・30・31号住居跡を切り、3号住居跡にカマド煙道部から東壁の一部を破壊されている。また、29号住居跡は本住居埋没後に構築され、1号住居跡確認面にカマドの掘り方のみ検出されている。東西辺6.7m、南北辺6.78mの整った方形プランを呈する大型住居跡で、床面までの深さは北壁部で42cmと深く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦であった。主軸方位は、N-88°-Eを指す。

カマドは東壁の南寄りの位置に付設される。壁外にのびると思われる煙道部は、3号住居跡により破壊され不明であった。暗黄褐色の粘質土で構築され、床面下の掘り込みは約5cmと浅い。また燃焼部には棒状の石製支脚が据えられていた。主柱穴は住居対角線上に4本規則的に配置される。貯蔵穴はカマド右側に穿たれ、76×66cm、深さ50cmの規模を有する。壁溝は幅10～50cm、深さ4～10cmを掘り、壁に沿って全周する。その他、カマド・貯蔵穴間に深さ約20cmのビツが検出された。

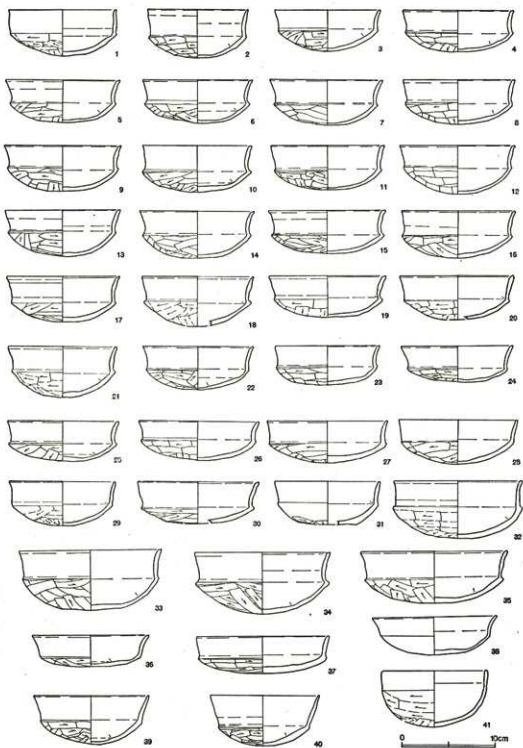
遺物は土師器杯を主体に多量に検出され、400点を数える。特に住居東半部、カマド周辺の床面からの出土が多く、貯蔵穴及びP₁では、周囲から流れ込んだような状況が観察された。住居中央から西壁にかけては、逆に床面から浮いて出土する例が目立ち、埋没過程の混入もみられる。出土遺物は、土師器杯を主体に高杯・甕類、須恵器杯・蓋、鉄製鎌、白玉などがある。



第184図 1号住居跡カマド



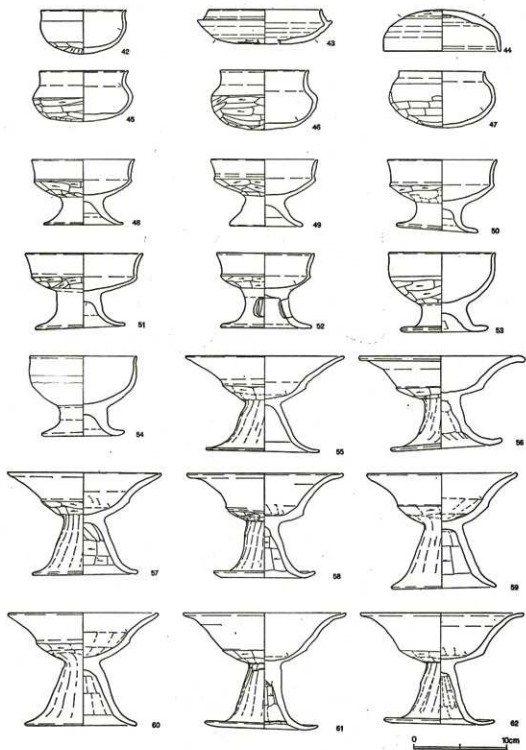
第185圖 1·27·31号住居跡



第186图 1号住居跡出土遺物(1)

1号住居跡出土遺物(第186~192図)

器種	番号	大きさ(cm)			胎土	色調 焼成	手法の特徴	出土位置・残存率
		口径	底径	器高				
土師環	1	11.4		4.9	BC	橙褐色 1	体部外面寛削り後ナダ。口縁部横ナダ。	灰土。1/4。
環	2	10.8		5.2	F(多)ABC	茶褐色 2	体部外面寛削り、内面ナダ。口縁部横ナダ。	N.2。完存。内面は全体が黒褐色。
環	3	11.4		4.4	F(多)BC	茶褐色 2	体部外面寛削り、内面ナダ。口縁部横ナダ。	N.75。ほぼ完。口唇部に沈線状のくぼみめぐる。
環	4	11.9		4.5	F(多)AC	赤褐色 3	体部外面寛削り上位ナダ、内面ナダ。口縁部横ナダ。	N.385。完存。口唇部に沈線状のくぼみめぐる。
環	5	12.2		4.6	F(多)ABC	褐色 2	体部外面寛削り、内面ナダ。口縁部横ナダ。	N.331。完存。口唇部に沈線状のくぼみめぐる。
環	6	11.8		4.6	F(多)ABC	茶褐色 2	体部外面寛削り上位ナダ、内面ナダ。口縁部横ナダ。	N.345, 340。コマド3。ほぼ完。
環	7	12.3		4.8	F(多)ABC	橙褐色 4	体部外面寛削り、内面ナダ。口縁部横ナダ。磨減著しい。	N.303。完存。口唇部に沈線状のくぼみめぐる。
環	8	12.0		4.8	ACF(多)B	橙褐色 3	体部外面寛削り上位ナダ、内面ナダ。口縁部横ナダ。	N.370。完存。口唇部に沈線状のくぼみめぐる。
環	9	12.6		4.0	F(多)ABC	淡褐色 3	体部外面寛削り、内面ナダ。口縁部横ナダ。磨減著しい。	N.206。完存。口唇部に沈線状のくぼみめぐる。
環	10	11.7		5.0	F(多)ABC	褐色 3	体部外面寛削り、内面ナダ。口縁部横ナダ。	灰土。1/4。口唇部に沈線状のくぼみめぐる。
環	11	12.2		4.8	CF(多)AB	橙褐色 3	体部内面寛削り上位ナダ、内面ナダ。口縁部横ナダ。磨減著しい。	N.298。完存。口唇部に沈線状のくぼみめぐる。
環	12	12.4		5.2	A(多)CF	橙褐色 4	体部外面寛削り、内面ナダ。口縁部横ナダ。磨減著しい。	N.410。完存。口唇部に沈線状のくぼみめぐる。
環	13	12.4		5.0	F(多)ABC	褐色 3	体部外面寛削り上位ナダ、内面ナダ。口縁部横ナダ。磨減著しい。	N.83, 321。完存。口唇部沈線状のくぼみめぐる。
環	14	12.3		5.1	CF(多)AB	赤褐色 3	体部外面寛削り上位ナダ、内面ナダ。口縁部横ナダ。磨減著しい。	N.418。完存。口唇部に沈線状のくぼみめぐる。
環	15	12.6		4.6	F(多)ABC	赤褐色 2	体部外面寛削り上位ナダ。口縁部横ナダ。	N.158。完存。口唇部に沈線状のくぼみめぐる。
環	16	12.2		5.1	AF	褐色 3	体部外面寛削り上位ナダ、内面ナダ。口縁部二工程の横ナダ。磨減著しい。	N.255。1/30。口唇部に沈線状のくぼみめぐる。
環	17	10.1		4.9	BCE	橙褐色 1	体部外面寛削り、内面ナダ。口縁部横ナダ。	N.164, 165。ほぼ完。口唇部沈線状のくぼみめぐる。
環	18 (12.0)		(5.4)	BAF	橙褐色 1	体部外面寛削り後ナダ。口縁部横ナダ。	N.320。1/30。	
環	19	12.6		4.4	BCF	橙褐色 1	体部外面寛削り後ナダ、内面ナダ。口縁部横ナダ。	N.373。1/80。
環	20	12.2		4.7	BEF	橙褐色 1	体部外面寛削り、内面ナダ。口縁部横ナダ。磨減著しい。	N.338。1/80。口唇部に沈線状のくぼみめぐる。
環	21	11.6		5.4	C	橙褐色 1	体部外面寛削り。口縁部横ナダ。体部内面中央に指頭痕残す。	N.232。ほぼ完。
環	22	11.9		4.7	F(多)ABC	橙褐色 4	体部外面寛削り、内面ナダ。口縁部二工程の横ナダ。	N.417。完存。
環	23	11.3		4.2	CF(多)AB	橙褐色 4	体部外面寛削り上位ナダ、内面ナダ。口縁部横ナダ。磨減著しい。	N.282。完存。
環	24	12.1		4.9	F(多)ABC	赤褐色 3	体部外面寛削り上位未調整、内面ナダ。口縁部横ナダ。	N.352, 347。ほぼ完。
環	25	12.0		4.3	F(多)ABC (少)	淡褐色 3	体部外面寛削り上位ナダ、内面ナダ。口縁部横ナダ。	N.52。ほぼ完。
環	26	13.0		4.2	AF(多)BC	橙褐色 4	体部外面寛削り、内面ナダ。口縁部横ナダ。磨減著しい。	N.224。完存。



第187图 1号住居跡出土遺物(2)